

NO. 46
SUMMER
1974

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：国際化時代の英語教育

西山 千・平野敬一・村田聖明・トミー植松

緒方 勲・渡辺益好

(座談会) これからの中の英語教育 外山滋比古

國弘正雄・中村 敬・若林俊輔



英語展望

NO. 46
SUMMER
1974

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【国際展望】

ことばと文化.....	丸山圭三郎	2
文化交流の明暗.....	武田勝彦	4
外国语の學習.....	高野フミ	6
ヨーコさんやユズルさんは 日本語をおしえないべきだ.....	片桐ユズル	8

【特集】国際化時代の英語教育

座談会 これからの英語教育	外山滋比古・國弘正雄・中村 敬・若林俊輔	10
英語のヒアリング.....	西山 千	20
英語を読む力.....	平野敬一	22
書く力の養成.....	村田聖明	24
英語で話すことの指導.....	トニー植松	26
Pattern Practice から Communication Practice へ.....	緒方 勲	28
Pattern Practice から Communication Practice へ.....	渡辺益好	30
基礎語彙について(1).....	服部四郎	32
スポーツと英語.....		38
AUSTRALIAN ENGLISH	Robert D. Eagleson	40
英語表現あれこれ.....	トニー植松	48
【新刊書評】『日本とアメリカ比較文化論』.....	山岡清二	50
新刊紹介.....		52
展望通信.....		56

表紙デザイン・カット
太田 英男

ことばと文化

MARUYAMA KEIZABURO
丸山 圭三郎

◆「ただいま」は **maintenant**?

私たちがことばに対してもつてあるいくつかの常識の中には、実はとんでもない間違った考えも少なくありません。その典型的なものは、「ことばとは物や概念の呼び名である」という考え方です。私たちは物に囲まれて生きています。そして物の一つ一つには確かに名前がついています。テーブル、万年筆、本…こうした具体的な物ばかりでなく、愛、憎しみ、国家、民主主義というような、抽象的概念や物の性質にもすべて名前があります。そのため、言語とは名称のリストであり、それぞれの国語の単語が、現存の事物や概念と 1 対 1 の対応をしているように思いこんでいる人が少なくないのです。たとえば、「馬」という動物は英語では horse、フランス語では cheval、ドイツ語では Pferd と呼ばれているのだから、外国語を学習することは、すでに知っている事物や概念の新しい呼び名を学ぶことであり、すべての概念は各国に共通していると考えがちです。フランス語では、「いってまいります」、「ただいま」、「いただきます」、「ごちそうさま」、「先日はどうも」等々を何と言うのですかという質問は、初心者に共通な無理からぬ問い合わせですが、そんな表現はフランス語には存在いたしません。辞書で、「今、現在」にあたる **maintenant** を見つけて使ってみても、そう言われたフランス人はキョトンとするだけでしょう。「もしもし」を if if と英語で言ったという、あの笑い話と同じことになってしまいます。

私たちの生活している世界は、ことばを知る以前からきちんと区分され、分類化されているのではありません。「いってまいります」にせよ「ただいま」にせよ、すべて日本語にしかない概念で、決して万国共通のものではないのです。言いかえれば、それぞれの言語がすでに出来上っている概念や事物の名づけをするのではなく、その正反対に、ことばがあつてはじめて概念が生まれてくるのです。厳密には、「馬」と horse は同じ意味範囲をもつていませんし、horse と cheval も、cheval と Pferd も同じではありません。私たちにとって、スペクトルの紫、藍、青、緑、黄、橙、赤の 7 色への分割

ほど、客観的で普遍的な物理的現実にもとづいたものはないように思われます。ところが、英語ではこの同じスペクトルを purple, blue, green, yellow, orange, red の 6 色に区切りますし、Shona 語では cips“uka, citema, cicena の 3 色、Bassa 語では hui と zīza の 2 色にしか区切らないという事実は何を意味しているのでしょうか。

ことばは、それが話されている社会にのみ共通な、経験の固有の概念化・組織化であって、外国語を学ぶということは、すでに知っている事物や概念の名前をはりかえることではなく、全く異なった分析やカテゴリー化の視点を獲得すること——とりもなおさず全く新しい文化を身につけることに他ならないのです。同じ物でも、角度を変えて見れば四角くも丸くも見えることがあります。私たちが第二言語を学習するということは、小川芳男先生が口ぐせのようにおっしゃっている、日本の思考といふいわば『单眼』に、新しい言語の思考を加えた『複眼』にしていくことに他なりません。

◆「ぼくのアパートに、素敵な美人が住んでいる」

いくつかのフランス語の実例をご紹介しましょう。上の文は、日本語としては少しもおかしい文章ではありませんし、そうした状況は聞かされた男性としては羨ましい限りとも申せましょう。恐らく、朝な夕なに、アパートの入口あたりでその美人を見かけては、胸をときめかしているのかも知れません。ところで、これをフランス語に訳そうとして、「アパート」を appartement にしたらいかがでしょう？ 状況は羨しさを通りこした、全く別の話になってしまいます。フランス語の appartement は、日本の団地やマンションやアパートの中の、個別の家をさしているのですから、はやりことばではありませんが、先ほどの訳文は同棲以外の何ものも意味しません。

動物の例をとってみましょう。フランス語で「猫」のことを chat と申します。それではやはりことばは「物の呼び名」ではないかと思いつくのですが、これまたそうはいかないのです。確かに「猫」も chat も食肉目の家

畜であることには変わりなく、エジプト時代から人に飼われ、時には偶像化されたり神聖視された歴史を経ながら、現在では愛玩用、鼠駆除用に飼養されているという事実も万国共通です。ところが、「猫に鰐節」とか「猫も杓子も」とか「猫の手も借りたい」忙しさ、更には「猫をかぶる」入などという表現になると、もうフランス語には存在しない日本語の「猫」なのです。これとは逆に、フランス語の *chat* は「しゃがれ声」になり、「鬼」になり「蛇」になります。次の直訳と意訳を比べて見てください。

J'ai un chat dans la gorge. 「(私は喉に猫を一匹もっている) 声がしゃがれてしまった」

Le chat parti, les souris dansent. 「(猫がいなくなると、鼠たちが踊る) 鬼のいぬ間に洗濯」

Ne réveillez pas le chat qui dort. 「(眠っている猫を起こすな) 蔵をつついて蛇を出すな」

これらの例からもおわかりのように、大切なことは、同じ動物を、それぞれの言語社会に属する人々が、生活体験を通してどのように概念化してきたかという問題なのです。

◆「サンテ・ド・ウ」とは何ぞや?

言語によって意味の区切り方が異なるように、音声の区切り方、その対立のさせ方も、万国共通のものは皆無と言ってよいでしょう。日本語では五十音図のローマ字表記が示すように、特殊な例(「ん」と促音の「っ」)を除けばすべて母音で終わる音節ばかりです。ところが、英語をはじめ他の外国语では必ずしもそうではありません。子音が2つも3つも続いたり、子音で終わったりする音節が珍しくないことは周知の事実です。ところで、困ったことには、私たちはあまりに自国語の型に慣れすぎているため、どんな外国语をも日本式に直して聞いたり、発音したりする傾向があるのです。ゲスト、ホットケーキ(これは *pancake* の和製英語?), ガラス、インキといった外来語がその良い例でしょう。面白いことは、glass がガラスとグラスに、strike がストライクとストライキに分かれて、それぞれ別の概念を表わしてもいます。

フランス語の教師をしていると、時々妙な質問を受けてとまどうことがあります。「<サンテ・ド・ウ>(目薬の商品名) というのはどういう意味ですか」などがその一例ですが、<サンテ>が *santé* (健康) とまでは想像できても、<ド>が *de*、<ウ>が *œil* (眼) とはなかなか思いつきません。フランス語から来た外来語の中で絶対フランス人に通じないものは、シュークリーム(*chou à la crème* シュ・ア・ラ・クレーム), オード

ブル(hors-d'œuvre オル・ドゥーヴル), オーデコロン(eau de Cologne オ・ドゥ・コローニュ)を代表に数えきれません。

◆「おや、雨だ」

ことばがものの見方であるとすれば、そのことばに支えられている生活感情は無論のこと、生活様式、慣習、風俗、みなさまざまであるのは当然です。フランス人の会話とその大きなゼスチュアとは切り離されないとよく言われますが、身振り一つをとりあげても、日本人のそれとの違いにびっくりさせられるものが少なくありません。雨がボツリ。ボツリと降り始めた時、私たちでしたら手のひらを上に向けて、「おや、雨だ」とやります。フランス人はその逆で、手の甲を上にして、*Tiens, il pleut.* と言うのです。数を1つ、2つ、3つと数える時は、私たちが親指から順に折っていくのに対し、フランス人はジャンケンのグーの形から出発して、1本ずつ立てていきます。

親指と人さし指で円を作っても、お金や O.K. のサインではありません。お金を表わす時には、札束を数える指のしぐさをいたしますし、O.K. のサインは、親指を上に向けて立てるだけです。

ことばは数学の記号のような抽象的なものではありません。ごく日常的な単語であればあるほど、実生活の投影でありさまざまな感情にいいろどられております。それらの生活感情は、ことばの背後にある「物」と「人間」の関わりに深く根ざしているのです。同じポストという語を聞いても、私たちは例の赤いポストを思い浮かべますが、フランス人にとっては、いささかすんだ褐色の、建物の壁か地下鉄の入口にある郵便受け以外の何物でもありません。場所によって多少の差がありますが、日本のポストとは似ても似つかないしろもので、いわばダスト・ショートのように壁の内部に埋めこまれています。また *calèche* という四輪馬車は、「幌馬車」とも訳されるようですが、西部劇に出てくる「幌馬車」のイメージとはほど遠いものです。文学作品を読む際にも、以上のことは大変重要なことで、カミュの『異邦人』の中のムルソーが、「太陽のせいで人を殺した」と言っても、あの地中海のぎらぎらした太陽のイメージは、日本の太陽からは想像しにくいものでしょう。特に詩に至っては、外国语に訳した途端にその価値の半分以上は失われてしまうという恐ろしさを銘記しておきたいと思います。例えば、「春の苑 紅ほふ桃の花 下照る道に出で立つ少女」という家持の歌を、英語かフランス語に訳したらどうなるかという、逆の場合を想像するだけで十分でしょう。

(中央大学教授)

文化交流の明暗

TAKEDA KATSUHIKO
武田勝彦

<JapとJan>

アメリカ空軍では調達部門で用いていた日本のabbreviationを‘Jap’から‘Jan’に変更すると最近通達した。これは別に大問題のように思われないかもしれないが、今は残り少ない一世の日系米人、現在アメリカ社会の指導的立場にある二世の日系米人にとっては朗報である。1903年の秋から北米大陸の北西岸の都市Tacomaに住んでいた永井荷風は1904年の秋にMichigan州のKalamazooに移った。その頃、渚山、西村恵次郎に宛てた英文書簡に次のような記述が見られる。

I am very happy now in Michigan because I am treated no more as a “Jap” as in Tacoma.

荷風の場合はよほどJapの侮蔑が胸の痛みとなって残っていたのであろうか。1903年の木曜会会員宛の年賀状にも

腰まげて ジャップが申す 御慶哉

の一句を詠んでいる。Japの一語は北米大陸で白人たちと苦楽を共にしようと覚悟を決めていた移民たちには冷たい雨の零のように異郷の胸に降り注いだのであった。“Jap, get away.” “Jap must go.” “Jap is Jap.” “Fire the Jap.” “Sukebe Jap.” “Son of bitch, Jap.” “God damn Jap.” “Yellow Jap.” “Dirty Jap.” “Go home, Jap.”と數え上げればきりのないほど一世たちはさげすまれていた。‘Jap’が‘Japy’となったり、‘Dog Fish’となつて排日新聞の活字になったこともある。カナダのBritish Columbiaで発行した公文書のRevenue Taxにさえ“Received from Jap 15”と記されたものがあるくらいだ。おそらくローマ字も書けない移民も多かったことだろうが、当時の一世たちの屈辱感はいかばかりであったろう。たしかに移民の制度にも問題はあった。しかし、ユダヤ人はジュ、フィンランド人はフィン、イタリア人はディゴとしてマイノリティ民族ゆえに差別を受けていたのだ。もちろん、明治の富国強兵策に酔う日本人も中国人をチャンコロ、韓国人をセンジン、アサヤンなどといって卑しめていた。

このような言葉が白紙の童心にどのような影響を及ぼ

すかはマイノリティ社会で育った者でなくてはわからないであろう。それだけに今回のアメリカ空軍の処置はまさに適切であり、日米間の相互理解に大きな貢献を果すことになると信じて疑わない。文化交流というと、とかく次元の高い見地から政府の高官や学者たちは論じようとするが、実はこのような低次元の問題が意外な明暗のスペクトルを決定する因子になるのだ。

<青い目をした……>

昭和の6年ぐらいからだろうか、「青い目をしたお人形は、アメリカ生まれのセルロイド…」という童謡が流行した。ついひと月ほど前もドライヴの最中にラジオからこのメロディが流れ出した。日本の成人の99パーセントはこの歌をナツメロとして口づさむであろう。日本人側からすれば「青い目」「白い皮膚」「金髪」などは異国人に対するほめ言葉でこそあれ、決して軽蔑の意は含んでいない。だからこそ「青い目の日本文化」などという雑誌の特集すら行なわれる。ところが、一個の日本学研究者として論文を書き、日本の研究者と互角で日本文化を研究している人にとっては、自分の論文なり研究が「青い目」という範疇で受容されることに抵抗を感じることもあるのだ。もし日本人の中から「青い目」ぐらいの言葉を枕にしただけで怒るな！ とでもいう声が出るとすれば、それは大きな間違いだ。日本人の優れた古代英語の研究が「黄色い肌の」あるいは「黒い目の」というような形容詞付きで外国の新聞に紹介されたら、はたしてどんな気持になるだろうか。

文化交流の諸問題やその側面は知性的レベルから推進するだけでは充分でない。排日運動の華やかな頃でも、涙のにじむほど暖かい手を伸べて下さったアメリカ人は沢山いる。荷風在米時代に婦人ホームを作り日本の売春婦を更生させようとして私財を投じたアメリカ女性もいた。戦時中、日本人の収容されたキャンプの近くにまで引越して、老いた一世や若い二世を励まして下さった白人もいた。これと同じことは日本人の間にもあった。川端康成氏の「美人競争」なども小説とはいえ、人間の心の灯を美しく描き出している傑作である。しかし、これ

らの人々は決して知性的レベルで文化交流なり国際理解を考えていたわけではない。言語の障害を越え人間にとて基本的な愛の心の通い合いを信じていたのである。

文化交流の実をあげようとしたら、ピラミッドの頂点ばかりを考えていてはならない。底辺こそ大切なのだ。一国の文化価値を伝達することのできる偉大な文芸家や高名な学者の交流だけでは底辺にはいつまでも 'Jap' や「青い目」のかすが残り、一世紀前のナショナリズムが沈没したままに終わってしまう。そこに亀裂が生じる。

＜公ちゃんの読み方＞

「公ちゃん」と文化交流にはなんら縁はないさ そうだが、実は『仮面の告白』の主人公の名前である。外国の大学で日本文学の講座を担当していると、この種の疑問にぶつかることがよくある。‘Kimi-chan’か‘Kō-chan’か、どちらが正しいかは簡単には決定できない。もし作者に引き付けて『仮面の告白』を読むとしても、平岡公威（ヒラオカ・キミタケ）は音読みなら（ヒラオカ・コーアイ）となる。「光威」の名で作品を発表したこともある。この読み方が‘Kimi-chan’であろうと‘Kō-chan’であろうと、作品の理解や鑑賞に大差は生じないといつてしまえば、それまでのことであるが....川端氏がノーベル文学賞を受賞する以前にハワイ大学で『山の音』の論文を書いた学生がいた。そのタイトルは“Yama no ne”となっていた。内容は決して悪くはない。人物描写の分析も、主題論もしっかりしている。スエーデンのある翻訳者から、『山の音』の主人公、尾形信吾の「信吾」は‘Nobugo’か‘Shingo’かという問い合わせを受けたこともある。こういうことがわからないようでは日本文学の真髄がわかるはずはないと思う人もいるが、それなら、「イブセンかイブセンか」「フロイトかフロイドか」「メーテルリンクかメーテルランクか」「ドストエフスキイかドストイエフスキイか」と聞き直されたらどう答えることになるだろう。「ニホンかニッポンか」でも困るくらいだから、後は推して知るべしである。人間という動物はどうしても自分の巻尺で他人を測定しようとする。しかし、自分の巻尺のない人間ほどあわれな存在もない。このあたりが文化交流の難かしさかもしれない。つきつめてみると、日本人と日本人の間でも 100 パーセントの意思の疎通はないかもしれない。

やや悲観的な材料を持ち出してしまったが、文化交流という概念は容易に定義することが出来ても、その内心を把握しようとすると大変なことだといいたかったまでである。本誌の読者諸氏は日本のインテリであり、語学の教師として現場に立っておられる方も多いので容易にご理解いただけよう。“Mrs. West”をいつも「ウエス

ト夫人」と訳しているわけにはいかない。「ウエストさん」「ウエスト様」「ウエスト殿」になるのかもしれない。慶應義塾では現在でも「先生」を用いず「君」を用いる。数年前、退職の辞令をいただいたときも「武田勝彦君」とあった。学生への掲示も「武田君担当」などと出る。この習慣を思い浮かべながら、外地の大学で日系人の教授となつかしき日本語でおしゃべりをしているとき、ついうっかり二、三年先輩の教授の氏名に「君」をつけて後でひどく非難されたことがあった。わが家に遊びに来る外国人学生は妻のことを呼びすぎてにする。わが家では滅多に呼びすぎてにしていないだけに、どこかでこだわりを感じる。しかし、そういう学生ほどわが家に溶け込んでいるのだ。なまじ日本の学生がぎこちなく「奥様」だの「奥さん」と呼びかけているより、ずっとスッキリするのかもしれない。しかし、考えてみると、こちらも同僚の夫人のことは日本流にいうと呼びすぎて会話をしているのだから、習慣はおそろしいものである。万一、日本の同僚の令夫人を呼びすぎてしたら、どうなるかと思うとゾッとする。このゾッとする緊張感が異国語間の communication につきまとつのだ。

＜相手の側に立とう＞

国際的理義とか文化交流とはなにかを一言でいうなら、「相手の側に立つこと」ではなかろうか。人間は自分のいうことについてはなんとしてでも伝達させようと努力する。それだけに自分のいったこと、書いたことにはナルシズムも働いて無責任になり易い。相手のいうことをよく聞けるという能力は大切なことではなかろうか。アメリカでの学生運動も体験したが、相手の主張をよく聞く態度は立派であった。問答無用の武士社会、近代化を急いだ明治・大正・昭和の社会が日本人から相手の話をよく聞く習慣を奪ってしまったのではないかろうか。日本の選挙の連呼、クラクション、各種アナウンスなどすべて相手が聞いてくれないことを前提としているのではないかとも疑われるほどだ。

不幸にして英語・英文学を専攻する機会に恵まれなかったために、英語圏の人々の話す言葉に耳を傾け、なんとか理解しようとした習慣から、こういう意見を吐くことになったのだろうか。また、ものを読むにしても文法の論理よりもその内容を汲み取ろうとばかりしていたので、こういう意見を支持しているのかもしれない。日本人には人のいうことをよく聞けない欠点がある。英語教育の場でも hearing は軽視されてはいまいか。相手の側に立ち、相手のいうことに耳を傾けることが、自己を理解させることにもなる。この原則を文化交流の基礎として提案したい。

（早稲田大学助教授）

外国語の学習

TAKANO FUMI

高野フミ

ことばの重要性は、それが伝達する内容にあることはいうまでもない。ことばは思考である。日本の英語教育は、本を読むことに重点を置き過ぎて、まったく実用の間に合わないものであったという批判が浸透してきた結果、こんどは正しい発音、正しい idiom、正しい intonation などが強調されてきた。それはそれで結構だと思うのであるが、そのために内容が二の次になっているのではないかという懸念がある。

こんなことをいうと、その道の専門家に叱られそうだが、いまはやりの pattern practice というのがある。それは英語を sentence pattern で覚えていくということらしい。たとえば The book is on the desk と The cat is in the chair というのとは同じ pattern であって、そのように内容を変えながら pattern を繰り返すことによって英語の sentence の基本的な pattern を覚えていけば、どんな内容でも同じ pattern を使って表現できるようになる、ということのようである。なるほど The book is on the desk と The cat is in the chair とは「同一」であるという説明は素人にも分からぬことはない。しかしこのような文章の型をただただ覚え込まされると、文章に対する反応が機械的になってくる。そこがねらいなのかもしれないが、文章に対して、機械的に反応することほどばからしい、面白くないことはない。

The book is on the desk というのはごく平凡なことがらであって、「ああ、そう」という反応を引き出す、に止まるであろう。The cat is in the chair となると、少し違って、「あら、そう」という反応を引き出す。(この文章を聞くと私は数年前に家で飼っていた茶色の猫を思い浮かべる。この猫はその後行方不明になった。) ところが次にたとえば The cat is in the pond となったら、「大変だ!」という反応が起こるはずである。それがことばに対する自然な反応であり、そこにことばの意味もあれば、面白さもある。もちろん The cat is in the chair と The cat is in the pond とが同一の sentence pattern であることを私も認めないわけではない。しか

しこの二つの文章を同様に分析して処理するよう覚え込まされたとしたら、それは言語を習得していることにはならないのではないか。

私はこのような pattern practice では Browning の "Pippa passes" の次の有名な一節はどういう扱いを受けるのだろうかと心配になる。

The year's at the spring
And day's at the morn;
Morning's at seven;
The hillside's dew-pearled;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn:
God's in his heaven —
All's right with the world!

テレビの英語の授業をたまに見ることがあるが、私はいつもどうしてあのように面白くない内容の文章ばかり繰り返すのかと思う。初步の英語のクラスが面白いはずはないという人があるかもしれないが、私は初步の英語でも面白い内容はあり得ると思う。というか、ことばの内容について imaginative に反応することを教えることができると思うのである。ある外国語を学ぶということは、要するにそのことばに対して imaginative に反応することを学ぶことではないだろうか。The cat is in the pond と聞いた時に「ああ、The book is on the desk と同じ pattern だ」と反応しないことを学ぶことである。

あるアメリカ人が日本へ来る前にリンガフォーンで日本語を少し勉強したが、せっかく覚えた文章を使うことが一度もなかったとこぼしていた。どんな文章を覚えて来たのかと尋ねたら「猫は獣を追っかけます」という文章だと言った。

テレビの英語のクラスについて、ついでにもう一つ悪口を言わせて貰うならば、その内容が面白くないばかりでなく、時として vulgar である。これは特に native speakers の会話に多い。vulgar は少し強過ぎるかもしれないが、とにかくくだらな過ぎる。しゃれや joke が

出て来たり、slangyな表現が用いられたりするが、それらは wittyと言えるようなものでは毛頭なく、陳腐であり、品位に欠ける。われわれは slangyな英語を学ぶ必要はまったくないのであって、「立派な」英語を学ぶべきである。テレビによる一億総白痴化などといわれるが、英会話の授業に関するかぎり、まったくの白痴化プログラムである。その会話には「思考」がまったくない。考えないでしゃべることが上手な会話であるかのような印象を受ける。Native speakerであれば会話が教えられると思うのは安易な考え方である。

さて先日「役に立つ英語と教養としての英語」という議論を聞いたが、役に立つ英語とは教養としての英語であろう。そもそも商売の取り引きが間違いなくできる英語、外交交渉が正確にできる英語などといった考えはまちがっている。日本の商社マンが諸外国で評判が悪いということが度々新聞に報じられるが、最近の語学のtrainingを受けた人が外国で評判が悪いのは仕方がないのではないかと思われる。役に立たない外国語では困ることはいうまでもないが、役に立つだけの外国語、正しい発音と正しい sentence structureだけの外国語も困るのである。

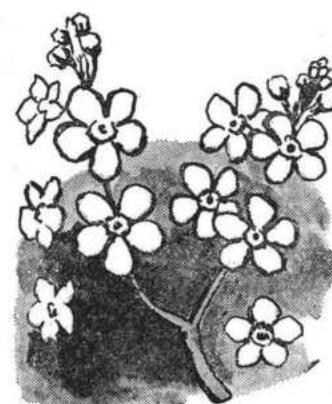
外国语を学ぶということは sympathetic understandingを身につけることである。他国の文化を吸収するために外国语が必要であった時代もある。今日でも日本人が外国语を学ぶ目的の一つは、それによって他国の文化を吸収して自己の利益に役立てることだと考えている人がいる。なかには、日本がもっとも進んだ国になったので、もはや外国の文化を吸収する必要はないし、したがって外国语を学ぶ必要もないと思っている人もある。しかし自己の利益のために他国のものを吸収しようという姿勢がそもそも問題なのである。吸収するのではなくて、他国の文化に対して sympathetic understandingを持つことが外国语を学ぶ目的であるはずである。

現代のモーレツ商社マンに sympathetic understandingなど無用のものと思われるかもしれない。少なくとも無益のものと思われるであろう。しかし外国で日本の商社マンの受けが悪い一つの理由はそのようなところにあるのではなかろうか。もちろん business is business はそれとして認めるにしても、どんな business にも人間関係はつきものである。その human elementを無視してはなにごとも成功しないはずである。人間関係でもっとも大切なのは、相手の思想、相手の立場に対して sympathetic understandingを持つことである。これは外国人との関係において欠くことのできないポイントである。自國の人に対しても sympathetic understanding

は必要である。だが同国人同志のばあいには以心伝心というような便利なものがある。ところが外国人との関係ではそういう都合の良いものはない。やはりことばを使って伝達しなければならないことになるのである。そこでことばが重要なものになって来る。そのことばに対するわれわれの姿勢は、それをとおして sympathetic understandingを達成しようというものでなければならぬのである。

日本の大学の英語のクラスで用いられるテキストが文学に片寄り過ぎているというのもよく聞かされる批評である。しかし文学作品ほど sympathetic understandingを養成するのに適した教材はあり得ないと私は考える。外国语の授業のテキストは文学を主とすべきであろう。第一に文学作品ほどことばを厳密に吟味して書かれたものは少ない。哲学とかそれに近いものがないことはないが、なんと言っても自由で varietyに富んでいるのは文学作品である。ことばをそれほど厳しく吟味しないで書かれた文章はことばの研究の素材として不適当である。経済学のテキストを使って英語を教えなければ、経済学の書物を読めるような英語の力がつかないというようなことを言う人がいるが、それはことばの研究の素人のいうことである。そもそも「経済学の書物が読めるための英語の力」という考え方には、さきに述べたように見当はずれなのである。フロベールは一週間に one sentenceしか書けない時があったということである。一週間苦闘して創造した一行の文章——すぐれた文学とは本来そういうものであろう。それこそ真実を伝達することばである。われわれが外国语を学ぶということは、そのような真実のことばに触れ、そのことばの伝達する内容に sympathetic understandingをもって反応することである。

(津田塾大学教授)



ヨーコさんやユズルさんは
日本語をおしえないべきだ

KATAGIRI YUZURU
片桐ユズル

Paul Christophersen の *Second-Language Learning* (Penguin Education, 1973) という本は、一流の本ではないにしても、おもいがけないところから外国語とはなにか、ということにライトをあてて問題を提起する。たとえば native speaker の speech にどれだけ似せてしゃべることができるか、ということで外国語能力を評価したりする、そういうかんがえ方はロマン主義でナショナリズムなのだという指摘など、おもしろい。そうすると、真理は国境をこえて普遍的であるという、けいもう主義は、たとえばラテン語という書きことばにもとづいた共通の文化が基礎にあったのではないか?

それはともかくとしてカナダのモントリオールで W. E. Lambert たちが調査したところによると、どういう motivation をもったひとが外国語をうまくなるかというと、motivation には instrumental と integrative と二種類あって、integrative というのは、その target community の potential member になりたいというようなあこがれがある場合で、この場合のほうは、たんに外国語はコミュニケーションの手段にすぎないとする instrumental motivation による場合よりも、うまくなるのだ。もっといえば、子どもの母国語の学習の場合では、まわりのひとたちから評価されているような人間に似せたい、という基本的欲求から言語をまなぶ。だから second language の場合でも、そのことばをしゃべるひとで、ああいうひとになりたい、とおもわせるようなモデルがあれば、そのひとの一挙手、一投足をまねる(ことばづかいをふくめて)。そういうことが必要なので、たとえばボーアイズ・ピー・アンビシャスのクラーク先生のようなひとは、周囲の人たちにはとても強力なモデルとしてはたらいたのだろう。

すると、いまのように日本が大国になり、アメリカが評判わるくなり、ヨーロッパ文明も行きどまりという感じが充満しているときは、英語をやるのにすごく悪い時なのだろう。フランス・ファンは『黒い皮膚・白い仮面』(海老坂・加藤訳、みすず書房)の第一章で「黒人

と言葉」について論じている。フランス領マルチニック島出身の黒人にとって、完全なフランス語をしゃべるということは、白人になることであり、支配階級の一員になることを意味する。日本人が英語をならうについても、程度の差こそあれ、こういうことはある。嬉々として英語をおしえるわけにはいかない。

おもいだす。「大東亜戦争」がおわったのは中学3年のときだった。戦争に負けたのなら、なぜ日本はアメリカの州にならないのだろう? マッカーサー元帥はなぜ日本をアメリカの州にしないのだろう? アメリカの州になったら、みんな冷蔵庫のある家に住んで、自動車をのりまわし、毎日チョコレートがたべれるのに……と、さくしゅとか、植民地とか、帝国主義とか、そういうことを知らない中学生はかんがえたのだ。大学生のとき朝鮮戦争になって、ようやく、アメリカの州でなくてよかったです、徴兵されずにすんだ。

それから「自由と民主主義」の本場を見るためにフルブライト留学生に応募し、ちょうど行く直前にチャブリンの「王様」の映画を見て、あんなにこわいことなら行かないでおこうか、ともおもったりしたが、プレジデント・クリーブランド号にのった。フルブライト委員会の教育的配慮により、われわれは一等船室で、すごいりっぱな食堂で、名まえもきいたことのないような珍らしい料理を、勝手気ままにオーダーして食べれるのだ。ところが、次の日、船の新聞が、ガリ版だけど、船室に配達された。ディナーのときには“Gentlemen are supposed to wear ties...”という記事があった。「なんだ、これは、どうやら、おれたちのことらしいぞ」きのうの夕飯のとき、ボロシャツで、ソーリばきで、食堂へ行ったからだ——もはや、アメリカだとおもって安心して。自由と放縱はちがうんだという説教は、あれは、おとながうまいこといって、自分たちの利益をまもるためにごまかしているにちがいない。とにかく自由の国へいって、この目で「民主主義」を見たら、戦犯のおとなたちのいうことが、いかにいんちきだか証拠をつかめるだろう。た

とえばネクタイ。校長はじつにうるさくいうけれど、あんなものは後進国の人間が先進国ぶるためにぶらさげるものにちがいない。アメリカに近づけば近づくほど、そういうものはかけをひそめるはずであった。ところが、1959年のアメリカは、そういう気どらない開拓者の国ではなかった。うらぎられた。ワシントンはもっとかたくるしかった。サンフランシスコは気らうだったけど、大学の先生はみんなネクタイをしていた。

ところが、ここに、ヒゲもそらず、ネクタイはもちろんしないで、きたないかっこうしたひとたちがいて、ビートと呼ばれていた。おなじような不満をアメリカ社会に対して持つ連合軍をここに見出した。それで勉強することができた。

ランパートたちの研究によれば、外国語学習とパーソナリティの問題はさけておることができるないようだ。よくできる男の子で、文法、語い、内容理解すべてよいのに、発音だけがものすごく日本語式なひとが、しばしばクラスにいたが、あれは、あまりに fluent に発音してしまうと、自分が自分でなくなってしまったような、魂を売りわたしてしまったような気がしているのだろう。外人になってしまったような気がして、つまり自分のパーソナリティに対する脅威を外国語学習に感じている。自分のパーソナリティを傷つけるかわりに、発音をわるくすることで、外国語の方を傷つけておくのだ。

もうひとつ、ぼく自身のことでおもいだすのは、ぼくが小学1年になったときに、おやじが英語をおしえようとして、ぼくもよろこんで *King's Crown Reader* を手にした。ところが、ディス・イズ・ア・ブックではなくて [ðɪs] という変な口のうごきをさせられ、それをくりかえし、くりかえしさせられたもので、おこって、本を投げつけた。おやじは、あきらめて、それ以上やらなかつた。つぎに中学1年にはいるとき、また、おやじは *King's Crown Reader* をまた、おなじようにやったが、こんどは、こちらも、おとなしく、変な音と、くりかえしにたえた。小学1年のときのことをいまからかんがえると、なにか、変な舌をかんだ音をだすようなことについて、ひじょうに恥かしい、自分が自分でなくなるような気がしたようにおもう。それが、6年たったら、いちおう、エゴというか、なんかが確立して、それほど不安定でなくなってきたので、安心して、変な音も出せるようになった？

けっきょく、identity というようなことが問題になってくるが、合州国市民とかエリザ朝のイギリス人をあこがれるわけでもないし、たんに instrumental な motivation なら、それは和魂洋才路線であり、それはやっぱりきらいなのだ。ひとつの国語をメシのたねにすること、やっぽり、ひとつの世界、ひとつの文化を引き受けたとおもう。Identity ということでいうならば、自分自身には自信がないので、大国日本国民であることや、三菱とか国鉄のような大組織の一員であることによって安心するようなしかたもある。それは英語をしゃべれることでトップに近いんだぞ、ということと近い。そうではなくて、もっと普遍的な、人類全体とか、地球上のあらゆる生物とか、宇宙とか、そういうところに identity を見出すことができると、もっといいのだと、エリックソンはいっている。そういうモデルとしてぼくには Gary Snyder がいたし、彼のいわゆる “tribe” (*Earth House Hold*, p.116) がいる。

Graded Direct Method という気にいった方法で英語をおしえて、やがて20年になるが、英語以外の外国語や日本語もやってみたくなって、すこし研究を始めたところだが、升川潔さんが「ヨーコさんやユズルさんは日本語をおしえるべきではない」といった。「なぜなら、日本の culture をあらわしていないから。」そこでわれわれは噴然として、いや、むしろ日本はあのジョーダンのテキストにあるような男がいばっていたり、女中や店員があれほどへいこらしているような国だとおもってもらってはこまる。だいたいあのテキストにでてくるスミスさんは外人だとか地位が高いとかいうことでいはりすぎている。われわれはああいうハーバード大学とか金持でない外人に日本語をおしえたいとおもっている。敬語のような非民主的なことも最少限におさえて、もっと認識的に clear な日本語のスタイルというものが、外人に日本語をおしえたり、外人が日本語をつかったりするなかから出てきたらよいとおもっている。それに、こういうことをいうわれわれ自身、日本の土壤の中から出てきたわけで、日本以外のどこから来たのでもない。日本自身はこうもなるのだ。そういう日本も知ってほしいし、発言権はあるのだ。げんに、われわれのようなヘンナ日本人にあって、地獄で仏に会ったような感じをもった外人も何人かいることだ。

ぼく自身が、Blake, D.H. Lawrence, Herbert Read, Aldous Huxley, Poul Goodman, Gary Snyder など、英語文化のなかから出ながら、英語文化に対して批判的な流れに identify してきたように、日本の official culture にがっかりしながら、そのむこうにある世界文化に貢献できるなにものかをもとめるひとたちと、いっしょにしごとができるはずだとおもっている。

(京都精華短期大学教授)

座談会 これからの英語教育



これまでの英語教育

——本日は「これからの英語教育」ということでお話しをいただけですが、当然これまでの英語教育はどうであったかということが問題になると思います。

この場合、現在の成人がどの程度の英語の力があるかということをみれば、これまでの英語教育の成果というものがある程度評価できるのではないかと考えますが、残念ながら国際的には、日本人は英語がへただという定説めいたものがありまして、大部分の日本人もそれを認めているのが現実だと思います。

また最近、エレック選書で『国際感覚と英語教育』*という本が出版されました。著者の今村茂男先生は、日本人は読む、話す、聞く、書くという順にできないと書いておられます。この見方がはたして妥当かどうかを話題にしていただきたいのですが…。

若林 現在の成人の英語力をみればこれまでの成果はわかると言われたけれども、はたしてそうなのか。どこをみるのか、みる場所によってずいぶん変わってくるのではないかと思います。たとえば戦前の全国民の25歳の人たちの英語力と、現在の25歳の成人の英語力を比べた場合は、少なくとも数量的にはけた違いにいまのほうが普及しています。たとえば Alphabet を知らない人はいないし、カタカナ英語がうんとはん乱して、しかもそれがけっこう通用している。そんなものは英語力ではないといえばそれまでですが、普及ということについてみれば成果があったのではないかという言い方もできる。もちろん得意か不得意かということになるとこれは別問題でしょうけれども、これまでの成果というものをみると、その点について先生方のお話を承りました

* エレック選書『国際感覚と英語教育』 今村茂男（ミシガン州立大学準教授）著、ELEC 出版部刊、B 6 判、150 頁、¥580

外山 滋比古 お茶の水女子大学教授

國 弘 正 雄 国際商科大学教授

中 村 敬 鶴見大学助教授

若 林 俊 輔 東京学芸大学助教授

いと思います。

中村 現在の成人をみればわかるといったとき、たしかに現代はいわゆる国際化時代で、たとえば国際会議で通用するだけの英語力を身につけている人が非常に少ないと、旅行へ行っても通用する人が非常に少ないじゃないかというようなことで見るのならば、非常に通じにくい過去の英語教育は、葬り去られるようなレベルでしかないよう判断せざるを得ない。

ところがいままで日本の学習者が置かれた、特殊な英語学習環境を考慮した場合に、国際化時代というそのレベルで全体の英語教育を判定することに対して、私は疑問を持っています。たしかに今までいろいろな欠点はあったと思うのです。しかしいままでの日本の学習者が置かれた学習環境からすれば、意外にその範囲ではある種の achievement に達していたのではないか。なるほどしゃべることはできないかもしれない、聞いてわからないかもしれないけれども50人、場合によっては70人ぐらいの生徒を、1か所に集めてやつてきた英語教師の先輩の苦労を考えると、あながち見捨てたものではない。プラスはどこにあったかは別に考えるとして、一方的にそれがだめだ、だめだという形でとらえることには抵抗を感じざるを得ないという説を私はとりたいと思います。

若林 指導要領では 4 技能の片寄りのなさということをいっていますが、大体 4 技能を片寄りなく育てるなんという不可能なことをスローガンに掲げることは間違っている。現実に授業を受け、訓練を受けている生徒、学生、一般人というものはそうはないかない。いわゆる個性があるわけです。それを全然無視して、片寄りのないような授業をやろうというから、今までの英語教育を批判するとすれば、そういう無理を押し通そうとしたところに間違いがあったような気がするのです。そういう意

味ではむしろ戦前の訳読主義のほうがよほどすぐれていたところがあるように思われます。

國弘 私はもっと日本の在来の英語教育の果たしたそれなりの役割、ないしはあげてきた成果を評価すべきではないかと考えますし、実はそれがまた私のこの4、5年来の主張であったわけです。ただやはり、今までの英語教育に欠陥はあった、あるいは欠点はままみられたということは肯定せざるを得ないと思います。

なお4技能云々の問題ですけれども、私が国際会議に出ていて非常に感ずることの一つは、日本人がわれわれにとって最も大切な母国語においてすら話すということ、あるいは聞くということには大して力点を置いてこなかつたのではないか。つまり国際会議といわず日本語で行なわれる会議に出席していても、やはり音声言語の運用能力ないしは理解能力ということになると、日本人は総じてたいへんに不得手だということがいえるのではないかと思います。

ではなぜ話すことばに弱いかというと、その理由はいろいろ考えられると思います。たとえば日本は非常に高度に階級化された社会で特に音声言語を使って下意を上達させることは非常にやりにくいとか、上意が下達する場合でも、いわゆる偉い人というのは最小限ぎりぎりのことばしか使わないので、下の人は上役の顔色を絶えず読むという extralinguistic というか、nonverbal の意思伝達手段というものが非常に発達していたことなどが考えられます。したがって一人の個人の中においても、あるいは集団としても、英語を読み・書くことと、聞き、話すこととの間に能力差が顕著にみられたとしても当然であって、なにもそこで英語教育が批判をされたりするいわれはないと思います。

もう一つは、今村先生も言っておられましたが、日本人ははたして英語が読めるのかということになると、私はほんとうは読めてないという感じが非常にします。実際にことばというものはほんとうに自分自身が主体的に運用して、後に、初めて他人の書いたものも読めるし、他人の話したことともほんとうの意味が聞き取れるのであって、自分自身で主体的に表出手段として使ったことのないことばというの、実はほんとうには理解できないのだということ。

それからもう一つは、これは福原麟太郎先生が絶えず言っておられることですけれども、ほんとうは読むことが一番むずかしいことだといふこともいえると思います。話したり書いたりするというのは、自分は自分なりに、自分の甲らに似せて穴を掘ればいいのですが、読む、聞くということになると、対象は世界一流の頭脳で

あるとか、碩学であるとか、一流の文学者であるとかいう人たちのものとなりますから、自分の甲らに似せて穴を掘れないわけで、読むことがやさしくて話すことはむずかしいのだ、という議論を私は必ずしもとらない。ということは一寸さっき申し上げたことと矛盾するようですがけれども、そんなことを思います。

日本における言語文化の伝統

外山 いまの話すこと、聞くことは日本語においてすらじょうずにいってないというご指摘、たいへん貴重だと思います。もちろんそれは国語教育の問題でもあるわけですが、国語教育だけで解決しない問題で、日本人のもってきた歴史的言語文化の伝統みたいなものがあるわけです。それをわれわれはいま外国语というものにふれて、いろいろ比較をするから、国語の先生よりも早く気がついている。その点で、これはこれから教育の全般的な問題として、国語の先生にも大いに努力していただきたい。それが進歩すれば、英語も若干は改善されるところがあると思うのです。

ヨーロッパの場合 speech が基本であって、その上に符号を書記したもの、書きことばがある。これは大原則であると思うのです。ですから話すことばと書きことばの間に、スタイル上の差はあるけれども、本質的には話すことばが基本になって読み書きができるはずだ。これはそのとおりだと思います。ところが日本の場合は、その原則が適用できるかどうかということすら、われわれは確認していないのです。だから話しているとおりに書いたらとんでもないものになるし、書いたとおりに話せばまるでつまらないものになる。そういうふうなことにに関しての一つの問題点がある。

したがって最近のように語学教育というものが主として話すことばにおける運用能力を中心にして評価されるようになってくると、日本語においても十分修練がいっていると思われない、話すことばの言語能力をどうしたら高められるかという大問題を、まず突きつけられるだろうと思います。

明治以後日本の外国语教育が読みにほとんど集中していた。その読みの能力に関しては、いまご指摘があったとおりだと思いますが、とにかくそれは日本が外国の文化を輸入紹介するという社会的な要求とも合っていたし、こちらから言いたくてもあまり言うものがなかった、表現すべきものがないのにそんな能力を多くの人が練習するということは、実際的に無意味なことだと思う。ところが社会が変わってきて、社会的には少なくとも言



外山 達比古

のかどうかということをわれわれは抜きにして、話せるの、話せないのといっている場合がかなりある。

国際会議へ行っても、国内の問題でも、とにかくわれわれは表現能力という productive のほうの能力において、実際欠けていると思いますけれども、かなり初めから放棄して、こんなことを言ってもわからないだろうとか、言っては恥ずかしいとか、いろいろな理由で表現欲というものをはじめからあまり持っていない。

ましてや外国語はおっくうだから、表現欲は母国語における何分の1かあればいいほうだと思う。そういう問題を抜きにして、とにかく表現できなければ困る困るということを、語学教育は当面として問題にされているわけですけれども、それでは一体何をいつ、どういうときにしゃべるか、ないしはしゃべるものかをいかにしてつくるか、ということをもう少し考えることが、外国語の場合においては案外近道ではないか。

いまわれわれが言いたいことを持つのは仲間うちの一種の社交語のようなものだと思います。しかしそうではなく、はっきりした意見の違いとか文化の違いとかをこえて、どうしてもこれは表現しなければならないのだというものを、どれだけ持っているかということが国民全体としてはっきりしてない。そういう国民にかりに語学の運用能力だけをつけても、さほど国際的にも有効にはならないのではないか。また少なくとも私は言うべきことを個人としてまず持つということと、話す能力を伸ばすということとは、車の両輪のようなもので、特殊な人は別ですが、学校教育の一環ですから、まず英語で言うべきことと日本語で言うべきことは、当然違っていいと思うのですけれども、それがいまの語学の目標にはどうもはっきりしていない。その点で、先ほど國弘さんがおっしゃった、日本語の問題との関連は、これはきわめて大事なことばだと思います。だから、英語の先生が全部

うべき必要が出てきたし、言うことがあるのだという situation が社会的には生じております。けれども、個人の段階に下がってきますと、果たして個々の人が、どうしても外国語を使って言わなければならぬ

ことを持っている

の言語的条件を背負うということは不遜だと思うのです。

若林 ここ半年ぐらいやなことが続いています。というのは、テレビで「全員集合」という番組がありますがあの中でいかりや長介がやっているのですけれども、最近のはやりが 'This is a pen' なんです。役者が出で何か演技をやるわけです。何か言えというと、'This is a pen' というわけです。私は英語教育があそこで批判されたような気がしている。いま、外山先生がおっしゃったように何か言えといわれてもいうことがないから 'This is a pen' という、何か言えばいいんだろうというわけです。

つまり、pattern practice というのがそうなんです。形骸だけをとにかく言う。それが延々として続いてきて、自分はいま何を言っているのか、何が言いたくて言っているのかということを、何ら生徒に自覚させることなくしてやってきた。それが音声重視の教育だという、そこに大きな問題があると思います。

中村 話すということについて、たとえばヨーロッパではそういう speech の伝統があって、その上に書きことばが出てるというご指摘、まさにそのとおりだと思います。そういうことを踏まえて考えると、日本の言語教育の中で、国民的レベルでの speech の教育というのは今まで、特に戦後30年近く不当に強調され過ぎたのではないかということです。このことは反省が付いていいと思います。

日本の国民的なレベルの英語教育の中で一番大事な部分というのは、やはり国民性とか国民文化の本質が変わらない限り、最も効率の高い部分にもっと集中すべきであると考えるわけです。だから、たとえば英会話の時間があってももちろんいいわけだが、それが不当に強調されて、それができないと英語ができない、というような錯覚を子供たちに植えつけてこなかったかという反省が私につきある。

それからもう一つは、これはいま言ったことと若干矛盾すると思いますけれども、にもかかわらずそういう音声教育の価値が全面的にゼロだと私は思っていない。なぜかというと、おうむ返しにやっている部分の中に、たとえば西洋の日常生活の中で、一種の儀式化した部分の speech のレベルのものがあるわけです。あいさつとか、天気がいいとか悪いとかいう、実に知的レベルとは無関係であって、にもかかわらずそのことを言えなくて、多くの日本人が海外で、たったひとこと言えればいい印象を与えられたのにというような事例が山ほどある。

これは外山先生のおっしゃる、これはどうしても言い

たいということが先だということと、若干矛盾すると思いませんが、むしろ彼我の culture の違いをふまえた上で、greeting なども扱えれば機械的な部分も生きてくると思います。もちろんどうしても言いたいということが先行するでしょうけれども、そういう ritual の部分も全く無意味だということ切り取ってしまうということに対しては、若干抵抗を持っているのです。

音声中心か Reading 重点主義か

外山 ここで英語教育のうち、学校でやる部分と学校以外でやる部分とを区別する必要が出てくると思うのです。日本では、教育というのは全部学校でやる、というふうにきめてしまうところが教師にもありますが学校教育の中でどこまでができるかという線は、もう少しありたまにしきりしたほうがお互いによろしい。その中においては、たとえばごく基本的なあいさつというようなものは、将来外国へ行くか行かないか、行く必要があるかないかを別にしてやらなければならぬ。しかし、そこから先のことは必要に応じて、たとえば学校以外にそういう社会教育の機関を当然考えなければならない。

日本の英語教育の問題は、非常に学校教育に片寄りすぎているので、あらゆるものを見学校教育の中でやろうとするために、英語の先生が絶望感を持つのではないかと思います。ですからもう少し限界をはっきりさせて、その中でできないことがあったら、これは学校の英語教育は当然批判を受けるべきだと思いますけれども、いまみたいにどこまでやつたらいいのかわからない、ただ 4 技能並列なんていうのはまるで雲をつかむような話で、読める、書ける、どれひとつとっても相当な集中を必要とすると思います。だからたとえば会ったときのあいさつと別れるときのあいさつは、絶対 1 年生でやらなければならぬというくらいのことをやってもいいと思います。そのかわり、ただばく然と話せるなんていうことを、中学校の先生が負担に感じないようにすることは必要だと思います。

そういうことから考えると、私は今まで読むことに対する非常に時間をかけてきたけれども、いまの時間数では読むのは無理だと考えるようになったわけです。だからどちらかというと中村先生が言われたのと逆で、効率がいいか悪いか別として、とにかく音声言語を中心にして英語を中学校においてやる。それはむしろ国語教育に対して刺激を与えて、日本の言語生活の一番欠陥となっているものに、英語教育という新しい媒体を通じてショック療法を与えるわけです。そしてそのかわり読むと

いう問題に関しては、これは個人の必要に応じて社会へ任すというのも一つの方法だと思います。

そういう私も学校で音声をやるということは非常に困難だと思います。単語の発音ぐらいなら簡単ですけれども、ある



國 弘 正 雄

まとまった speech を聞いて理解するということになれば、これだけやっても 3 年間ではとても足りないぐらいだと思いますけれども、はっきりこれは絶対必要という基本型をきめて、それを反復練習して、理屈を言わないで音声に徹するというのは、いまの週 3 時間か 4 時間ぐらいの中学校では一番いいと思うわけです。

若林 私は ELEC にいたぐらいですからどちらかというと音声重点主義に近いほうだったのです。つまり、教室では音声でやるべきだ、文字を書くとか読むことは外でもやろうと思えばできると考えていたのですが、実はそこに間違いがあったということに気がついて、最近宗旨変更をして、読むことに時間をかけるべきだと言おうとしたわけです。というのは、読むことに時間をかけたといつても、今まで振り返ってみて、特に中学校ですが、一体何を教えていたのかというと、どうも文法を教えていたような気がするのです。

ある教科書に 'We have lessons about Japan and other countries' という文がある。これはアメリカ人から日本人に来た手紙なんです。そのときに私が other countries の意味を聞いたら「その他の国々」と言う。「その他の国々、たとえば？」と聞いたらまるっきり答えられない。これを処理するのに 10 分もかかったのですが、そこで出てきた外国が、オランダ、スイス、フランス、ロシア、それにイングランド、これだけです。

私は子供の頭の中に、other countries の名前がそれしかないはずがないと思うのです。けれどもおそらく英語の授業というものはそういう思いをめぐらすというか、そこから受けるものを自分なりに消化して、地球儀がバッタと頭に浮かぶとかいうふうなことに、ストップをかけるようなことをやっているのではないかという気がするのです。これを私は英語教室における思考停止状況といっております。だからそういう意味では、ほんとう



中村 敬

の reading なんかやってきてないのではないかと思うのです。

中村 中学校の英語教育の体験から、国民的なレベルでの英語教育というものを考えた場合に、指導要領に従って、4時間とか5時間という

のは最大限だと思

います。その場合かりにどんなに音声言語に集中しても、いかにせん、24時間日本語でしゃべるというわれわれの言語状況を考慮すると、おそらく最も非能率的な英語教育ではなかろうかと、かなり私は音声言語に重きを置いた英語教育をやりながら思ってきた。むしろ時間が少なくなればなるほど、reading に重きを置くべきではないか。だから指導要領がかりに2時間ということになれば、むしろ徹底して reading に重点を置いたほうが効率としては高いのではないか。いくべき姿としてはそこにあるのではないかとすら私は最近考えております。

また先ほど外山先生の言われたショック療法としての英語教育の音声面、よくわかるのですが、しかし日本語の読むことと外国語で読むことでは質的に違う。外国语で読むということは一つの、外山先生のおっしゃっているような meta-language を習得させる有力な手段になり得るというふうに考えざるを得ない。

そして若林さんがおっしゃったような文法を中心を置いたというのは、reading ではないので、論理構造がわかったり、言おうとしていることを全体として的確に把握するとか、そういうことに reading が向かっていなかったということは残念なんで、そちらへいけばむしろ、もっともっと効果が上がる可能性がある。特に40名、50名という生徒を抱えたクラスで、おそらく最も効率的なのは、そういう形での reading でしかあり得ないのでないか、ということが体験的な一つの感じです。

外山 私が宗旨変えざるを得なくなった理由は、いま中村先生がおっしゃっていることと紙一重で表裏をなしているので、実際には reading というのは國弘先生がおっしゃったけれども、たいへんむずかしい。日本人が戦前話したり、聞いたりは出来なくても、いくらか読めるというようなことが、外国语について言われた時期があった。いまよりたしかに読めたと思います。それは一

つには漢文というものがあったからです。

これはたいへん大事なことです。その漢文の読みという訓練は、これは準外国语ですけれども、とにかく具体的な感覚をこえた世界のものを、imagination で読み取るという訓練では、外国语に似ているといえるものがあったわけです。その漢文もいまはありませんし、国語教育の読みの訓練もほとんど効果が上がっていないうことも事実です。その段階で英語の読みをやると結局あぶはち取らずで、やはり音声言語も不完全になると思います。

ですからいまの段階では時間がうんとできたときに、または非常に時間をかけられる人や、将来学問をやるという人は自分で読まざるを得ないと思います。しかしそれは学校の教室で一斉にやるべきものではない。それよりはむしろ私は中学校の段階では、英語に関しては初修の学科ですから、能力差は一応なしと前提したいわけです。その能力差をゼロに一応するには、今までの小学校でついてきた学力差をしょいこんではとてもできない。そこで音声というものは小学校の国語教育でも何にもやってこないので、これは十分練習すれば小学校の学力に関係しない語学教育ができる。そうすればその生徒にとっては、あるいは英語をきっかけにして自分に勉強というものに対する新しい可能性を見発見することもできるのではないかということを考えて、宗旨を変えざるを得なくなったわけです。

中村 それは同時に逆の面があるわけで、たとえば音声言語でやられたために語学に対して反発を覚える学生が一方にいるわけです。pattern practice をやられるとなかなか出ない。ところが数学は非常にできる。どちらがより犠牲者が少ないか。speech をだれにでもできるようにするということが必ずしも救う道にならない。むしろ逆に英語をきらいにさせる部分がある。君はしゃべることはできないかもしれないけれども、読む力はあるということをどこかで評価してやる必要がある。

reading のほうがむしろ教いやすさがあるというふうに私は見ているのです。もちろん私の場合は speech を全然無視するという議論をしているわけではなく、しかるべき位置を占めろといっているわけですが、圧倒的に speech が全体を占めてしまうことについては疑問を持っています。reading というのもも、全体として何を訴えているかということをある程度の正確さで把握できれば、それでよしとするという形を考えれば、今までとはちょっと違った要素が出てくるのではないか、そういうふうに私は考えているのです。

外山 そういう読みの指導が教室でできないことは、

音声と同じです。大体の把握とかいうことは speaking よりももっとめんどくさい。大学生を教えるても、全体のことをどうして評価するかということは非常に困難です。一番的確に教室で操作できることは逐語訳になってしまふ。中学校の段階で長文を読んである程度の把握ができるようになるプロセス、それを具体的に可能にする道があれば、読みを中心にしていくということは十分できると思います。

しかし中学校の段階で、ことに単語もよく知らない、時間数も少ないとこどもで読みというものは実際は非常に困難だから、ほんとうは読みができれば一番いいと思うのですけれども、もし読みをやらなければいけないというんだったら、私はしかたがないから中学校においては外国語をあきらめちゃう。それは個人の必要に応じて、ピアノや絵と同じようにやればいい。学校でなまじやるから中途半ばになるので、やらないということになればもっと多様な needs に応じた訓練ができると思います。いまみたいに、むしろ逆に英語のきらいな人をたくさんつくるということは、英語教育の一番の欠点だと思います。できる人がきらいになっても困るし、意欲をもって英語ぐらいはできるようになりたいと思った人が、やっぱりだめだったということでもいけない。英語教育の一番の問題点は、中学校が英語ぎらいをたくさんこしらえていることだと思います。それが解決出来ればいいと思いますけれど。

國弘 先ほど外山先生のおっしゃった、英語というものは中学校の場合初習のものだから白紙の状態なのだと、いうご発言は全くその通りだと思います。しかし他方、たとえば母国語における読み能力と外国語における読み能力、母国語における話す能力と外国語における話す能力というものの間には、どうもはっきりした対応関係が結局はあるのではないかという気がするのです。したがって学校の成績からいようと、国語の成績が高いと認定される子供というのは、英語の成績もいまのような system のもとにおいては一応高い。

そうなってくると、たしかに初習の白紙の状態ということはわかるのですが、中学校ぐらいになるとともはや手おくれなのではないか。そうすると、もう少し言語能力という意味で、白紙の状態で英語教育というものを始めることが必要なかもしれない。具体的にいえば中学1年ではおそすぎるので、もう少し早い時期に英語教育を始める必要があるのではないかという気も、一方においてするわけです。ただしわゆる幼児英語教育については、おぞましさしか覚えないんですが。

それからもう一つは、今村先生も書いておられたと思

うのですが、大体一つの民族集団あるいは人間集団の中で、自分とは違った言語、特に日本語と英語のように、語族的にも語形的にも非常に相隔たったことばを何がしか身につけることのできる能力を持った人の数

というの、6割

から7割ぐらいであって、残りの3割から4割の人は、どうやってみても異質な外国語を身につけるという能力を、先天的にといふと非常に言い方が悪いけれども、持ち得ないのかもしれないなど。

これはヨーロッパあたりの統計を見ても、たとえばオランダなんか、比較的ドイツ語とか英語と言葉も近いし、ショッピング英語国民やドイツ語国民と接しているようなところであっても、やはり外国語としてのドイツ語なり英語を身につけることのできる人の数には上限がある。まして日本語と英語ということになると、どうしても、ある程度そこに上限というものを感ぜざるを得ないという気も、一方においてするわけです。

英語ぎらいをつくる英語教育

國弘 さてそこでさきほどの、英語ぎらいをつくっている現在の英語教育ということになるのですが、若林先生から思考停止状況をつくっているというお話をあったけれども、私もそういうようなことではないかなと思って外から見ているわけです。

話が飛びますが、最近大宅壮一賞を受けた『なんで英語をやるの』という本が出まして、非常に興味深く読んだのですけれども、あの中で一人の、知的にはかなり成熟した中学生のことが書いてある。その子は能力を持った子供らしいけれども、英語ぎらいになってしまった。

その理由というのは、英語には考へることが何もないからだと言うのです。さっきから出していることばでいえば、英語には内実がない。少なくともいまの英語教育には内実が伴っていない。pattern practice の悪口をいうわけではないけれども、内容の伴わないガラスみたいなものが機械的にドリルされている。そういうものに耐えられない子供もたしかにいるはずです。中学の2年、3年



若林俊輔

になるとある意味では相当おとなです。最近はテレビなどのマスコミ媒体によって、相当の情報量も与えられているわけですから、何か機械的な、内容を伴わない、考えることの何もない在来の英語教育というものにいやがさして、英語から離れてしまうという子供も相当程度いる。あわせてさっきの3割か4割程度の外国语を身につけることがどうも無理じゃないかという子供もいる。それを足すと、英語を何とかやっていこうという子供は非常に層の薄いものになってしまふ。もちろん受験とかテストがあるから、まあ忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐えて、英語の勉強をしようがないからやろうかということでやっているのではないかと思う。

そうするとさっきの話に戻りますが、どうも学校教育でできることとできないことがあるということはあまりにも明らかだし、中学生という歳になつてしまふと、ちょっと手がつかないなという感じで、加えて日本人のことばによる情報伝達に対する低い評価に見られる、ある種の言語文化的な伝統のようなものを考えると、いささかもって悲観的にならざるを得ない。

若林 今内実のないという話が出ましたが、これはだいぶ前にある新聞記者が書いていたことです。彼は自分の子供——4年生の女の子が英語をやりたい、というので中学校の教科書を買ってきて手ほどきをした。2、3週間したらその子が、「この教科書の中の人ばかじやないかしら」という。なんだというと、"What is this?" "It is a table."とか、わかりきったことをなぜやるかという。小学校の4年生でもそういうことを感ずるわけです。ましてや中学生や高校生だとますますばかばかしく感ずる。それで結局いやになつてしまふというのがあるような気がする。

中村 だから先ほどの話にさらにつけ加えて言いますと、音声言語を重視するという場合に、たとえば中学生が、自分が内的にこれをどうしても言いたいということを英語で言えるということになると、彼らはいっばんに目を輝かす。要するに内的にどうしても言いたいということが、同時にある程度自分の英語の能力で言えるような situation に置かれたときに、初めて speech は効果が出る。

第二言語としての英語で、旧植民地などではそれを speech として身につけなければ survive できないという situation に置かれているわけですから効果がある。日本人の場合はそういう状況に置かれないと、中学生なんかもっと置かれていない。そうすると依然として、英語というものが物理や化学を勉強するのとかなり似ているような、抽象的なレベルにいるのではな

いか、だとすると、speech教育というのは、日本では熱を上げても効率が上がらない。むしろマイナス面のほうが目立つ可能性が出てくるのではないかという疑問を持っているのです。

外山 それはそうだけれども、実際読むということに問題を限っても、中学校の場合、やはりナンセンスなものを見たくて読まざるを得ない。それからもう一つは、話すことばは日本語では大体内容が空虚であるという前提がどこかにある。

これはまずい前提でして、話す場合でもすぐれた人が話せば、本や新聞よりはるかに高度な内容があり得るわけですから、たいへん高度の理解能力を働かせる必要がある。しかも何回も辞書を引くわけにもいかないし、1回限りのもので、読み返すこともできない。そういう点では中学校の教科内容が、学習者の知的なレベルからみて著しく低いことが、読む場合よりは話す場合においてもっとはっきりするかもしれません。けれども話すことばというのは必ずしも自然な会話ということではなくて、ある程度形式化されたものであっても内容がかなりあり得るもの、たとえばことわざなどをやれば、読むことと話すこととの形式上の問題はあまり気にしなくていいのではないかと思います。

それからもう一つ、例えば文法は好きだし、いわゆる理詰めで英文解釈をするのも比較的できるけれども、oral の方面については適応性が無いような子がいます。この辺は学力の問題ということよりも、性格的な問題があるのですね。

それに英語教育では、いま1クラス50人というたくさんの生徒を一様にみなして初習者といっていますけれども、個々の生徒の持っている個性的な問題に目を向ける必要がある。つまり外向的な人は speaking に対して適応性を持っていますが、特に内向性の子供の場合は適応にくいのです。この点を英語の先生は十分こころえていて、中学校の段階では配慮する。そういう配慮が足らないのです。英語ができない人は、ばかだということを片方で言いながら、実際は内容的にほとんど無意味なことを教えているから、能力のある生徒を英語ぎらいに追いやってしまう。これは先生のほうの無神経が原因だと思うのです。

若林 教師の側の無神経ということもあるけれども、4技能を片寄りなくバランスをとって教えなければならんというような外国语教育理論がはびこっているから、oral introduction から始まって consolidation で終わるという画一的な授業を繰り返している。そのレールに乗れる生徒はいいが、そこからはずれている生徒の方

が、人數的にははるかに多い。

そこで私の一つの提案ですが4技能の一つ一つと生徒との関係をよく見て、どの生徒がどこから入り込んでいくうまくいかということを見つけてそれでクラスを編成するというはどうでしょうか。

中村 先ほど國弘先生が日本の英語教育に暗たんたる気持を持っていることを披瀝されたのですが、現状では暗たんとならざるを得ない。というのは、4技能を40人、50人のクラスで平等に教えようということは全く不可能なことです。それを今までやってきたということになるわけで、そうするとみんなに合ったような、どの生徒にも少しづつ何か benefit があるような形で与えるようなことを考えざるを得ない。これが制度上の問題として改革できれば一番良いと思います。

たとえば、日本ではおそらく絶対に反対が出てきそうなのは、能力別という考え方があります。能力別というのは本来持っている力が違うという形でとられがちで不平等主義になるのですが、そうではなくて、どこまで achieve したかという形でとらえて能力をみる。そういう形が制度的にとれれば、drastic に変わり得ると思いますが、現状を振りに肯定すればその中で最も効率の高いものを選ぶべきだと言わざるを得ないでしょうね。

英語教育の目的

國弘 私は最近世界を見ておりまして、日本という国が非常にうさんくさいというか、何を考えているのかさっぱり日本人の心の動きがつかめないままに警戒心を持たれたり、不信感を抱かれたりしているということは現実だと思います。だからせめてもう少し日本人の心の動きのひだのようなものをなんとか説明するというか、われわれの心の動きをわかってもらうようにしないと、それが日本の閉塞状況につながっていくのではないか。これは何とかして避ける必要がある。

その際に、好むと好まざるとにかかわらず、英語というのは国際的な共通の意思伝達手段でもあるし、「脱英米化」した英語というものを何とか使ってもう少し日本人の心の動きを世界の国々に知らせるということに、一つの英語教育ないしは英語学習の存在理由をみい出すことはできないかなということを考えるのですが…

若林 ただそういうことは外交官とか商社マンとか、外国人と接することの多い人たちに関することであって、現実に中学校や高校で授業を受けている生徒たちの問題じゃないという気がします。

中村 私もその点は若林先生に賛成です。国民的レベ

ルの英語教育を考える場合に、こちらの思いを相手に正確に伝える表現能力までを期待するということは全くといっていいくらい絶望感にかられるわけです。

むしろ英語教育の目的とすべき点としては、文化の相対性のようなものを教えるということを考えます。こちらではこういう風俗習慣があり、他の国では違った風俗習慣がある。それは必然性があってそうしているのだから価値判断を加えるべきではない。これなら日本の英語教育はまだまだいくらでもやり得る範囲が残っている。ただ言語能力の向上ということについては現在の学習環境が変わらない限りちょっと無理がある。私はそれを期待してないという立場をとるわけです。

外山 いまのお話は中学校段階か高校か大学か、程度にもよりますけれども、私は國弘さんがおっしゃったような線をある程度入れる必要があるのではないかと思います。私は日本の英語教育は必ずしも将来ひじょうに役に立つなんて考えないけれども、これからもますますそうなるだろうと思われるの、利害関係の対立をきたした場合に、国内の世論がいまみたいな非常に心醉的崇拜、盲目的崇拜になるか、さもなければ尊皇攘夷的な、いわば拒否反応を示すか、非常に不安定になって、外国语なんかやめてしまえという意見にいつなんどき結びつくかもしれないということが一つです。

しかしそれよりも前に私は国民的次元で考える教育であるからこそ、教師がいつも、たとえば外国語というものに対して自分はどういう関係を持っているかということを意識すべきだと思うのです。今までの英語教育はいわば international 一辺倒であって、結局は international であり得ない欠陥をもってきたわけです。

これからはそういうことでは通用しないと思うのです。国内だけでは処理出来ないような問題がどんどん出て来ますから、君たちは何を考えているのかといわれたときに、私はといって、日本で英語を話す人達が個人的な意見を言って、どんなに時間をかけてもとにかく説得するという自信と気迫がなければ、外交官や商社の人だけをいくら責めても無理だと思います。私のみるところでは日本人全体が今はそれだけの気迫を持っていないし、英語教師がいまほんとうに相手を説得するだけの信条を持ち得るかどうか、われわれの教養はそういう点で残念ながら片寄っていたと思います。

中村 基本的な精神では私は外山先生とちっとも変わってないと思います。英語の教師というものがもっともっと国際感覚を身につけると同時に、できれば、たとえ国際会議でも、彼らを説得するものを持つようになってくれれば、生徒に何らかの形で必ずはね返ってくるはず

だ。ただちょっと違うところは、そういう精神は同じで
あったとしても、それを技術的な面で teaching program
の中に生かして彼らに能力をつけることを目標とすると、
そんな力はついていないじゃないかというまた外部
の批判にさらされるにきまっている。それはまた生徒には
要求できないこともありますし、それを言いたかった
わけです。

知的魅力の足りない英語教師

外山 話しは変わりますがいま英語教育が抱えている
もう一つの問題に、英語教師に対する社会のべつ視とい
うものがある。これは、まさに英語教育が技術的な能力
において不完全であることももちろん少しある関係して
いると思いますけれども、日本の社会の中においてすら、
英語教師が持っている知的な存在としての魅力がほとん
どなくなった。生徒もそう感じているらしいし、社会もそ
う感じているという問題を重視したいのです。

国内で軽べつされている人が国際的にたかく評価され
るはずがない。そのために英語教育が根なし草になっ
ていて、一つの問題は、日本の英語教育なのかそれとも太
平洋のまん中に浮いている抽象的な英語教育なのかとい
うことがあります。それがはっきりしていれば普通の授
業をしていても一向にかまわない。今までどおりでか
まわないけれども、いまの英語の先生の土性骨みたいな
ものが欠けた外国語というのでは、本を読もうと会話
をやろうと何しようと、それは結局は社会から否定され
てしまう。

中村 それに一言つけ加えますと、国際感覚とか英語
教育の国際化といった場合に、英語教師それ自体が一
体国際感覚を持っているかとか、あるいは英語教育を国
際化することに対してどれだけ自信を持っているか、ある
いは関与して実際働きかけているかということに対して、
私はもう一つ疑問を持っています。

たとえば native speaker がある一つの意見を言った
ことに対して、われわれ日本人が意見をぶつけて議論する
ということがあまりにも少なすぎるということ。これは非
常に不幸なことであって、その意味でも英語教師が
実にだらしがないと言えるのではないでしょうか。

外山 それは native speakers が自分の母国語をしゃ
べって議論して、相手が外国語で議論している場合のハ
ンディキャップというものをわれわれが少し過小評価し
過ぎたのではないかと思います。これからは、外国語だから
うまく言えないのだけれどもと言っても、少しもおかしくない
と思うのです。

しかしその場合、言うことがないというのでは、いつ
までたってもおとの段階にまでは到達しない。だから
いい意味の elegant なけんかができるることは非常に大
切なことだと思うのです。今迄は仲良くするための外国語
ということを考え過ぎたきらいがあります。

中村 そうですね。どうも英語教師にはその辺が一番
欠けているのではないかという気が私もするわけです。
だから外国語を教えているということは、ある程度外国
の風俗習慣を自分自身が取り込んでしかるべきだと思います。
ですからたとえば、日本の文化の中において沈黙は
virtue であったとしても、外国人と渡り合う場合は
verbalize されるべきであって、自分の気持を相手に伝
えなければならない。ところが残念ながら伝えてないと
思います。かなり一方的交通でわれわれが承ってきた。
このことは一体英語教育にどう影響するかというふうに
考えますと、これは二重に絶望的だと思います。

若林 結局問題は、どの程度まで、どういうような質
あるいは量を達成すれば、国際化社会に対応するだけの
力といえるのかというの、実は生徒に要求することで
はないので、教師自身に対する要求だと思います。

中村 それに英語教師の質の問題もあります。
外山 そうですね。正直なところ英語の先生の素質が
低下していることは疑うべくもない事実だと思います。
それで生徒に、なぜ英語を必要とするのかという疑問を
誘発している。先生がよければ好きになってしまふの
です。好きになれば自分で勝手に justification をするわけ
です。

ところが目の前にいる英語の先生がなぜあの人はこんな
退屈なことをやっているのだろうということを多くの
人に感じさせる、ことに優秀だと思われる生徒に感じさせた
ところに問題がある。先生というものが持っている
イメージは、必ずしも英語のそのときの ability とか
competence の問題だけではないのです。total な人間
というものが作用している。その total なものは何かと
いうと、たとえば何かをどうしてもやらなくてはという
ような、ある種のエネルギーだとも言える。

先生がやみくもに、何かやらなくちゃ、やらなくちゃ
といっていると、そのプロフィルを見て生徒は、ああい
う先生はいいなと思い、それがたまたま英語であったと
いう、それに英語教育の生きた効用があると思う。それ
によって国際感覚というものがかりにあれば自然にそれ
も伝えられるだろうし、英語ぎらいも少なくなるだろう
し、長い目で見れば英語教師が社会から高い評価を受
けるようにもなると思います。

これからの英語教育

國弘 外山先生がおっしゃった（英語の先生に限らないかと思いますけれども）英語の先生の姿勢の中に鬼を感じないという気持というのは確かにあると思うのです。それに現代の若い人たちには、世界に日本は命を預けたんだという感覚が非常に鋭くあると思うのです。ところが肝心かなめの先生のほうはそれほど感じておられないよう見えます。

もちろん外国語などという、えたいのしれないものに一生をかけるということはたいへんなことですから、とてもそういう外的・社会的なまなましい現状について perception を持てないのだと言われば、全くそれきりの話だけれども、ただ perception gap が、特に英語の先生の場合には子供たちをして英語の先生を尊敬させない、あるいは身边に感じさせない一つの大いなポイントなのではないかという気がするわけです。その意味においてやはり英語の先生に、もう少しまなましい現実認識を持っていただきたいと思います。

若林 これからの英語教育に望むこととしては、まず、現在の教授法、それこそ日本ではおそらく一番影響を与えた Palmer なり、戦後でいえば Fries あるいは oral approach、最近は教授法ではないけれども変形文法なんかが話題になっているらしいけれども、英語を教える方法をもう少し、日本人が日本人に教えていっているのだという立場から洗いざらい総点検し直してほしいという気がします。

中村 私はこれからの英語教育ということについて、わりあい現象的な問題ですけれども、まず第一には、大学の英語教育がまず改革されるべきではないかと思います。これは特に教員養成を含めて抜本的に改革されない限りは、日本の英語教育というのは暗たんたる将来しか待ってないと思われる。

二番目は、いわゆる訳読中心の英語教育というものが、ことばが1対1で対応するということをいつの間にか子供たちの頭の中にもたたき込んでいいはしないか。ことばと実体というものは、どこか違っているということを教える一番いいチャンスでありながら、それを教えていないということに対する反省がもっと痛烈にあっていい。

三番目には、日本の英語教育が、特に戦後言語学といつも密接にかかわって考えられてきた。たとえばすぐ、新言語学と英語教育をどうするかというふうな形をシンポジウムのテーマに選ぶというような風潮はこの際徹

底的に反省されるべきではないか。もっと関連諸科学と広い意味で一体となった巨視的な形の英語教育を考えられていいと思います。そういう3点をこの際指摘したい。

外山 いまおっしゃったことも必要だと思いますけれども、いま現に生徒がいて毎日授業があるわけです。ですからきょうよりは明日、明日よりはあさってというふうに少しでも納得いくような授業をお互いにしていきたい。そしてその場合に全体的な人間というものをいつも考えてみたいということをつけ加えます。

國弘 一言だけ申し上げるとすれば、英語そのもの、並びに周辺に広くあるものに対して英語教師自身がその習得なり、把握なりに絶えず心をくだきそれに精進していることが最大の教育だと思います。それなくして、'how to teach' だけにうき身をやつしていても、子供たちはついてこないのではないかという気がするのです。

(速記: 上山 素子)

(P. 37よりつづき)

第3に、助詞・助動詞にも使用率の非常に低いものがあることが明らかとなった。これは私の予期しないところであった。

全体での順位	使用率(%)
1157	(83)
1158	(84)
1159	(85)
1393.5	(86)
1394.5	(87)
1549	(88)
1550	(89)
1710	(90)
1711	(91)
1712	(92)
1944.5	(93)
1945.5	(94)

ただし、これらの中には、会話語的なものが多い一方「かな」「そうろう」「ぬ」のように文語的なものもある。助詞・助動詞の中には、ほかにも文語的なものが含まれている。たとえば、(55) り〔完了〕 0.507, (64.5) き〔回想〕 0.370, (75) たり〔断定〕 0.222.

この統計的研究の対象となった資料は、もちろん文字言語のそれであるが、その中には文語的要素も混じっており、全体として会話語からはかなり遠ざかったものである可能性があることが、上述の点からも推察される。

(未完)

(東京大学名誉教授)



英語のヒアリング

NISHIYAMA SEN

西山千

英語を聞きとる力を養成する方法はいろいろあるだろうが、私はそういう教育にたずさわった経験もなければ、理論的な知識もない。また英語を聞きとる勉強もしたことがない。子供のときから英語を自然に身につけたから、聞きとる能力をとくに意識した記憶がないので、そういう自分の経験もあり参考にならないと思う。

ただ日本語と英語を比較して、英語を聞きとる能力に関係する音の比較とか、それに基づく能力養成のヒントなどを考えることはできる。もちろん、そういうヒントは英語教育の専門の先生には古い常識だろうが、ここに思いつくまま述べてみてご批判を仰ぐことにしたい。

音節の種類数

日本語だけを子供のときから身についていて、後になって英語を聞くようになった場合、各種の英単語を聞きわけることは極めて困難であろう。よくいわれることであるが、日本語の音節の音と英語の音節の音は非常に異なり、しかも英語の音節には全く日本語にない音が多い。そもそも音節の種類は日本語の場合英語よりはるかに少ない。

日本語には約100種から百数十種程度の音節の種類があって、そのいろいろな組み合わせによって日本語が表現されている。ところが英語の場合は、母音の発音が20種ぐらいあり、子音が25種ぐらいあるから、子音+母音のごく単純な音節だけでも 20×25 、つまり500種はある。それに子音+母音+子音とか、子音+子音+母音（“s t u”など）、子音+子音+母音+子音（“s t u d”）、その他さまざまな組み合わせを計算すれば、万を数える種類の音節数が考えられる。仮にそういう数学的計算通りの数を全部使わないとしても、日常の英語には恐らく何千種の音節が用いられているだろう。

百数十種の音節を使い、それだけに聞きなれている日本人は、数千種も異なる音節の英語を聞いても、その各音節を聞き分けることは当然無理である。新たにこのおびただしい音に慣れるだけでなく、それらの音の組み合

わせと意味とを結びつけて勉強しなければならないから大変である。

子供の音節の識別

アメリカ人が日本語をはじめて聞くとき、「ありがとう」という音節の組み合わせが日本人の考へている音節の感じと違う例がよくある。つまりローマ字でつづれば“arigato”と日本人は考へるが、アメリカ人にはそれが“audigatoh”と聞こえてしまう。「り」が“di”と聞こえ、「あ」とか「が」の母音は英語の母音のような混成音でなく単純音であることも、よく認識しない。だんだん日本語を聞き慣れ、さらに自分も日本語の会話を勉強するようになると、こういう日本語の音節が英語の音節と異なる独特な音であることを認識するようになる。そうすると「り」は“ri”と“di”的中間の音であるとか、「あ」は“au”でなく、それから“u”を除いた音である、というような説明を彼ら自身がするようになる。ここまで進めば、日本語を聞きとる能力が相当発達した段階に達している。

この例に似て、日本人が“read”と“lead”的rとlを聞き分けるのに苦労する場合がよくある。英語国民がこの単語を普通の早さで交互に発音し、それがreadまたはleadであるかを日本人に当てさせると、どちらであるか判断が狂う場合が多い。“Bat”と“vat”，“vat”と“fat”，“volt”と“bolt”，“run”と“rum”など、とくに子音の区別がむつかしい。

もちろんアメリカ人や英国人のような英語を母国語にしている人でも、聞き落とすということはある。また子音は聞き落としやすいから，“volt”と“bolt”などは、そのために聞き分けられないかもしれない。しかしそういう聞き落としがない場合は、これらの子音を容易に聞き分けることができる。

それはいうまでもなく、英語国民は子供のときから長年、毎日、常に英語を話したり聞いたりしているから、子音も母音も詳細に区別できるようになっている。また

恐らく自分が各音節を完全に発音できるようになり、その意味を同時に認識するようになっていることが、聞く能力を助長するのだろう。そのことを私は子供のとき次のような点で経験した。

“I’m gonna go home”とか“I’m gonna go see a movie”などの表現を子供が使っていて、私も同じように“gonna go”という音をいつも表現していた。なにか「やろう」とかどこかへ「行こう」というときは“gonna go”といっていた。そう聞こえたし、私も同じように発音すれば相手のアメリカ人たちは直ちにわかってくれた。

あるとき漫画のなかで“gonna go”という音のつづりをはじめて見たが、そのときは今まで自分が使っていた表現と同じであることに気がつかなかった。そして友達にこの漫画の文章を見せて、「これをどう読むのか」ときいた。友達は「それは“gonna go”だ」と発音してくれて、私ははじめて自分がいつも使っていた表現をこのようにつづることを知ったのである。

それからアメリカの小学校で“going to go”という文章の正しいつづりを学んだ。このときまでは“gonna go”は“going to go”的くずした発音であるとは全く知っていなかった。

つまり子供のときに私が身につけた英語のヒアリングは全く音の識別とその意味だけであって、文字と直接の関係はなかった。そして複雑な英語の音節を十分聞き分ける能力は自分の発音と他人の発音だけを通じて、段だん向上した。

それから小学校、中、高等学校など10年以上にわたって、その識別した音と文字との関連性を徐々におぼえるようになった。現在は無意識に英語の単語のつづりとその音とを結びつけているが、文字はヒアリングと基本的には関係のない一種の記号体系のはずである。英語の読み書きを自由にできるようになった年齢には、活字を読むとき、口で発音しなくとも、頭の中でその英語の音が聞こえてくる感じがするようになった。このようなさまざまな要素がヒアリングと結びつくようになったが、出発点は自分の発音と相手の発音の類似性を認識するプロセスであった。

一連の音節と意味の結びつき

この音は、単に無意味な一連の音節を識別するというものではなく、その一連の音節がはっきりした意味を伴うものであった。“Where’dja go last night?”という音を聞けばそれは“What did you go last night?”の意味であることは、この文章の正しいつづりと無関係に、この一連の音から意味を直接受けとった。“There

goes a squirrel!”という音を聞くと、すぐふり向いてりすがどこか走って行く姿を求めた。このセンテンスもつづった通りの発音でなく、子供だから“Dare goea skwerrow!”のように聞こえる場合がよくあった。それを直感的に意味として聞いて反応した。子供のときの全てのセンテンスもこのようにくずした発音であったと思う。それが自然な英語の習得過程であった。

結局自分が聞く音と自分が発音する同じ音と、それが代表する意味とは、一体となっていた感じである。「聞きとる能力」というような問題を意識したことがなかった。そういうことを自分の発音と音の意味と区別して、単独の問題として考えなかった。

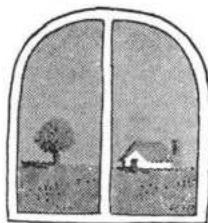
もちろん注意しなければいけない重要な点があった。それは学校の高学年になって先生たちから学んだのであるが、くずれた発音は教養のない人の発音であって、子供には許されるが、大人になったら正しく発音しなければならない、ということであった。これはアメリカの大学でも教授たちが注意して教えていた。正しい発音を学びそれに注意することが常識とされていた。

以上の経験を考えると、“red”と“led”を完全に聞き分けるようになる前に、こういう単語の意味とそれらの単語がセンテンスに用いられるいろいろな例の意味を意識する必要があるよう思う。“He led her to the red gate”という意味を、まとめて認識する練習も役立つかもしれない。センテンスの各音節がつながったとき、どのように聞こえるか、それをまた自分でも発音してみる、ということを繰り返す方法になるだろう。そのようなことは、一般に英語、とくに英会話を練習していれば、自然に行なっている方法かもしれない。ヒアリングの能力だけを助長するというより、英会話全体を向上させることを努力する必要があると思う。それが自然に聞く能力を向上させるのではないか。

最後に、会話の力を身につける方法であるが、テーブ、個人教授などさまざまな方法が利用されている。理想的な方法はアメリカや英国に住みつくことだろうが、それでなければ英語国民の教師と何週間か生活を一緒にすることもある。しかしそういう方法でなく、教育用テーブで練習することも、ある程度有効だろう。そのなかで、ビデオカセットを用いてテレビに画像を繰り返し視聴しながら自分でも発音し、その意味を同時に勉強する方法が新しい自習方法の一つであると思う。

方法はいろいろあるが、正しい発音を聞き、自分もそれを発音する努力をしながら、充分時間と勉強の努力を傾注すること以外に、聞きとる能力を向上する近道はないのではなかろうか。(国際コミュニケーション)

英語を読む力



HIRANO KEIICHI

平野敬一

新聞や雑誌に使われる英語を一応読みこなすには、それほど高度の読解力を必要とするとは思われない。あるいはどの英語の力と時事的常識を持ち合わせ、比較的版の新しい辞書か新語辞典が手もとにあれば、だれにでも大過なく読めるはずである。しかし、文意を大過なく解読する力が「英語を読む力」のすべてでないことはいうまでもない。もうひとつ、文の含みやふくらみを感じし味わう力というものがあるはずである。時事英語にそんな含みや妙味があるはずがないという人もいるかもしれないが、「生きた」英語が、なんの含みをももたず、数学の記号のように無色無臭に情報の伝達だけを行なうという場合のほうが、むしろ少ないと考えたほうがよさそうである。「生きた」ことばである以上、さまざまのニュアンスを担わないわけにいかないのである。こういったニュアンスを感知する力——それも「英語を読む力」の一つのたいせつな要素なのである。

たとえば、アメリカがベトナム戦争の泥沼に深くはまりこんでいたころの、いささか古い例をあげてみる。

Every day in every way, things are getting worse and worse. They are, that is, in the angry eyes of those who disapprove of U.S. policy in Viet Nam. (*Time*, May 12, 1967) (毎日毎日、あらゆる点で、事態は悪化の一路を辿っている。つまり、ベトナムにおけるアメリカの政策に反対している人たちの怒りの目でながめるとそうなのである)

別に文意のとりにくい文章ではないが、出だしのセンテンスを読んで、そこに表面の文意以上のなにかを感じとらなかったら、やはり「英語を読む力」という点ではものたりないのでないかと思う。この文は楽天的な自己暗示法 (autosuggestion) でかつて一世を風靡したフランスのエミール・クーエ (Émile Coué, 1857~1926) の有名なおまじない (英訳 'Every day in every way, I'm getting better and better') をもじったものである。1920年代の社会背景を描いた作品 (たとえばカナダの *Rum Runners* シリーズ) にちょくちょく登場する

ので知っている人も少なくないだろうが、労をいとわず調べるなら (とにかく調べる気になることが肝要), クーエの原文は *The Penguin Dictionary of Quotations* にも出ていることが分かる。さて、それが分かったところでたとえば原文の訳出のしかたが変わるものではないが、読むほうの味わい方は、いくぶんか深くなるはずである。原文がもつてあるパロディー的おもしろさがなんなく分かってくるのである。これは、いわば名句 (familiar quotation) が下敷きになっている例だから、いくらか見当をつけやすいほうかもしれない。

しかし「名句」というほどのものでなく、イギリスの伝承童謡の歌詞が、さりげなく下敷きに使われていて、それが文章にふくらみを与えていた例は、私が繰り返し主張してきたように、英語には予想外に多いのである。たとえば、いま手もとにある近着のイギリスの雑誌を開いてみると、近づくフランスの大統領選挙の下馬評が出ている。左翼陣営が推しているミッテラン氏が第1回の投票で首位になりそうだが過半数はとれず、第2回の決戦投票ではおそらく敗れるだろうという観測なのだが、記事は次のようになっている。

M. Mitterrand will probably have to sing twice if he wants any supper; and if he does he probably will not get it. (*The Economist*, April 13, 1974) (M氏は夕食にありつくためには2度歌わなくてはならないだろう。しかし2度歌ったら夕食にありつけないだろう。)

直訳しただけでは分かりにくいかもしれないが、これはイギリスの読者が例の「トミー・タッカー君」の唄 ('Little Tommy Tucker,/Sings for his supper./What shall we give him?/White bread and butter.') を知っているという前提があるからこそ成り立つ表現なのである。この童謡を知っている人にとってこの原文が喚起するイメージやその含みを感じするのは容易なことであろうが、童謡を知らなかったら、辞書で 'supper' の項をいくら精細に調べても、この文章はすっきり解明できな

いのではないかと思われる。('No song, no supper' いう格言もあることだし [The Oxford Dictionary of English Proverbs³. 参照], 童謡にあまり通じていない日本の利用者のことを考えて、こういう表現を英和辞書に採り入れていいと思うのだが、辞書の編者たちはそこまで踏み切ろうとしない。)

ついでにこのエコノミスト誌の同じ号を調べてみると、イギリスの合同機械工労組の闘争を報じた記事に "Hot, cross Scanlon" という見出しがついているのに気がつく。スキャンロン氏はこの労組の委員長として抗議ストを打とうと気負い立っているのだが（委細省略）、それを「カッカと腹を立てているスキャンロン」というふうに表現しているのである。意味合いはだいたいそうなのだが、この見出はそれ以上にもうひとつ童謡('Hot cross buns !/Hot cross buns !/One a penny, two a penny, /Hot cross buns !')との重なりがおもしろいのである。そしてスキャンロン氏に対するエコノミスト誌側の軽い揶揄の気持ちが、この見出しから読みとれる。

このように童謡が下敷きになっている場合は、注意してみると特に見出しに多いように思われる。たとえば不動産の操作で不当利得をしたと疑われているアメリカのニクソン大統領のことを報じたニューヨーク・タイムズの記事 (Jan. 13, 1974) の見出しが

The President's Money Problems

They Wonder How His Garden Grew

となっていたりする。なんとなくこのままでも意味が分かってしまうが（どうして庭がそんなに大きくなかったのか）、下敷きとなっている童謡 ('Mary, Mary, quite contrary,/How does your garden grow ?/With silver bells, and cockle shells,/And pretty maids all in a row.') を知っているほうが、見出しおもしろさと含みとがはっきりするのである（この見出しをみて読者が思わず 'Nixon, Nixon, quite contrary' と口ずさみたくなるところがミソ）。同じ童謡の出だしを、たとえばエコノミスト誌 (Feb. 16, 1974) は次のように使っている。

Dairy, dairy, quite contrary

これは畜産品の価格が思うように動かないことを報じた記事につけた見出しだある。しゃれたうまい見出しのつけかただと思うが、読者が「つむじ曲がりのメリーちゃん」の童謡を知っているというのが前提になる。

またカナダの大衆誌がかつてトルドー首相夫人に似ている女性をカナダの各州からピック・アップして特集したことがある (Maclean's, October 1972). 首相夫人が First Lady だから 'Second Ladies' (これが特集のタイトル) いうわけ。そのタイトルに 'We spy with our

little eye girls who just look like Margaret Trudeau' という説明がついていた。この 'with our little eye' も有名な「だれがコック・ロビンを殺した？」という童謡の第2スタンザ ('Who saw him die ?/I, said the Fly/With my little eye / I saw him die.') から来たものである。それが分からないと、なぜ little eye なのか、またなぜ eye が単数なのか、そのへんのところが読者にはっきりしないにちがいない。じっさい童謡を抜きにして、こういう文章を人はどのように「読解」するのだろうか。

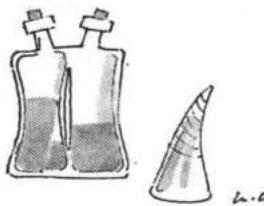
どうも伝承童謡にばかりかかづらっているようだが、英語に含みを与えてるのは、もちろん童謡ばかりではない。たとえばアメリカ・インディアンに対するアメリカの政策をあげつらった文章に

Jefferson's (approach) turned out to be the road not taken. Jackson's was the road taken, and it led to Wounded Knee in 1890 and again in 1973 (Max Lerner, The Japan Times, April 2, 1973) (ジェファーソン大統領の方針は結局採用されず、ジャクソンの方針が踏襲され、それが 1890 年の、そしてさらに 1973 年のウーンデット・ニー事件を生みだした) というのがあったが、この文章に読者がロバート・フロストの詩 ('The Road not Taken') を想起することを筆者ラーナーは当然のこととして予期しているのである。

またアメリカの評論家 Steward Alsop が 'As for George Wallace, he is to the Democratic Party the man upon the stair.' (Newsweek, March 27, 1972) (イタリックスは筆者) (ウォーレスはどうかというと、民主党にとっては、階段で会う例の人なのである) と書くとき、これは読者になぞなぞをかけているわけでは決してないのである。英米で広く知られているナンセンス・ヴァースの一つに 'As I was going up the stair/I met a man who wasn't there./He wasn't there again today./I wish, I wish he'd go away.' というのがあり、オールソップ氏の文章はそれを踏まえているのである。もし私たちにとってこの文章が注解なしで不可解だとすれば、それはやはり私たちに「英語を読む力」がじゅうぶん備わっていないから、ということになるであろう。残念ながら、英和辞典をいくらていねいに引いてみても、また聖書やシェイクスピアを懸命に勉強しても、それだけでは現代英語の含みが十二分に分かるようにはならないのである。途は、依然として遠いといわなければならぬ。

（東京大学教授）

書く力の養成



MURATA KIYOAKI

村田聖明

英語で情報や意志を相手に伝えるための媒体は2つある。一つは話すことば（音声）であり、他の一つが書きことば（文字）だ。

媒体が違うこと以外に、書くことと、話すこととの間に、もう一つ大きな違いがある。それは、一つの文を作るのに要する時間である。

話すことは、いわなれば、「インスタント英作文」である。一つのまとまった文を組み立て、発表するという作業を、せいぜい數十秒以内に完了しなければならない。伝達そのものが、この短い時間の間に終わるのである。そのためには、伝える文も、あまりひどい間違いを持つことは許されない。さらにまた、媒体となる音声の形——すなわち発音——も、標準からかけ離れすぎると、相手に理解されないことになり、したがって、伝達は完了しない。

これに比べると、文字による作文は遙かに容易である。第一に、発音を正しくすることに相応する作業、すなわち、相手に正しく読まれるように文字を書くことは、それほど困難ではない。

さらに、これよりもっと大きい利点は、書く時には時間の余裕がある、ということである。

文字による伝達は、そもそも、時間的、空間的に距離を持った相手に向かってなされる作業である。従って、相当な準備の時間があるのが普通であろう。個人にあてる手紙でもそうであるし、出版物に掲載する文であればなおさら時間的余裕を確保することが容易であろう。

英語で文を構成することの練習のためには、書くことの意義は大きいと言えよう。

どうすれば書く力を早く養成できるだろうか。基本的な答えは極めて簡単である。あらゆる技術の鍛成と同じく、英文を書く技術の程度は、費やされる時間の量に比例する。

しかし、更に大切なことは、その時間を、どのように費やすかということである。同じ時間を費やすにしても、正しい技法に従い、出来るだけ効率的な練習方法を

用いることが望ましいのはいうまでもない。

くわしく言えば、まず第一に、文法を身につけるということである。文法を無視して、無暗矢鱈に英文らしきものを書きまくっても、それは技術の向上に貢献しない。

第二には、よい手本に、出来るだけ多く接することである。ここでいう手本というのは、狭い意味の「文例」ではなく、模倣の対照になる「英語」そのものを指す。

英語を学ぶ上で忘れてならないことは、その目的である。英語という外国語を通じて、英語国の歴史や文化を知ることも、一つの目的であろう。しかし、この場合と、英語を駆使する技術を身につけることが目的である場合とでは、勉強の方法は全く異ならねばならない。

前者の場合は、今から何百年も前の英文も読む必要があるが、後者の場合は、古い英文に接することは害がある。

英語を用いて通信をする相手の人間は、現在生存する英語国民であるから、学ぶべき英語は、当然、彼らが用いている、「今日の」英語である。

模倣する文例は、このような英語の中に求められねばならない。具体的には、今日の文学的作品、新聞、雑誌、書籍の中に求められよう。

以上は原則論だが、現実にわれわれが、日本という言語環境の中にいて、英文を書く練習をする時には、いくつかの大きな障害がある。

まず第一に、「書く」ことを自己に強制するためには何かの目的がなければならないが、これが容易ではない。日常仕事の中にそのような要請があれば、これは理想に近い。そうでない場合は、自分で強制の手段を見つけなければならない。

毎日、日記をつけることも一つであろう。しかし、日記は本来、自己との対話の手段であるから、他人に見せて、文意が伝わるかどうかをたしかめることには適しない。

英作文の練習問題を解いて見るのも一方法であろう

が、これも、結局は、相手に通じるかどうかを確認できない限り、あまり有効ではない。

第二の問題は、和英辞典にある。日本人が英文を書く場合、よほどの達人でない限り、和英辞典は不可欠である。にもかかわらず、和英辞典は、今日存在する形のものでは、英文を書く練習にはあまり役に立たない。いうならば、極めて不親切である。

一つの単語を引いて見ると、いくつもの相応語が並べてあるが、その一つ一つの使いわけの説明がない。

反面、英和辞典にも、注意しないと間違いを犯すような落とし穴がある。それは、英和辞典は本来、英文を「読む」作業を助けるためのものであって、「書く」作業の役に立つためのものではない、ということである。

読むことの助けになるためには、何世紀も昔の文献に用いられている用語も採録しなければならない。単語によっては、あるいは辞書によっては、かなりくわしく、「古語」や「廃語」や、「地方語」、「卑語」などの分類が示されている。しかし、これら以外の単語はすべて、いつ、どこで用いてもよい、ということにはならない。

「古語」とまではいかなくても、「古語」とされるべき寸前にまでいっている単語もある。それを知らずに用いれば、おかしい文が出来上るのは当然である。

従って、われわれが英文の構文に上達するためには、和英辞典や英和辞典に頼らない方法を考えなければならない、ということになる。

そのような方法があるとすれば、それはやはり、良い手本としての英文に多く触れながら、その中に、文脈の中での単語や成句の用法を、一つずつ把握していくということであろう。

これはいうまでもなく、時間のかかる方法である。しかし、どんな技術でも、それが習得に値するものであれば、その獲得には、当然、相応の犠牲が伴うのである。いい古されたことばだが、英語上達に安易な方法はないのだ。

具体的に英文を書く練習の方法は2つある。一つは自由英作文で、他の一つは和文英訳である。両者それぞれに長所も短所もある。

自由英作文は、自分の好む話題について、自分の好きな、知る限りの表現法を用いて構文すればよい。この意味では、たしかに、「書く」ことの練習にはなるだろう。しかし、自由英作文の最大の欠点は、この方法では書く人のもつ思想や、情報以外の概念を扱う練習が出来ないということである。

この点、和文英訳では、原則的に言って、英訳する日本文は自分のものではない。従って、自分が用いないよ

うな発想法や、事実を英語で表現することを強制されることになる。これによって、和文英訳をする人の語彙は自然に増えることになる。

上に述べた2つの方法のいずれにも共通する大きな問題がある。それは、作業がとかく日本語的発想法を出発点とするということだ。

自由英作文の場合でも、書く人はまず、頭の中で、日本語で文を組み立てて、それを英語に直すという作業をする。この意味では、「自由英作文」といえども、所せん、「和文英訳」に過ぎない。英訳しようとする原文がたまたま、自分が作った日本文であるというに過ぎない。

和文英訳となると、材料が、印刷された文章である場合が多いので、「日本語的発想」の例はさらに増える。

翻訳の眼目は、文字を訳するのではなく、文字の表わす概念に相応する英文の表現を探し出すことである。

例えば、日本語で「重病人」というのを、そのまま a heavy patient と英語でいうのは間違いである。なぜなら、「重」という文字を「重い」と考えて、さらに、「重い」に、その持つ意味の一つに過ぎない、「質重」の意味の heavy という相応語をふりあてたからである。「重病人」の本当の意味は、a patient who is in serious condition あるいは a serious case ということである。

しかし、これらの英語の相応語を知らないからどうしたらよいだろうか。和英辞典に「重病人」という見出し語と、正しい相応語が出ていればよい。もしそうでなければ、結局は、当人の英語の語彙の中になければならない。その意味でも、英語を書く能力の開発の第一歩は、英語を読むことから始まるわけである。

しかし、最後に難問にぶつかる。自分でいくら練習をしても、それを誰かに見てもらわない限り、自分の書いた英文がどの水準にあるのかは知り難い。さらに、欠点や、間違いを指摘され、改良策を示されない限り、進歩は期待されない。

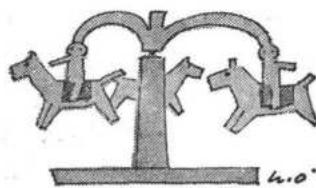
ここに、日本人が英語を書く練習をする場合の根本的な問題がある。この点、読む場合には、自分の理解度の判定を自分ですることが遙かに容易である。

正直なところ、この問題にたいする解答は筆者にも判らない。

(ジャパンタイムズ編集局長)



英語で話すことの指導



ある中学生用の英語テキストに、
The man in the store showed them a book on
Japanese music.

という文章があった。私はある中学の英語の授業風景を見学した際に偶然にも学生たちがこの文を読んでいるところにぶつかった。学生たちは大きな声で読んでいた。しかもかなり速いスピードで。私は自分が英語でする講演ではいつも速くしゃべりすぎるのではないかと反省している一方、また英語はゆっくりゆっくり話すのではなく適當なスピードがあればこそ生きる言葉であるという持論をくずさないから、担当しているラジオ講座の番組でもことさら中・高生を意識してゆっくりしゃべったことはない。その私が、「これは速い。」と思ったのである。担当の先生が速く読むようにすすめたのか、その教科書に付属あるいは別買のカセットテープに吹き込んだ外人タレント（本職の教師でなく単なる声屋さん）の読みかたがそうであったのか原因を調べるチャンスはなかった。しかしそのとき私の心の奥に湧いた不安は数日後、私が個人的に行なったある実験の結果、ますます大きくなってしまった。

私は前述のセンテンス The man in the store... を手近な高校生10名を招集して、速く読ませてみたのである。私はそれを自分の録音スタジオでテープにとり、さらに book のところだけをはさみで切り離して、別のからテープの中にその単語だけをつないでみた。今度はこれを東京都内にある、あるアメリカン・スクールの小学生数名に聞かせてみた。Does it mean something to you? とか Does it sound English to you? と私が質問したのに対し、Yes と答えたアメリカ人少年少女は一人もいなかった。これはいったいどういうことであろう。

This is a pen. と同時に習い始める「本」という単語 book が native speakers (少なくともあまり日本人の英語発音に汚染されていない耳をもつ外国人) に通じないとはいかなることか。習ったオランダ語が一言も通じなかつたという勝海舟の時代ならともかく、ラジオ、テ

TOMMY UEMATSU

トミー 植松

レビ、テープと視聴覚教育の粹を駆使できるきょうこの頃、いったい何たることかと思うのである。

「単語一つ book だけを発音させれば通じる英語になったかもしれないが、文章の途中での短い単語としては聞きとれなかつたであろう」という楽観的観察をする先生がたもいらっしゃるであろう。たしかに natural flow of speech の中にある短音節単語 (monosyllables) は英米人のそれさえはっきりしないこともある。

しかし、私はこの原因を二つの要素にまとめてみたい。一つは日本語のようにストレスや抑揚のない言語を長年話している人間はあまり注意しない限りつい外国語も平たんに発音してしまう癖を持っていること。

つぎは、英語は強弱のアクセント、日本語は音の高低、つまりピッチ・アクセントしかないと思うような迷信的信条があることがある。

したがって、私の解釈によれば前述の book が通じなかつたのは、その単語の強さでなく、音程の高さが足りなかつたためだと思うのである。歌の独唱でいうならば、音痴といおうか、コーラスでいうならばテノールとバリトンぐらいの差があるといえる。これを音階で示すと、英米人の [buk] という発音が、〔1図〕のようになるとこを、多くの日本人は、〔2図〕のごとく発音しているわけである。新米の外人教師であればこの日本人の英語を聞いて「ちょっとどこかおかしい」と言って、正しい発音はこうですよとやたらに自分の発音の真似をさせるが、汚染された耳をもつ古手の外人教師など、苦労しなくともじゅうぶんわかるからいちいち直さなくなってしまう。やはり日本人の欠点をよく知り、その欠点を理論のみならず身をもって overcome した、資格ある教師の指導に期待せざるをえ

〔1図〕



〔2図〕



ない。

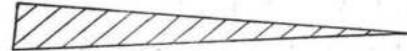
それで考えさせられるのが、この冒頭にあった話すスピードである。私は最近のこの傾向をいままでの反動と解釈している。物には何事にも反動がある。使い捨て時代の反動が最近の物資不足の現状であろう。また、前アルゼンチン大使河崎一郎氏の著書で問題となった『みにくい日本人』なんかどこのことかと思うようにかっこよく、すぐすぐ育ったこの頃の若い男女に体力も精神力も足りなくなつたのも、力があつてもかっこ悪かった日本人に対する反動の結果かもしれない。英語の世界でもそうで、読む文字ばかり追いかけて、聞いたり話したりすることなんかまるで罪悪の如く扱った英語教育が悪かった、悪かったと他人を責め、自分を責めた結果、英語はペラペラしゃべるもの、書いたり、読んだりする必要はないし、文法なんかくそくらえ、アクセサリーの一つだぐらいに考えられてきている傾向——これも反動ではなかろうか。

もっと焦点をしぼって話すスピードにしてもそうである。芸術でも運動でも、いや何でもそうであろうが、物事の習得にはしかるべき順序がある。基礎があって応用がある。言語の習得は音声から始まるが、その音声の学習課目には、発音あり、発声法あり、連音あり、抑揚ありである。英米人が外国語を習得するときにも、enunciation が良いとか articulation が悪いとか、また diction が poor だの excellent だのとうるさくいう。これらが一つずつ形成されて仕上げとして、会話やスピーチをいかに生きた言葉として deliver または present してゆくかという課題に迫るわけである。ところが最近、その辺の英会話学校の教えかたでもそうであるが、やたらとこの natural flow of speech ばかりに焦点を合わせ過ぎる。空中の樓閣である。オリンピックや万博という期限付きで急ピッチで完成した高速道路がもうすでにガタがきて、大地震や火災があれば一大地獄と化す心配があるのと同じである。私には、二世の友人が多くまたその両親である一世に接したことも多いが、明治・大正時代にアメリカに移住したこれらの一世たちは基礎的なまた系統的な英語の学習をしたわけではなく、必要に迫られていきなりぶつけ本番で聞いたり話したりする英語を身につけた人たちである。この人たちには、すぐれた勘があり、肉体力も精神力もあって英語をものにしたが、その英語は不正確で、かつまたひどいなまりのあるものが多い。私は最近、小さい学生の英語学習を見ていると、この一世たちの英語を思い出す。極端にいうと「一億総一世に逆もどり」という危機を感じるのである。私が最初にある不安と言ったのは、この危機感であ

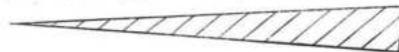
る。このままいけばせっかく昔の偏った英語教育が修正されるどころか、読めもできない、書けもできない、そして勘にだけたよってものを言う不完全な speakers of broken English ばかりができてしまう。「仏作って魂入れず」である。

ではその欠点を補うために具体的にどんな方法を行なえばいいかとなると一口には言えない。あえて言うならば応用形を強調するまえにもう一度、基礎の確実な建て直しをやるべきではないかと思う。速く読ませることを強制するまえに、一語一語しっかりとした発音を身につかせることである。I could have done it if I wanted. を [ai kəd̩v d̩áni if ai w̩ántid] と言わせなくとも [ai kud̩ h̩ev d̩an it if ai w̩ántid] でもいいではないかと思う。こういった文を何十ぺんも繰り返しているうちに、ある日 done と wanted さえ強く言えば、あとは弱く言っても速く言ってもいいんだな——いやそのほうがもっと real なんだな、と思ってくれれば、それが身につき応用力が付くというものではなかろうか。

また、last train, big girl, homemade などの t, g, m などの 2 つの子音は連音して 1 つの長子音になるなどの音の連結 (linking) などにあまりこだわらず、あくまでも単語の発音の正確さを強調し、流暢さは熟語、慣用句単位の音のつながり (breath groups) にとどめるべきだと思う。もう一つ話しかたのこつとしてぜひ若い学生たちにおすすめ願いたいのは、一つの文を話すとき日本語は語尾を弱めて、

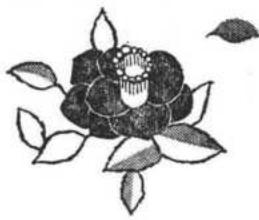


となる傾向があるが、英語はむしろ反対で、



となる傾向があることをじゅうぶん認識させる必要がある。これを首尾よく実行する一つの手段として腹式呼吸を奨励することである。もうそろそろ誌面が尽きるので腹式呼吸・英語発声法についてはまた別の機会に述べるとして、姿勢を正し、胸いっぱいに息を吸い込ませて、腹に力を入れて、かなり長いセンテンスが言い終わってもさらに息が残っているという発声法をやらせると、文の語尾がアクセントがなくなったり、声が落ちて聞こえない、通じないという英語にならないですむ。つまり、こんなことから本人たちが少しでも通じる英語を習得する喜びを感じたら、自信がつき、やる気があふれてくる。こうなれば教える目的の半分以上は達成されたのではないかと考えるのである。

(英語評論家・ラジオ講座「百万人の英語」講師)



Pattern Practice から Communication Practice へ

OGATA

ISAO

緒 方 勲

1. CP への指向

米国のある教科書に“manipulation”と“communication”という学習目標を設定する見出し語が用いられたのは今からずっと12年ほど前のことであった。このふたつの用語に何か深い意義や厳密な規定があったわけではなくさうであるが、言語の心理学的、社会学的機能についての探求や言語観そのものの対立的な立場などにも刺激されたかのように、すでにじゅうぶん根をおろした習慣形成を中心とした Pattern Practice (PP) から、さらに、意味のある内容や思想の自由な伝達を重視した Communication Practice (CP) への意欲的な指向がみられるようになった。Prator は

“The most significant trend in methods of teaching English as a second language may well prove to be the attempt to assign to communication its proper role in the classroom.”⁽¹⁾

と述べているし、最近では、有意義な伝達活動 (CP) を入門期のはじめから文型練習の中心にすべきであるという Oller=Obrecht など⁽²⁾⁽³⁾の主張も注目されている。

2. Prator の 4 段階

ところで、Prator は教室における言語活動を manipulation activities と communicative activities に大別し、前者は音声・語い・構文が教師・テープ・教科書から一方的に生徒に与えられるのに対して、後者は生徒自身が自分の考えを表明するのに必要なものを自分で用いるものであるとしている。また、さらにこの両者を 2

分して 4 つのグループに分け、

1. completely manipulative
2. predominantly manipulative
3. predominantly communicative
4. completely communicative

という段階を設定しているが⁽⁴⁾、これは表面的には一応、Twaddell の the five steps of learning a language⁽⁵⁾ にみられる recognition, imitation, repetition とグループ 1, variation とグループ 2, selection とグループ 3 (およびグループ 4) のように対応させることができよう。⁽⁶⁾

ところが、心理的に考察すると PP と CP 指向の言語活動ではその原点においてかなり重大な相違点があるように思える。一例をあげると、PP では He went to town yesterday の substitution の段階において、town の部分に slot を設け、ここに school, church, class などの語を代入することによって習得目標である went という過去時制を習慣的、「半意識的に (subconsciously)」身につけることができるという。つまり、問題点から注意をそらすことを活動の焦点とするわけで、Lado は PP を “rapid oral drill on problem patterns with attention on something other than the problem itself”⁽⁷⁾ と説明している。これに対して心理的な立場にある Rivers は “If the drill is to be effective, the student must be aware of the crucial element in the operations he is performing.”⁽⁸⁾ と真

(4) Clifford H. Prator, “Development of a Manipulation-Communication Scale,” *English Teaching Forum*, VIII, 1970.

(5) W. Freeman Twaddell, *Preface to the First-Year Seminar Script*, ELEC, 1958.

(6) 後田忠勝「言語活動について——その理論と実際——」愛知教育大学「外国語研究」10, 1972, pp. 101—117.

(7) Robert Lado, *Language Teaching, A Scientific Approach*, McGraw-Hill, New York, 1964, p. 105.

(8) Wilga M. Rivers, *Teaching Foreign Language Skills*, University of Chicago Press, Chicago, 1968, p. 82.

向から対立している。

また、PP がよく統御された状態で行なわれ、生徒の反応に誤りの発生の可能性がなく、発話がきわめて満足になされても意味や理解が伴わないままで終わってしまうこともある。例えば、

- 1) a) She eats apples.
- b) She sells apples.

のような場合には当然 b) において意味機能に抵抗があり、さらに

- 2) a) She'll make him a good wife.
- b) She'll make him a good husband.

となると文法的な問題に発展する。

したがって、この段階の PP ではむしろ、類推 (analogy) が安全で、文型の理解が定着していることが第一条件であり、音声面とくにかぶせ音素にかかるバターン化のほうに確実な効果が望めると言つてもよからう。Slot への cue が語い練習になつてしまふようでは本道をそれている。

3. Paulston の 3 段階

意味の重視を勘案した指導手順に Paulston が提案している次の 3 段階法、つまり

1. Mechanical Drills
2. Meaningful Drills
3. Communicative Drills

がある。⁽⁹⁾ Paulston は習慣形成をねらいとしたこの第 1 段階の必要性を認めながらも、自己の考えを表明するためには、第 2 段階の練習が必要であることを強調している。彼女の説くところによれば、これは初期の第 1 段階と最終の第 3 段階の中間にあって、半ば統御され、半ば自由な条件におかれている。教材の内容のわくを越えない “controlled” conversation や教室や身のまわりの環境に直結していることがらなどがその内容になる。したがって、

- 1) My shirt is red.
- 2) I have three sisters.

のような発話では 1) が第 2 段階にあり、2) が第 3 段階になると考へる。

また、Paulston は第 2 段階の前に必要な説明をする時間をとるのがよいとしている。第 1 段階の練習で類推によって正しい理解を得ている生徒には補強の目的が達せられ、まだ理解に達していない者に対してはこのときが説明の好機であるからである。

(9) Christina Bratt Paulston, "The Sequencing of Structural Pattern Drills," *TESOL Quarterly* 5, 1971.

4. 教育的問題点

PP でも、Prator や Paulston の場合でも最初の段階はきわめて強力に統御されており、生徒の誤りをおかす可能性が少ないので特徴である。Mim-mem と discussion, dictation と自由作文を考えればその情況がわかるであろう。しかし、最近の関心事は生徒がおかず誤りの分析であり、誤りをおかさないですむという事情が眞の言語の修得と本質的にどのようにかかわりあうかという疑問である。PP から CP へと段階が移行すればするほど、誤りの可能性は大きくなる。しかし、そのような試行錯誤は言語学習につきものであり、その誤りの性質そのもののほうが問題になってくる。

Chomsky は言語教育についてあまり積極的な提言をしていないが、それでも “I think we should probably try to create a rich linguistic environment for the intuitive heuristics that the normal human automatically possesses”⁽¹⁰⁾ と述べているのは興味深い。一般に言語学とか文法の理論が生のままで教室にとり入れられたり、直接すべての領域に応用されることはないにしても、いわばその精神は実験されるねうちがある。自ら主体となって言語活動に参加する積極性や発見するよろこびなどを日常の教室活動にとり入れ、いわば心の活性化をはかる必要はじゅうぶんある。単なる mim-men から出発して、生徒自身の体験によって活動する道程をうまく調整していく方法を心得るのが教師のつとめであるといえる。

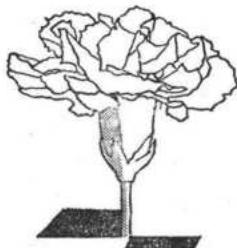
Wilkins は “mentalism or behaviourism?” という話題を、‘Mentalism and behaviourism.’ And there need be no contradiction.⁽¹¹⁾ と言ってしめくくっているが、筆者も PP のすぐれた効用を信じて疑わないし、その可能性を高く評価するものである。ただ問題なのはいわゆる displaced speech と呼ばれる無責任な発話練習、音声にひきずられたり、スピードにふりまわされて思考力が阻害されたりすること、visual cue をもっととり入れるべきこと、そして最終的には受身から能動への発展のチャンスが必要であることである。

(白百合女子大学助教授)

* * *

(10) Noam Chomsky, "Noam Chomsky and Stuart Hampshire discuss the study of language," *Listener*, May 1968, P. 690.

(11) D. A. Wilkins, *Linguistics in Language Teaching*, Edward Arnold, London, 1972, p. 176.



Pattern Practice から Communication Practice へ

WATANABE MASUYOSHI

渡辺 益好

Pattern practice は、そのねらいと方法を正しくふまえて実施するならば、非常に有効な学習活動であることは否定できない。Michigan 大学の English Language Institute で、長年にわたり実施されたこの指導技術が日本に導入されて以来、いろいろの学校で、その成果が発表され、停滞気味であったわが国の英語教育界に新風を吹き込み、全国いたるところで研究会・研修会が開かれ、英語教師の関心を集めた。多くの英語教師が、多少なりともその長所と思われるものを、自分の英語指導の中に取り入れ、自分なりの授業を進めてきたと思う。しかし、実際に取り組んでみると、思うようにいかない、言われている程の効果が上がらない、生徒が思うようについて来ないなど、pattern practice の英語指導における有効性を、疑問視するむきも少なくない。その原因をつきとめるために、この pattern practice のもつ理論的な意義と問題点を洗ってみたいと思う。

1. Pattern Practice の意義とねらい

Pattern Practice は Oral Approach を指導原理とし、構造言語学の「言語の運用は mimicry あるいは analogy」という考え方と、心理学的には行動主義心理学の立場、つまり、「人間は基本的には、動物と同様の学習過程をとる (Stimulus-response model of conditioning)」という立場をふまえた指導技術である。そのよって立つ言語観は、"Language is speech, not writing", "A language is a set of habits" であり、そのねらいは speech habit formation である。これは教師が与えることのできるものではなく、学習者が practice によって、自から獲得しなければならないのである。つまり、教師は英語の知識を与えるのではなく、英語の speech habits が生徒の身につくように指導する。その方法上の柱が pattern practice なのである。Twaddell は "Language Study and Language Learning" (講演) (1958) の中で、習慣形成の 3 つの要素、つまり、imitation,

chance, instruction を取り上げ、そのうち chance は、外国语学習には wasteful であるとして考慮の外におき、imitation と instruction を学習作業として外国语学習の中に組み入れている。習慣形成には imitation の方が instruction より効果的だが、instruction は、"correction and guidance" としての役割を演ずるといい、"... both guidance by instruction and the formation of habits are essential activities in the foreign language classroom" と論を進め、形成された言語習慣を confirm するのが practice であるとしている。

Pattern Practice で drill さる前もべき構文は、ってすでに導入されていることが前提であり、教材面では母国語との比較分析による困難点に重点がおかれるのが原則である。

2. Pattern Practice における問題点

(1) Pattern practice における drill は、構文をどう取り扱うかという、操作面に重点がおかれて、文の表わしている意味を理解していくなくとも、練習可能な場合も多く、現実の場面では用いることのないような文までとび出して来る場合もある。Pattern practice のねらいの一つである "how to say" から生徒の注意をそらしての drill が、"what to say" からも注意をそらさせる結果になってしまるのは皮肉なことである。特に初步の段階においては、pattern practice のような機械的な drill では、意味、つまり、what to say をふまえて言う余裕がなく、確かに言ってはいるが、声を出しているだけという作業になりがちである。

(2) "Language is a set of habits" という言語観にもとづく pattern practice では、その目標が "habit formation" であり、言語習得が他の習慣形成と同じレベルに置かれ、言語についての知識にもとづいて文を作る学習者の心の働きや creativity といったものは無視されている。生徒の自己矯正の能力の必要性は認めては

いるが、"study about the language" を "necessary evil" としてやらざるを得ないとする。しかし、この「言語についての学習」も、imitation や practice の後で帰納的になされるわけで、imitation や practice の過程では、意味と構文とのかかわり合いに対する「なぜそうなるのか」という疑問や不確実さを補充し、十分納得するためのよりどころがない。

(3) 生徒の立場から pattern practice を見た場合、類似した文を同じような方法でくり返し言わされ、内容的にも生徒の知的発達段階に比して幼稚なものになりやすいので、疲労も感じやすく、興味の消失をもたらしやすい。また、生徒の知的欲求や自分のことばで言いたいという気持を無視する drill という印象が強く、よほどの「必要感」や「動機づけ」がない限り「ああ、またか」という気を起こしやすい。こんな情況では、教師がいくら力んでみたところで、期待するだけの効果は上らず、「指導」はしているが「学習」がないという結果になりかねないのである。

(4) Pattern Practice では、Selection を除き、cue が与えられての drill であるため、現実の speaking が active な行為であるのに対し、どうしても精神的に passive なものになりやすい。自から進んで英語で言う態度の養成はあまり期待できない。また Selection にしても、pattern として記憶しているものの中から、situation に応じた適当なものを選び出すので、その蓄積される量が問題で、対象はその枠内にしほられ、文法の規則によって文をつくるということは考慮されていない。

3. Pattern Practice における問題解決への方策

Pattern practice の弱点を補充するという観点から、その方策を考えるならば、何といっても、表面的なことばの操作になり勝ちなこの oral production drill に、正常な自然なことばの側面をもっと加味することである。つまり、ことばは communication するために存在するという現実をふまえ、communication そのものに価値があるという意識を授業の中に盛り込むことである。生徒の言語運用に際しては、いわゆる文法的に正しく、発音も正確なという観点をはなれ、英語自体にこだわって生徒を憶病にすることを極力さけ、表面的な英語だけではなく、心の通じ合いを尊重する。すらすらと出てこなくてもいい、ボツリボツリとたどたどしい英語であっても、とにかく自分の英語でものを言うという経験の場と、音声的に、あるいは文法的におかしなところが

あっても、先生におこられたり、級友から笑われたりしないのだと安心して英語が言える雰囲気づくりが必要である。何も言わなければ communication は零だが、自分の能力に応じて何かを言い、言えないところは身振り手振りで補い、それでも足りないところは相手に推量してもらえばいいという位に、生徒達が考えるクラスの雰囲気なら理想的であろう。

生徒は、とにかく英語で自分のこと、自分の身近なことを英語で言ってみたいのである。それは mim-mem でも patternpractice でもない。生きたことばとしての英語、means of communication としての英語なのである。

この自分の、心からの表現の場が、授業の中で与えられていれば、上にのべた問題点もある程度解決してしまうのではないだろうか。

Communication としての言語の運用は、ことば本来の姿であり、話し手と聞き手という立体的な situation の中で、意志や感情、自分の考えなどを伝え、まさに言語活動そのものである。

この Communication としての practice では、pattern practice の中で心配される「意味をふまえないで言う」という可能性は全くないし、「現実に用いることのない文やナンセンスな文」は姿を表わさない。また、Pattern Practice のように、教師の指示による substitution, conversion, expansion などの学習作業と異なり、speech としての英語がどの程度生徒に定着しているかが如実にわかり、教師の立場からは、生徒の学習についての check としても意味があろう。生徒の心の動きも、pattern practice に比較して、はるかに活発であると考えられる。(Pattern practice の学習作業も、外見上活発だが、心の動きや、言ったこと、聞いたことに対する印象は、外見程ではないと思う。) 教材の内容と生徒の知的発達段階に関する問題も、pattern practice におけるように、与えられたものでは、内容的に不満な感じがあるが、自から進んで用いたものについては、興味という観点からはすぐわれよう。

以上のように、pattern practice はいろいろの問題を含んでおり、そのよって立つ理論が妥当なものであるかどうか一考を要することは事実であるが、音声面指導における優秀性、また、それにとって変るべき具体的な指導技術が確立されていない現在、pattern practice を無効視するわけにはいかない。我々教授者は、日頃の指導において、それでこと足りりとせず、言語運用の真の姿である communication の段階にまで発展させる努力が必要である。

(埼玉大学教育学部講師)

基礎語彙について* (1)



HATTORI SHIRÔ

服 部 四 郎

1. どの言語にも基礎語彙とでも言うべきものがあつて、それが重要な機能を有することは観念的には知っていたが、身を以ての体験でそのことを悟ったのは、昭和8年から11年にかけて北満洲に滞在し、ロシア語・タタール語・蒙古語などを native speakers について習ったときのことであった。外国語が話せるようになる——実は母国語でもそうなのだが——には、10才位の子供ならどの子供でも熟知しているような基礎的な単語や表現に習熟しなければならない。そういう基礎語彙とも言うべきものが、聞いてわかるだけでなく、自由に使いこなせるようにならなければならない。戦前には、ある国語で書かれたものが自由に読める人々でも、その国語がまともに話せなかつたり、native speakers の話すことがわからなかつたりするのが普通であった。満洲滞在当時、私は冗談半分に、その外国语の、10才位の子供の native speakers と自由に会話ができるようになれば、その外国语の語学力は初段だ、などと言ったことがある。小さい子供の知っている単語や表現ぐらいは身につけていなければ会話が自由にならないし、また大人なら broken な表現でも推察理解してくれるけれども、小さい子供は理解力の幅が狭く発音が正しくないともう受け付けないからである。

基礎語彙は文法と並んで大切なばかりでなく、場合によつては文法よりも大切なことがある。北満のハルビンその他の都市では、ロシヤ人とシナ人の間で pidgin Russian とでも言うべき言葉が話されていた。単語はロシヤ語のものを使うけれども、曲用語尾や活用語尾は全部省き、名詞は主格形だけ、動詞は2人称单数の命令形だけが用いられた。動詞はその形を、命令の意味ばかりでなく、過去、現在、未来の意味の finite verb としても用いた。代名詞は、所有代名詞の或形だけが用いられた。たとえば、ya <私が>, vy <あなたが>, on <彼が>などの代わりに moya, tvoya, evo (本来はそれぞ

れ<私の>, <汝の>, <彼の>の意) だけが用いられた。そこで moya xodi と言えば、<私が行った>の意味にも<私が行く>の意味にもなる。あるロシア人など「私はシナ語が話せる」というのでそうかと思っていたら、実はこの pidgin Russian が話せるのであった。この言葉をシナ人がシナ語の発音で話すと、ロシア語とは似てもつかないものとなるのである。Pidgin English でもそうであろうが、この種の言葉は文字言語として用いられることは恐らくなく、音声言語として場面に依存しつつ即物的に用いられるので、語尾など磨滅していくても伝達の手段として役立つのであろう。いずれにしても、単語の羅列だけで意思が疎通するのは、驚くほどであった。

昭和37年の秋にミュンヘン大学のドイツ語教習所を見学したとき、曲用語尾・活用語尾の練習にばかり力を入れているので、基礎語彙は習熟させないので尋ねたら、「単語は学生たちが街で習つて来る。自分たちは彼らが大学の講義を精確に聴取できるように訓練してやることを目標としている」とのことだった。ドイツ国内でドイツ語を教えるのには——ことに大学の講義が目的であれば——それでよいかも知れない。しかし、日本にいてドイツ語の会話が楽になるようにするには、基礎語彙を十分盛り込んだテキストを使う必要がある。

一体、言語は、特に、高等な思想の、場面を離れた伝達の道具として用いるときに、その文法的側面が非常に重要な役割を演じることとなる。しかし、前述のような、場面に依存した会話では、それが必ずしも重要ではない、と言えそうである¹⁾。

1) 昭和36年の秋、アフガニスタンのヘラートに滞在中、News Week 誌の記者と称する青年に遭つたことがある。彼はどこの国へ行っても3日ほどその国の言葉を習つてどうにか意思を通ずることができるようにになると自慢した。その秘訣は、30ほどの最も必要な単語に習熟することであるという。それがどういう単語であるかを聞いておかなかつたのは残念だが、where がその一つだとは言っていた。そして、活用・曲用までは覚えないに違ひないから、恐らく単語を羅列するのであろう。私にも次のような経験がある。昭和8年の秋、北満洲のハルビンへ行ったときに、そこに住んでい

* 昭和44年9月7日に日本語教育学会において行なった講演のときのメモによって書き下ろしたもの。従つて、その後、国立国語研究所などが公刊した研究結果は利用していない。

とにかく、ある外国語が自由に話せるようになるには、文法もさることながら、基礎語彙の習熟も非常に大切であることを悟り、どの言語でもそれを知らなければ動きがとれないような——そしてそれに習熟すれば会話が非常に楽になるような——基礎的な単語や表現があることを、経験によって知ったのである。そして、どういう単語・表現がこの見地から大切であるかということに対する勘のようなものが出来てきたようには感ずるけれども、それを科学的に明らかにして見たいと思った。そしてそれ以来、基礎語彙に関する参考書を集めることを心掛けて来たのであった。

一方、言語の科学的記述というと、音韻と文法——それも統辞法は簡単に片付けられていた——が主で、語彙は辞書に任せられているけれども、大きな辞書を作る前に、基礎語彙の科学的記述をする必要があるのでないか。むずかしい単語は基礎語彙を用いてその意味を記述することができる程度可能である。また、従来の文典が会話・作文などに直接役立たないのは、基礎語彙の記述を含んでいないからではないか。一方また、文典は、代名詞や数詞の記述を含むのが常であるけれども、「その曲用に不規則な点がある言語ではともかくも、そうでない言語では代名詞・数詞の記述を文典に含ませる必要がない」というような意見さえもないことはない。しかし、これらが基礎語彙の一部を成すと見ることができる点を看過すべきではない。この見地からは、さらに間投詞、接続詞、副詞の体系的な——理想的には文体的レベルの差異を詳しく明記した——網羅的な記述をも含ませることが必要である。山田文法に始まるわが国の文法では、職能の見地からそれらを特立させて取扱い、さらにその下位分類を論ずるけれども、私が必要だと思うのは、それらの個々のものの意味・用法を体系的構造的見地から全体的網羅的に記述することである。それらの外にも挨拶言葉のそのような記述、その他の基礎語彙の体系的構造的記述が必要で、それらを alphabet 引き、五十音引

る、日本人が非常に流暢にロシヤ語を話し、しかも相手によく通ずるので驚嘆したが、數か月して自分がロシヤ語がわかるようになってみると、それらの人々の使いこなす単語は數十に過ぎないことが明らかになってきたので、再び驚いたのであった。たとえば、「おいしい」も「美しい」も「あたたかい」も「涼しい」も「安い」も「嬉しい」もすべて xorōšo <良い>で、その反対はすべて ne xorōšo <良くない>と言い、ploxo <悪い>という単語さえ知らないのであった。これは意味論的にも興味あることで、私の言葉で言えば、これらの形容詞の意義素はいずれも<快>の意義特徴を有し、それを xorōšo で表現すれば、あとは場面・文脈の助けによって伝達が成功するのである。このような単語の使用法は、語彙の貧弱な幼児の言語活動にも見られる。

きの辞書に任せておくことは適当でない、というのが私の主張である。

このように、実用的見地ばかりでなく科学的見地からも、基礎語彙の研究が必要だと考えるようになったが、昭和25年から27年にかけての滞米中、Morris Swadesh の考案した Glottochronology ないしは Lexicostatistics を知って、言語史の研究にも基礎語彙の研究がそのような形で役立つことを極めて興味深く思い、基礎語彙の研究を一層重要視するようになった。

このような考えになつてゐるとき、数名の人々の賛同・協力を得て、昭和29年度から3年間文部省の科学研修費によって、基礎語彙調査表を作ることになり、次の3種の調査表を作った。

昭和30年に『第1次基礎語彙調査表』

〃 31年に『第2次基礎語彙調査表』

〃 32年に『第3次基礎語彙調査表』

その作業経過については、別の場所²⁾に述べたので、ここでは概略を述べるに止める。ただし、項目の数その他は、ここに初めて記す。

『第1次調査表』は4種の資料に現われる日本語の基礎語彙と思われるものを網羅的にカードに書き写して、意味的見地から分類したもので、2886項目より成り、そのうち重要と認められるもの1394項目に○印が付してある。

『第2次調査表』は、上を基礎として英・独・仏・露語に関する基礎語彙資料をカードにしたものと加え、取捨選択しつつ再分類したもので、分類に当たっては、『第1次調査表』と同様、既成のものを全く参考することなく、ただカードを整理して行ったところ、自然に出来てきたもので、作業を急ぐ必要があったので、ことに細部では検討を要する点がある。1950余項目より成り、そのうち重要と認められるもの974項目に番号が付してある。

『第3次調査表』は、『第2次調査表』を基礎としてさらに M. Cohen, C.D. Buck その他の著書から得たカードを加え、種々の規準からこれを厳選して計958項目とした上に、そのうちから、基礎語彙統計学的見地から重要と考えられるものに○印と通し番号を付した457項を選定したのである。後者の中には Swadesh の扱った200数十項目はすべて含ませてある。最初は、Swedesch の表を拡大して1000項目位にしたいと考えていたが、457項目に止まったのは注目すべきことである。なお、

2) 『第3次基礎語彙調査表』(昭和32年8月)。また、『アイヌ語方言辞典』(昭和39年8月、岩波書店), p.22以下。

この『調査表』の意味分類は『第2次』のそれを踏襲した。基礎語彙統計学的研究では、分類の当否はそれほど問題にならないと考えたからである。また研究目的の関係から、近代文明に関する語彙は除外した³⁾。

2. その後、アジア・アフリカ言語文化研究所から、次の2冊の基礎語彙調査表が公刊された。

『アジア・アフリカ言語調査票、上』、昭和42年1月。「第1表」の200語(A)+300語(B)、「第2表」の500語(C)の計1000語より成る。

『アジア・アフリカ言語調査票、下』、昭和42年3月。上記の1000語のほかに、さらに1000語(D語彙)が加えてある。

この調査票作成の事情については、下巻の巻頭に柴田武氏が次のように書いている。

わが国でも、ごく最近、服部四郎編の『基礎語彙調査表』(東京大学言語学研究室、1956年【57年の誤】)というものが公になった。それなのに、どうして、あえてもう一つ新しいものを作ろうとしたのか。また、このプロジェクトの発議者は服部四郎運営委員であったが、なぜ、『基礎語彙調査表』の編者が新しい言語調査票の作成を提案されたのか。それは、特にアジア・アフリカ地域での調査に便利なように修正を加える必要があった上に、項目をさらにふやしたいという要求もあったからである。

私がこのプロジェクトを提案した最も大きな理由の一つは、次のようなである。上記の『基礎語彙調査表』の特に第2次と第3次のものが、「自動車」「電車」「電話」「飛行機」「写真」「映画」「ラジオ」「テレビ」(さらにまた「権利」「義務」「自由」「憲法」「民主主義」「共産主義」「資本主義」)のような近代文明に関する語彙を除外しているにもかかわらず、アジア・アフリカの諸国語がこれらの語彙を如何に処理しているかを調べることは、基礎語彙統計学的観点を離れれば、極めて興味があるから、そういう単語を含んだ調査票を作つて頂きたい、と考えたのである。この私の希望は、『アジア・アフリカ言語調査票』によって、かなりの程度に叶えられている。これらの単語のうちの基礎的なものは、外国语の習得に際しても、優先的に、その学習に力が入れられなければならない。

3. さて以上の調査表は、いずれも、目のあらい網のようなものだから、それを用いてある言語を調査するに

3) 以上3種の『調査表』の日本語項目は、その分類番号などとともに、上記『アイヌ語方言辞典』の日本語索引の中に、全部含ませてある。

当たり、それに含まれた諸項目に当たる単語だけを記録したのでは、基礎的単語で調査漏れとなるもの生ずる惧れがある。これらの調査表はいずれも手懸りとなるに過ぎないもので、この網にひっかかる単語をまず記録し、それと意味的関連のある単語をできるだけ多く採録し、さらに個々の単語についてその文体的レベルの差異などをも精査しつつ、各言語において、厳密に言えば各々独立に、基礎語彙の体系を記述するよう努力しなければならない。上記の『第1次基礎語彙調査表』の中で重要な項目が約1400もあるように、それは1000を遙かに超えるものとなるであろう。

4. 上記2種の基礎語彙調査表(すなわち§1および§2で述べたもの)は、いずれも、基礎語彙に関する色々の資料(研究結果)を集め、それらに見える単語をカードにとり、それを分類整理し、主観的判断を加えて取捨選択する、という方法を探っている。これらも一つの重要な方法だと考えるが、ほかに単語の頻度数を統計的に研究する方法がある。そういう方法で獲た結果と、われわれが上述の方法で獲た結果とを比較することが、本稿の目的の一つである。

5. 英語教育では、E.L.ThorndikeとI.Lorgeの語彙統計の研究結果が重んじられているようである。これは、使用語数約1800万語について行なった大規模な研究であるが、これがどの程度に基礎語彙を反映しているか、という点についての私見の一部を、本誌No.43(昭和48年10月)の拙文で述べた。

6. わが国におけるこの種の統計的研究としては、国立国語研究所の次のものがある。

『現代雑誌九十種の用語用字』

第一分冊 総記および語彙表(昭和37年3月)

第二分冊 漢字表(昭和38年3月)

第三分冊 分析(昭和39年3月)

これは、昭和31年1月から同年12月までの5部門90種(総合雑誌から娯楽雑誌に至る)の雑誌について「層化集落抽出法の一変形」によって抽出した標本語延べ53万、異なり語数4万、母集団の推定延べ語数1.4億についての統計で、延べ7回以上の語7234が収録してある⁴⁾。

53万語といふと、前述のThorndikeの1800万語の約34分の1である。ただし、新しい統計学的方法によつて、それよりもずっと多い数の語についての統計に近い効果が獲られるように考案されている。

6.1 国立国語研究所のこの報告書における単語の使用率順位表は、自立語・接辞(第2表)と助詞・助動詞

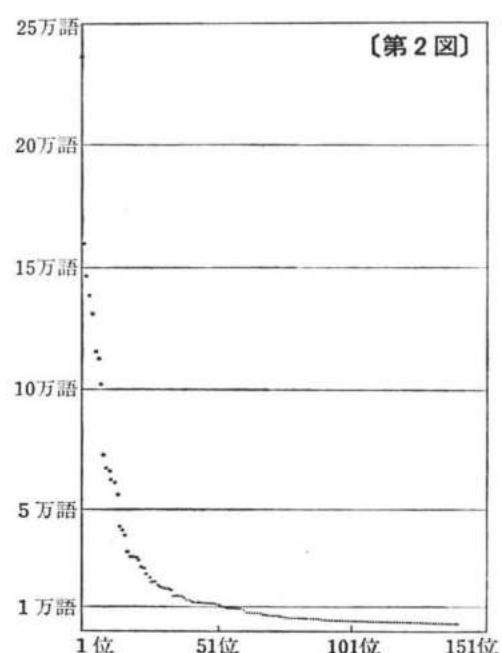
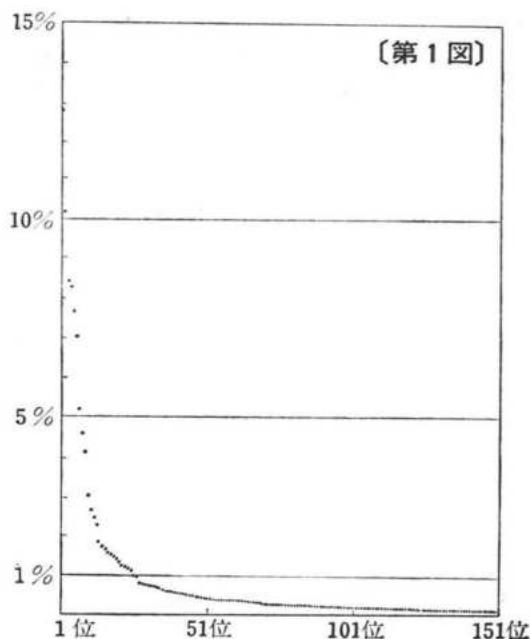
4)『第3分冊』、pp.1~2.

(第8表) とが別になっている⁵⁾ので、全体の使用率曲線のグラフを獲るには、両者を併せなければならない。それを試みたところ、次のような興味ある結果が獲られた。使用率1位のものから100位のものまでを示すと次のようである。括弧に入れて示した番号は助詞・助動詞の中だけでの順位で、括弧に入れてない番号は自立語(および接辞)の中だけでの順位である。

全体での順位		使用率 (%)
1	(1) の [格]	128.072
2	(2) に [格・助動]	101.984
3	(3) は	84.286
4	(4) て	83.182
5	(5) を	76.791
6	(6) た	70.814
7	(7) が [格]	51.785
8	(8) だ	45.621
9	(9) と [引用]	42.666
10	1 シ・スル	29.820
11	(10) も	26.711
12	(11) で	24.780
13	(12) の [準体]	22.868
14	(13) な [助動]	18.200
15	2 イル(居)	17.326
16	(14) ます	16.304
17	(15) ない [動～]	15.691
18	(16) ある	14.877
19	3 イイ・ウ	14.326
20	(17) です	13.916
21	(18) か	13.165
22	(19) が [接続]	12.151
23	(20) から [格]	12.014
24	4 イチ(一)	11.444
25	5 コト(事)	11.161
26	(21) う、よう	9.795
27	6 ナリ・ル(成・為)	9.274
28	7 レル、ラレル(被)	8.037
29	(22) と [並列]	7.629
30	8 ニ(二)	7.405
31	9 アリ・ル(有・在)	7.201
32	10 ソの [指・感]	7.125
33	(23) と [接続]	7.122
34	(24) ば	6.984

35	(11) モノ(物・者)	6.717
36	(25) から [接続]	6.371
37	(26) なん[…く、で～]	6.002
38	12 ヨウ(様)	5.963
39	13 ジュウ(十)	5.929
40	14 サン(三)	5.721
41	(27) ぬ[否定]	5.619
42	(28) と[相手]	5.537
43	15 コの [指・感]	5.363
44	(29) ヘ	5.135
45	16 ゴ(五)	4.893
46	17 ソレ [指]	4.860
47	(30) まで	4.617
48	18 オ [接頭](御・於)	4.616
49	(31) ヌ	4.543
50	19 ナイ(無)	4.444
51	20 キ・クル	4.122
52	(32) ても	4.005
53	21 ヨイ(善・良・好・佳)	3.711
54	22 ニジュウ(二十)	3.702
55	23 コレ(指)	3.671
56	24 ワタクシ(私)	3.666
57	25 サン [接尾](様)	3.648
58	(33) など	3.592
59	(34) や[並列]	3.571
60	26 ロク(六)	3.522
61	(35) よ	3.476
62	(36) だけ	3.455
63	27 ミル	3.393
64	28 テキ(的)	3.207
65	29 オモイ・ウ	3.183
66	30 ネン(年)	3.143
67	31 ユキ・ク(行)	3.070
68	32 ナニ(何)	2.874
69	33 ハチ(八)	2.795
70	34 メ(目・眼 eye)	2.665
71	35 サレル(被為)	2.625
72	36 トキ(時)	2.617
73	37 サンジュウ(三十)	2.553
74	(37) でも	2.546
75	38 シチ(七)	2.545
76	39 シ(四)	2.492
77	(38) す	2.462
78	40 エン(円 yen)	2.403
79	41 ヒト(人)	2.384

5)『第1分冊』, p.185, ff. および p.291, ff.



80	42	キュウ(九)	2,361
81	(39)	ので	2,293
82	43	ソウ〔指・感〕	2,260
83	44	ヒャク(百)	2,212
84	45	マン(万)	2,191
85	46	デキル	2,190
86	47	レイ(零)	2,162
87	48	カタ(方)	2,127
88	49	ガツ(月)	2,061
89	(40)	ながら	2,050
90	50	トコロ(所)	2,049
91	51	ニッポン(日本)	1,983
92	(41)	より	1,976
93	52	ナカ(中・仲)	1,906
94	53	ヤリ・ル	1,866
95	54	マエ(前)	1,830
96	55	ゴジュウ(五十)	1,778
97	56	タチ〔接尾〕(達)	1,756
98	57	ヨ(ン)(四)	1,750-
99	58	カレ(彼)	1,747
100	59	マタ(又・亦)	1,728

これをグラフにして示すと、第1図のようになる。

第2図は Thorndike らの資料を用いて、英語の単語の頻度数をグラフにしたものだが、両者が非常に似た曲線を示すのが注目される。因みに、第50位までのものを次に表示しておこう⁶⁾。

1	the	236472
2	be	162323
3	I (mine 等)	148035
4	and	138672
5	a (an)	131119
6	to	115358
7	of	112601
8	he	101958
9	in	75253
10	have	68035
11	she	65670
12	it	62131
13	that	61034
14	you	56157
15	no, not	42892
16	they	41563
17	for	39363
18	with	32903
19	as	30693
20	we	30538
21	on	30224
22	do	29117

6) Thorndike & Lorge の著書の Part IV によって筆者が作成したものである。Thordike らはこの種の表を示していない。日本語との比較については本誌 No. 43 (昭和48年10月) の拙稿参照。

23	at	26250
24	will	25862
25	but	23704
26	go	22293
27	many, much	20148
28	can	20134
29	this	18823
30	ask	17971
31	all	17799
32	one	17569
33	say	17370
34	from	16737
35	there	15393
36	or	14851
37	when	14775
38	if	14506
39	out	13649
40	come	12696
41	make	12632
42	what	12461
43	know	11851
44	up	11718
45	so	11712
46	by	11454
47	little	11275
48	which	11183
49	get	11085
50	man	10969

さて、国語研究所の上述の報告書について、自立語・接辞と助詞・助動詞の使用率を比較して見て、次のようなことが明らかとなった。

第1に、上位においては、助詞・助動詞の方が圧倒的に使用率が高い。すなわち、1位から9位まで助詞・助動詞が占め、「てにをは」の4つが高率を示す。自立語の上位のものの全体における順位は次のようである。

自立語等内の順位		全体での順位
1	シ・スル	10
2	イル(居)	15
3	イイ・ウ	19
4	イチ(一)	24
5	コト(事)	25

第2に、自立語と言っても、100位までにはいるものはほとんどすべて基礎的かつ文法的と言ってよい単語（時枝誠記氏の「辞」というものに近い）ばかりである。

動詞としては、10. スル、15. イル、19. イウ、

27. ナル、31. アル、51. クル、63. ミル、65. オモウ、67. ユク、85. デキル、94. ヤル、が出るが、これらは、イウ、オモウを除いて、いずれも補助動詞としても用いられる。ナルの如きはふつう自立的には用いられないし、イウ、オモウも前接的に用いられることが多い。

次に数詞が非常に多い。24. イチ、30. ニ、39. ジュウ、40. サン、54. ゴ、54. ニジュウ、60. ロク、69. ハチ、73. サンジュウ、75. シチ、76. シ、80. キュウ、83. ヒャク、84. マン、86. レイ、96. ゴジュウ、98. ヨ(ン)。

接尾辞・接頭辞は文法的な記号素（ただし時枝氏は少なくともその一部を「詞」に入れる！）である。28. -レル、71. -サレル；48. オ-、57. -サン、64. -テキ、66. -ネン、78. -エン、87. -カタ、88. -ガツ、97. -タチ。

代名詞も前述の如く基礎語彙に属し、かつ文法的な単語である。32. ソの、43. コの；82. ソウ；46. ソレ、55. コレ；68. ナニ；56. ワタクシ、99. カレ。因みに、『第一分冊』のp.114（第1表）を見ると、ソレデ、ソレナラ（ソンナラ）、などという接続詞が見えないから、これらは、ソレ、で；ソレ、なら、などと分解して計算されたものと思われる。しかし、接続詞はこのように切り離すべきものではない。方言によって、これらは、ホイデ、ホンナラ、などと弱まっているものがあるのをその一証拠とすることができよう。

形容詞としては、50. ナイ、53. ヨイがあるが、これらも、補助形容詞あるいは接尾辞（たとえば、赤クナイ、書キヨイ）として用いられる場合を含んでいるであろう。

副詞としては、100. マタ、がある。

名詞としては、25. コト、35. モノ、38. ヨウ、72. トキ、79. ヒト、90. トコロ、93. ナカ、95. マエ、のように、形式名詞あるいはそれに近い用法をも有するものが多い。79. ヒトの如きは、アノヒト、ソノヒト、などの中のものも含んでいるであろう。

このようにして、実詞的な名詞（時枝氏の「詞」に属するであろう）としては、100位までに、70. メ（目）91. ニッポン、の2つが現われるに過ぎない。ただし前者には、「三人目などのメは別」と注記してあるが、ヒドイメ（ニアッタ）などのメは含まれているかも知れない。

(P. 19へづく)

スポーツと英語



柔道が国際的スポーツになって、碧い眼の柔道家が「イッポン」「ワザアリ」などと叫んでいるのを見せつけられると、何だか夢のような気がする。

日本人がスポーツと思っているものは、ほとんどが外国から移入したものである。中でも野球などは本場のアメリカに劣らぬほどの盛況を見せており、アメリカ人が後楽園球場へ来て、こんな大観衆を見たのははじめてだと言ったという話もあるくらいだ。

明治27年、つまり1894年、一高野球部史規則というものができ、野球という訳語が定着している。それまでに相当さかんにベースボールがやられていたに違いないと想像すると、われわれの先輩がいかに外来のものに早く飛びついたかに改めて感心させられる。

何でもかんでも真似してわがもの顔にしているかといふと、そうでもないから、おもしろい。どうしても根をおろさなかったスポーツもわずかだがある。

の中でも特筆すべきはクリケットであろう。兄弟スポーツであるラグビーが普及しているのを見て、何とかクリケットをも、と考えた人はすくなくなかつたらしい。何しろ、クリケットと言えば、イギリスの国技みたいなもの、とくに、英國紳士が育ったパブリック・スクールでもっとも重視されるスポーツである。これが伝わらないのはいかにも残念である。それはむしろ日本へ来ていたイギリス人たちの気持であった。

大正時代に京都大学で英文学の先生をしていたエドワード・B・クラークはその中でもとくに熱心で、弟さん（のちに浦和高校の先生をした）といっしょにクリケット移入に力を入れたらしい。

ところが、どうしても広まらない。クリケットのテンポがせっかちな日本人にはそぐわないのが不人気な理由

である、ということになって移植の試みは後を絶たれたり、音には聞けど、クリケットを一見に及んだ日本人はまことにたくない。英語の先生も、テクストにクリケットのことが出てくると、センセソキョウキョウである。百聞一見にしかずというが、一度どこかで在日イギリス人のクリケット試合を見せてくれないか、という要望がある。何とか実現できないものであろうか。



野球のことなら何でもわかっているかというとそうでない。案外なところに落し穴がある。そのひとつに「アルファーづき」の試合というのがある。

後攻のチームがリードして9回を迎えるが、表で先攻チームが逆転しないかぎり、9回裏の試合はないから、スコアはブランクになって勝負が決まる。そこへA（アルファー）と書いたものである。

書いたものである、と言ったのは、いまではAではなくXとなっているからである。どうして変わったかについて、エピソードがあった。

長い間、だれも不思議に思わなかつたA（アルファー）である。当然、アメリカ伝來のものであろうと考えられていた。ところがアメリカではAなどとはしていない。Xである。さて、どうして、Aになったのか、の探索が始まられたのだが、なかなか、はっきりしたことにつきとめられない。あるいはこんなことではなかろうかという説明がされているにすぎない。

野球が伝來して間もない頃、アメリカ人がスコアをつけているのを見ていると、さきのような9回裏のゲームが行なわれないときに妙なしをついた。どうもそれは幾何や数学で用いる α に似ている。いや、たしかに α である、となつたらしい。ギリシャ文字では不便だからローマ文字のAにしてこれを使うようになった。

この α は実はXをくずしたものであつたらしいのである。日本人になまじ学があつたので、さては、 α であろうと先走ってしまったというわけである。

ところで、このXだが、エックスであるという説と、いや○×のXである。空欄をつぶすためにバツをつけるのであって、アルファベットのXではないという説がある。なお、後楽園のそばにある野球博物館は公式記録についての権威ある見解を示すところであるが、A（アルファー）が正しいという意見をいまももついている。

このアルファーは野球のスコアから拡大されて、戦後、プラス・アルファーという流行語を生んだのである。ベース・アップの交渉などで、基準を示して、それに多少、色をつけるときにプラス・アルファーが使われる。野球のアルファーは誤りであることがほぼ明らかに

なった現在でも、プラス・アルファーの方は生きている。親はなくても子は育つ、ということか。

○

ゴルフのスコアではどうして、鳥が縁起のいい語として用いられるのだろうか。

パー (par) 5 のホールをかりに 4 打でホールインするとバーディ (birdie) である。3 打でホールインすればイーグル (eagle), 2 打でホールインすればアルバトロス (albatross) になる。

逆にパーをひとつオーバーすると (さきの par 5 なら 6 打でホールインした場合), ボギー (bogey), ふたつオーバーするとダブル・ボギー (double bogey) となる。ボギーには「お化け、幽霊」という意味があって、これが香しくないスコアの名になるのはなるほどと肯かれる。(もっとも、ボギーがパーと同じ、つまり、基準打数の意味で使われることもある。)

ゴルフのボールが飛ぶのは鳥への連想を誘うであろうが、小鳥、ワシ、あほうどりの順で格が上って行くというのは、どうもよくわからない。

そこで思い出すのが、イギリスの文庫本、ペーパーパックの名前である。いまもっともポピュラーな双書であるペンギン、ペリカンが鳥の名をつけているだけではない。戦前、フィーニクス (不死鳥) やアルバトロスという双書もあった。アルバトロスはよほど連想のいい鳥なのだろう。あほうどりではいかにも可愛想である。

喜望峰 (Cape of Good Hope) によくあらわれることで有名であるのもアルバトロスが縁起のよさと結びつく理由かもしれない。

○

もうひとつ不思議なのがテニスのカウントである。得点が 1-0 のとき 15-0, 2-0 のとき 30-0, 3-0 が 40-0 となるのだ。まず、どうして 1 点というものが 15 点になるのか。2 点に当るのが 30 点なのか。1 点が 15 点というのなら 3 点に相当するのは 45 点となってよきそうであるのに、それは 40 点だという。どうもよくわからない。ものの本を見ても、ただ、fifteen, thirty, forty とよぶとしか書いていない。ことばは慣用によるのだから、そう言うからそう言うのであって、どうしてそう言うのか、ということを考えたりすれば、妙な理屈をこねるほかはなくなる。それにしてもやはりおかしいものはおかしい。イギリス人の論理はひと筋なわで行かないものと相場がきまっているが、これはまた飛び切りではあるまいか。長い間不自由だという声を尻目に守りつづけてきたヤードポンド法、貨幣単位を 10 進法に切りかえることにしたイギリスだが、テニスのカウントの方

は伝統に忠実である。

それよりももっと合点が行かないのは、0 に当る数のかわりに love が用いられることである。

15-0 は fifteen love, 30-0 は thirty love, 40-0 は forty love である。どうして love=0 となるのか。まさか愛は中味のまるでないものという洒落ではあるまい。

そこで O.E.D. にお伺いを立ててみると、思いがけないことが書いてある。競技試合をただ遊びとして、たのしみのためにするのを for love と言った。つまり、金をかけないでするゲームである。「ただで」ということになるわけだ。そこから、テニスなどでスコアのゼロを意味するようになった、と記されている。

きまり文句に for love or money というのがある。「義理ずくでも金ずくでも (…ない), どうしても (…ない)」の意味であるが、この love も「義理」「好意」などだけでなく、金を出さないという気持があるのかもしれないと考えたりする。

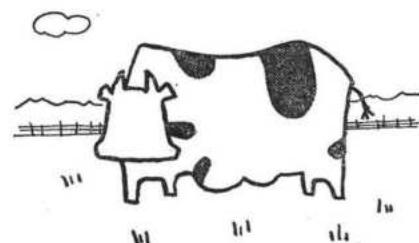
それはとにかく、O.E.D. が love=0 の用例として 'We are not told how, or by what means, Six love comes to mean Six to nothing.' (どうしてシックス・ラヴがシックス・ゼロの意味になるかわからない) という 1780 年の文章をあげているのは興味ぶかい。

いずれにしても、love=0 についてはもっとおもしろいいわくがあるにちがいない。ブルワーの『成句諺辞典』なら何か出ているのではないかと思ってのぞいて見たがだめだった。

さて 3-3 (forty forty) になるとデュース (deuce) だが、デュースはトランプや「さい」で「2」を意味する。そこからびんぼうくじ、悪運のことになり、さらに悪魔の別名までになる。スポーツのスコアが思いのほか、かけ勝負と深い関係があることを知っておどろくが、考えてみれば、むしろ、当然のことかも知れない。

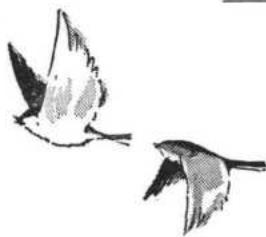
何気なく用いていることばも、調べようとするとなかなか厄介なものだ。

(P.P.P.)



AUSTRALIAN ENGLISH

—A *Manifestation of Linguistic Principles*—



Robert D. Eagleson

Associate Professor

University of Sydney

As I am addressing a Japanese audience¹⁾, I do not propose simply to present a description of Australian English *per se*. Instead it offers us an opportunity to observe once more and in a real situation those principles of language which have often been the subject of investigation and study in times past and present. It is in this broader perspective that I now take up a consideration of that form of English which has developed in my native land.

We must start our study where the first English settlers started, namely with the country itself. These settlers left a medium-sized island to go to the largest island in the world, so large in fact that it is also classified as a continent. From east to west it is 2,500 miles (4,000 km) wide, while from north to south the distance is 2,000 miles (3,200 km). It took me 9.5 hours to fly direct from Sydney to Tokyo; almost one third of this time was spent in Australian air space over Australian land. It is a land mass of 3 million square miles, almost the same size as the U.S.A., 30 times the size of Great Britain, 20 times that of Japan. It displays great diversity. While on the one hand blessed with millions of acres of fertile land for agricultural and pastoral pursuits, yielding a rich supply of primary products, it has equally large tracts of deserts and rocky wastes, harsh, arid and merciless. More than one third of the country lies within the

tropic zone, and very little of it sees snow. Many an Australian has never seen snow fall. While parts of it receive an annual rainfall of 150 inches, others receive less than 5 inches. There are parts of the inland in which no rain has been recorded for more than five years, so that, children have been born and reached school age without ever having experienced rain falling on their heads. The seasons are not so clearly demarcated as a result. I want to return to this point, but let me observe here that most of our trees are evergreen; not many belong to the deciduous variety which lose their leaves in winter. Consequently in Australia we are not so aware of the movement from summer through autumn to winter.

In 1788 when the first English settlers arrived, there were no cities or towns, no roadways or industrial development. The Aborigines, who lived there, congregated in small tribes, were essentially nomads, dwelling in flimsy huts. They were primitive in their ways and anthropologists have sometimes compared them to men of the Stone Age.

From this admittedly very brief catalogue of some of its attributes one can recognise how Australia presented the early English settlers with an environment vastly different from the one they had left. This brings us to the first linguistic principle we might consider. There is a correlation between the world we live in and the language we speak. External reality exerts a positive influence on the nature and range particularly of our lexicon, demanding its elaboration to meet any extension that takes

1) This paper was originally delivered to the Otsuka English Linguistic Circle on 16th March, 1974.

place in our awareness of reality. Because so much was new to the English in Australia, we thus get an immediate extension to the English vocabulary and find many additions to the wordstock. For the first time in English there appear such items as *blue gum* and *iron bark* to represent new flora, *lyre bird*, *whee whee* and *settler's clock* (an early name for the kookaburra because it "laughs" at sunrise and thus wakes the inhabitants) for fauna, and *drop rail*, *back run*, *ticket-of-leave* and *damper* to describe the new ways of life in which the settlers were involved.

While considering this principle of the correlation between reality and language, we might also take notice of the methods we use to extend our lexicon to meet new demands. In the terms I have already given we can see some of these: onomatopoeic creation in *whee whee* (an attempt to imitate the cry of the bird); compounding in *iron bark* and *drop rail*, whereby elements already existent in the language are moulded into new combinations; and derivation as in *damper* (a substitute for bread), which is fashioned from *damp*. Elsewhere one comes across the use of proper names duly modified, as in *banksia* (from Sir Joseph Banks, a botanist who sailed with Captain Cook) and *boronia* (from Borone, an early French explorer.)

Equally as frequent, however, as well as the formation of new terms, we find the extension of old terms into new, though often related, meanings. *Paddock* is a common term in Australia. Originally in England it referred to a small, enclosed field; in Australia it has come to be used far more loosely to refer to a field of any size, and in the practice of many has virtually displaced *field*. The word *mob* has experienced elevation. Quite early in the settlement of Australia it was transferred from its application to people to a use with cattle and sheep: Australians speak of a 'mob of cattle' and a 'mob of sheep', with the terms *herd* and *flock* declining in use. This applica-

tion with animals has infected the use of *mob* with people, so that in Australia it no longer automatically includes the sense of 'disorderly' and may be applied to any gathering of people, even an orderly one. *Muster*, too, underwent a transfer from its military use to refer to the rounding up of cattle. *Wattle*, the name of our national tree, is in a sense a misnomer, the tree really being a type of acacia. In England *wattle* referred to the sticks which were interlaced to form the reinforcing for a mud wall. As the branches of one particular tree in Australia came to be used so commonly for this purpose, so the term *wattle* was used to name the tree, and the word acquired a new meaning.

In helping them cope with classifying their new experience our early Australian forebears also resorted to the practice of borrowing. It is a method of vocabulary extension that has long been followed by the English (one thinks, for instance, of the borrowings from Latin, and from French after the Norman Invasion) and also by other communities. The source for borrowings in Australia were the languages of the Aborigines and from these we have such items as *waratah*, *koala*, *dingo*, *bombora*, *kangaroo* and *coo-ee*. The number of such items, especially for flora and fauna, however, is relatively small. The explanation lies partly in the fact that the Aborigines were not highly regarded and were frequently despised by the early settlers, and partly in the fact that they did not speak one language but many. As a result different Aborigines would have different terms for the same item, a situation which is rather inimical to borrowing, as the settlers would have been confused. We do find, however, aboriginal terms being adopted to describe distinctively aboriginal activities and implements such as *corroboree*, *boomerang*, *woomera* and *gunyah*.

The country has continued to exert its influence on the form of English being spoken in it since those early days. Subsequent ad-

ditions to our vocabulary include *whiteant* (the verb, in the sense of 'undermine', derived from the name of the termite, white ant, which eats the wooden foundations and supports of houses, leading to their collapse); *weekender* (the name given to holiday houses to which people retreat at the end of the week to enjoy recreation such as fishing and swimming). Because of the climate of Australia these recreations, can be enjoyed all year in many places, and so we see how environment influences vocabulary); *firebreak* (used to control bushfires, a regular hazard in our long, dry summers); and *tally-hi* (the name for a new, fast method of shearing). Individuals have also lent their names to items: Mrs. Maria Ann Smith developed a particular type of apple and it has become known as the *grannysmith*, the *granny* deriving from the fact that Mrs. Smith was a grandmother. John Furphy used to cart water to houses in a country township and was sometimes accused of being the source of rumours: a *furphy* in Australian English is a false rumour. Then we have the adjective *ropeable* to describe a person who is so angry that he needs to be tied down, a figurative extension of the term applied to wild cattle which have been mustered: before they can be branded with safety, they have to have their legs tied up with rope.

In Australia, also, there has arisen a new type of football, variously known as Australian National Football and Australian Rules. While it shares many terms in common with other football codes, such as *goal*, *full-back*, etc., there have developed as well a number of fresh terms to describe its distinctive features, such as *ball-up*, *mark*, *ruck-rover*. In addition, because it is very popular, being watched by hundreds of thousands, a whole set of non-standard ones have emerged alongside the more standard forms. Such terms as *bring down a screamer* (=take an exceptionally good mark), *up there cazaly* (Cazaly was a famous player), *hear footsteps* (=be worried about

opposing players) can be heard from the crowd during the progress of any game. One may also hear *aerial ping pong*, a pejorative term used in derision of the game by those who support other codes of football. Thus we see how closely external reality and language interact.

If we would appreciate the flavour of Australian English in full, however, we need to go beyond the external attributes of the country. Increasingly in the last decade in linguistics we have come to recognise the importance of social factors in the development of language, and if we would understand the nature of Australian English we must pay attention to the people who first fashioned it. The background of the early settlers is critical.

As is well known Australia began as a convict settlement. After the American War of Independence, Great Britain had no place to send its many prisoners who were overcrowding the gaols. Australia thus came into being as a British colony in the form of a huge prison if you like. Its founding fathers then were largely convicts, together with the guards-military men sent out to keep watch over them. There were some free settlers as well, but in the early years they were very much in the minority.

These convicts were mostly drawn from the lower classes. Victims of the socio-economic conditions brought on by the Industrial Revolution, they had eked out their lives in the horror of the major cities. In extreme poverty they had fallen into crime, often for the sake of very existence, and, when caught, had been transported. As members of the lower classes, largely uneducated and frequently illiterate, they were thus speakers of non-standard and even sub-standard dialects. This linguistic fact would also have been true of many of the soldiers who guarded them and of a large number of the free settlers, who had been attracted to Australia in the hope of a life that might have offered more than their

existence in England did.

Important linguistic consequences flow from this social condition of the early settlers. In the formative years of Australia it meant that the non-standard, lower class dialects were in the majority. The speakers of standard English were definitely in a minority. Moreover the very composition of the early settlements in Australia, allied with the harshness of the life and the cruel treatment of the convicts, would have meant that the usual social norms and aspirations were upset. There would have been little respect for the classes usually regarded as prestigious. As a result the non-standard dialects had returned to a position of greater strength and, with the usual restraints weakened, were more able to exercise an influence on the developing new language in the Southern Hemisphere. In a sense we have returned to a period before Standard English fully developed, when dialects were more on an equal footing.

We see the results of this working themselves out in Australian English where many a term, which might be regarded as non-standard in Great Britain, is fully acceptable in Australia. Among these items we might include *chiack*, *hump*, *dinkum*, *clobber* and *lolly*. On the latter item, one is reminded of a letter which appeared in a major newspaper in Sydney in which the correspondent complained about that "dreadful Australian word *lollies*". In its place he wanted to substitute the English word *sweets*, little realising that *lollies* was also originally an English word, albeit a non-standard term.

Very interesting in this connection are the terms *larrikin* (a 'street rowdy') and *barrack* ('to cheer in support'). Both of these terms came out to Australia with the early settlers. There they were elevated into the standard dialect. Subsequently they were returned to the "mother land" but now with new prestige, so that they have become acceptable in England also. They provide nice examples of the

refurbishing words can undergo during their history. Their elevation, though, springs from the social forces at work in Australia, leading to re-alignments in linguistic practices.

There is another aspect of this human factor. The first settlers were drawn essentially from the urban areas of Great Britain. They were city folk not countrymen. Early Australia, on the other hand, was definitely an agricultural community. The major preoccupation was farming as the settler set about becoming self-sufficient in food. There were no major industries and most of the population was concerned with rural pursuits or allied activities. Nevertheless in Australian English we do not find any strong influence of British rural dialects, even though, as we have noticed, Standard English had lost its favoured position. On the contrary we find a paucity where we might have expected a strength. This is borne out in the rather imprecise and restricted terminology we find at times in connection with country matters in Australian English. We tend, for example, to have only a binary contrast to describe our watercourses. What is not a *river* is a *creek*, and that is the end of the matter. Australians might recognise *stream*, *brook*, *rivulet*, etc., but these are literary words: they are not the common words used. Similarly we have made do with the two items *city* and *town* (which need consists only of two or three houses!), while the English distinction in *hamlet* and *village* has been abandoned²⁾.

Somewhat related to this matter is the unfortunate naming of some of the Australian flora and fauna. Earlier I gave examples of the creation of new terms to cover new experiences, but at times we come across failure in inventiveness. On these occasions the settlers fell back on a term already in existence and

2) In recent years, *village* has been revived, but not as part of the system *village-town-city*. Instead it refers to a small shopping centre, established in a fashionable suburb.

applied it indiscriminately to a completely different item. Thus the oak in England belongs to the species *quercus* while in Australia it belongs to *casuarina*; the fish bream in England is *abramis brama* but in Australia *chrysophrys*. One can usually discover a reason for this practice in a superficial resemblance existing between the old and the new, but from the point of view of clarity of communication it is an unhappy turn of events. One is continually forced when speaking to a person from a different region to add a qualification, to comment on the difference to avoid any confusion.

The reason for these types of imprecision we have just been discussing, one suspects, lies in the background of the people. They were not accustomed to making such fine distinctions, not aware perhaps of their significance. They were possessors only of a limited vocabulary when it came to rural matters and thus were ill-equipped to cope, because they were essentially city dwellers.

I do not wish to suggest that the convicts were completely inept linguistically. On the contrary they are capable of displaying real wit in the use of language. This brings us in touch with another sociolinguistic phenomenon, the subject of euphemism. Man is always trying to elevate himself, to pretend that he is better than he is, to protect himself against the rebuffs of society. One important device in this process is language: through euphemism we can give ourselves a grander title, or conceal the true nature of our status. The habit is evident everywhere in the world. It was perhaps a very necessary one for the convicts who were not kept behind walls but were employed on constructing roads and buildings or assigned to farmers and other employers to help them with their work. They were thus rubbing shoulders continually with free men. To improve their status, they thus came to refer to themselves as *government men*, (they were in the employ of the govern-

ment!) and to refer to their distinctive clothings as *government livery*. But their most skilful linguistic ploy was the adoption of *legitimate* with reference to themselves. They could use this term because they were in Australia for legal reasons. Its brilliance derives from the discomfort it would bring the free settlers. They no doubt were quite happy to say that they were not *government men*, but what could they do with *legitimate*? To say that they were *illegitimate* would rescue them from one social disaster only to confront them with another.

It is from the convicts, too, that we have derived a number of popular slang terms. One of these is *cockatoo* which refers to a 'look-out', placed to give warning on the approach of the police or some other authority. Its use arises from the fact that the birds of the same name will immediately fly up screeching loudly as they go on the approach of danger, thereby giving warning to all the animals in the surrounding bush. From the convict days also comes *sly grog* (alcohol sold illicitly) and *blue* (a 'fight').

Social forces still continue to exert their influence on Australian English. The development of the social system in Australia is different from that in Great Britain, and hence terms take on a different range of meanings. In the political arena, for example, the leader of the government in the House of Commons in England can have the two titles *premier* and *prime minister*. Both titles refer to the one person and there can be no confusion. In Australia, however, since federation and the creation of both a Commonwealth Government and State Governments, with elected houses of Parliament in both areas, the practice has arisen of calling the leader of the government in the Commonwealth House of Representatives *prime minister*, while his counterpart in a State House is *premier*. In short, then *premier* and *prime minister* are not synonymous terms in Australian English.

as they are in other English dialects.

Since the late Nineteenth Century, our school system has been predominantly state supported and state run. When Australians talk of a *public school*, then, they mean a government school. Our non-state schools are called *private* or *independent* schools. This is precisely the reverse of the situation in Great Britain.

Again in industrial relations, we have established an elaborate arbitration system whereby workers in any occupation may apply to a special court through their unions for a determination of their wages. There has entered Australian English as a result the compound *award rates*, that is the rate of pay awarded by the arbitration court to a given group of workers. While this compound is made up of two common English words, *award* and *rate*, we can see how the combination has come to have a special sense in Australia.

It has often been argued that a major cause in the development of dialects is geographical separation. Cut off some members from their community, settle them in a different location and in time the languages of the resultant two groups will diverge. Originally Australia was some six months away from Great Britain. Before the invention of the aeroplane it still took four to five weeks to sail from one country to the other. The conditions for dialect development have thus been present. As we have just seen in the discussion of *prime minister*, *public school* and *award rate* it has actually occurred in Australia. We have further evidence that Australian English can properly be regarded as a separate dialect in the use of other terms³⁾. Take, for instance, the term *lay-by*, which in England refers to the part of a highway, and in Australia to a method of purchasing goods. *Digger*, for Australians, will immediately suggest 'soldier',

not someone or something that digs. In Australia we use *cuff* to refer to the ends both of sleeves and of trouser legs: we never use *turn-up*, the British English term, for the latter. *Chook* has replaced *chicken* or *hen* in Australia, *clock* may be used as a verb in the sense of 'hit', *rouse on* has the sense of 'reprimand', *identity* can refer to a person well-known in a district, while *never-never* describes the vast outback of Australia rather than the hire purchase system, as in England. Australian English very clearly has a separate identity.

At the same time it does not live in isolation and has not grown completely untouched by other development elsewhere in the world. Earlier I commented on the little borrowing that had taken place from the Aboriginal languages and suggested that a contributing factor might have been the low regard in which the Aborigines were held. Australians, however, have often been impressed with things American, and Australian English bears testimony to the linguistic fact that a socially and culturally important or dominant community will have a linguistic influence on those who come under its sway. We even have some who, like President Pompidou in France, object to the influx of American terms, but despite these protestors, the words have entered the language nonetheless. The influence first began during the gold rushes in the 1850's and from this period we can record *prospect* and *bowie knife*. Of more recent introduction, we might list *bottleneck*, *know how*, *software*, *cold war*, and many a slang expression including *fab*, *the greatest*, *scurgy* and *neat*.

But not always has American English won out. Australians still speak of *petrol* not *gas*, *eye bath* not *eye cup*. We say *from... to* not *from... through*, though the latter may be more precise. We have *tap* and *biscuit* rather than *faucet* and *cookie*. And somehow, despite what so many others have done, we have never

3) There is good evidence also in pronunciation, but this paper is concentrating on lexis.

adopted the American *you're welcome!*

Some individual and spasmodic efforts have been made to record Australian English but there is a serious need for an up-to-date, comprehensive dictionary of this form of English. The task, however, is far from straight forward. The main word stock of Australian English is shared with British English, and there would be much duplication with such dictionaries as the O.E.D. if one attempted a complete dictionary of the language. On the other hand, simply to restrict the coverage to Australianisms, that is those terms or senses of terms which are peculiar to Australian usage, would be unsatisfactory, partly because it would fail to reveal the structure of Australian English and partly because it could be misleading. For example, the word *banker* is used in Australia to refer to a river whose waters in flood time have risen to the level of the banks: we talk of the river running a banker. But the word is also commonly used as in other types of English to refer to a person who works in a commercial institution. To cover the one sense because it is distinctive to Australia and to exclude the other because it is shared with other English dialects could give a wrong impression, suggesting that the commercial sense of *banker* did not operate in Australia. Again *kerosene* and *paraffin* both occur in Australian English but refer to quite different substances. This is not the case in England where they are synonymous. Moreover one faces questions of social usage. In some American communities, for instance, a sharp distinction is made between an apartment and a flat, apartment being considered a better class of dwelling. The distinction is largely absent in Australia, and, in fact, the term *apartment* is rarely used, *flat* serving as the ubiquitous term. Often, also, the issue is a question of frequency of use. Both *lift* and *elevator*, *truck* and *lorry* are known and used in Australia. One is the British term, the

other is the American. A proper description of Australian English would need to record this fact and to comment on *truck*, for example, that it had largely displaced *lorry*. In the same way it would have to be observed in a dictionary of Australian English that while *face cloth* is recognised by Australians, their more favourite term is *washer*, even though they also use this word in all the senses given to it by other speakers of English.

This brief discussion of some of the problems facing the lexicographer of Australian English leads us naturally to the last linguistic principle I wish to consider in this paper, namely the relativity of terms. Words are prone to become endowed with connotations. These connotations arise in the context of our own individual environments and are not inherent in themselves. We tend then to interpret the word in the way in which we react to our environment. Take, for example, the word *long*. I was surprised when I was in England to be informed that Oxford was a long way from London. As I mentioned earlier Australia is a very large country and Australians as a result are quite used to travelling vast distances. Some of us may have to travel 1,000 miles before we reach the sea. To be told then that 50 miles, which is the distance between London and Oxford, was a long way seemed to me an exaggerated use of the word. Most Australians think of *long* in terms of hundreds of miles, not of tens of miles. Much the same thing occurs with *hot* and *cold*. What a person from Sydney regards as hot or cold is different from what a person from London or Tokyo feels. Most Sydneysiders, for example, would look upon 15°C as very cold! Or to take up a seasonal word, the term *fall* is virtually meaningless in Australia, a land as I have said of evergreen trees and little snow fall. You will rarely hear the word from the lips of an Australian, and if you come across it, invariably it will be in some publica-

tion produced in the Northern Hemisphere. We may talk of summer sales, spring meetings, of autumn and of winter, but never of fall, for it is outside the range of our experience. Indeed even those terms *summer*, *spring*, *winter*, *autumn* mean different things for us and we are regularly forced to re-interpret them in the speech of Englishmen and Americans. Spring in Australia occurs in September, October and November, not in March, April and May. Our seasonal terms then relate to different calendar months, so that while people in Japan and people in Australia may be thinking of essentially the same type of season when they say *spring*, they are not thinking of the same period of the year. The relativity of terms has many intricate ramifications which we need to explore far more closely than we have in the past if we are to understand fully the operation of language.

For the linguist Australian English is a fascinating microcosm, containing manifestations of the varied attributes of language. In this paper I have touched on some of these. It is so useful to have this additional evidence from a relatively new form of English of linguistic principles at work.

〔解説〕

Robert Donn Eagleson 氏は1931年シドニーに生まれ、B.A., M.A. をシドニー大学で得たのち、1968年か

(p.55よりつづき)

スピーチが上手になる為の不断の心懸けとして、優れたスピーチを数多く聞き、読み、そして分析することであるが、本書はその格好の材料を豊富に提供してくれるスピーチの手本である。

再に本書には、3本のカセットテープが一組になって付いていて、活用表現とスピーチ実例はもとより、彼自身が指導するスピーチクリニックや英検一級口頭試験モデルスピーチとビリー・グラハム博士のスピーチまでも録音されている。

私も音声学の訓練を受け、現在は指導する立場にある

ELEC BULLETIN

ら3年間ロンドン大学に留学し、1970年にQuirk教授指導のもとで、“A Linguistic, Stylistic Analysis of the Non-Finite Verb Clause in Shakespeare's Plays”によってPh.D.を取得した。現在シドニー大学英文科准教授の地位にある、ほかに、オーストラリア大学連合語文学協議会のSecretary、来年8月にシドニー大学で開催予定の近代語文学国際連合(FILMと略称、会長福田陸太郎教授)の第13回大会の組織委員長、その他を兼任する。このたび、FILMの第13回大会のための準備と打ち合わせ、およびわが国の英語学者との交流を目的として、さる2月末から6月始めにかけて滞日し、その間、東京と京都で数回にわたり講演した。

氏の主たる研究対象は、シェイクスピアの英語、オーストラリア英語、および英語教育の3つである。これらのうち、第1については、上記の博士論文が代表作であろう。これは、シェイクスピアの37篇の全戯曲にあらわれる不定詞、現在分詞、過去分詞のすべての用例を電子計算機を用いて統計的に処理し、従来のどの研究にもまして、より客観的かつ広範にシェイクスピアの準動詞の用法を調査し、あわせてその文体的機能を探ることを目的としたものである。第2の部門については、氏はシドニー大学に本拠をおく Australian Language Research Centre が刊行する Occasional Papers の編集者でありまた一昨年第1分冊を出版した OED の新補遺のオーストラリア英語に関する部分の寄稿者でもある。

このたびの本誌への寄稿論文は、はじめ東京教育大学大塚英語学談話会の本年3月例会において読まれたもので、オーストラリア英語の特徴を、主として語彙面について概説したものである。氏の訪日を契機として、さういふ北半球への影響が増大してきているオーストラリア英語にたいするわが国の関心が、一段と高まることが期待される。(東京教育大学助教授 宇賀治正朋)

が、このテープの吹込者の英語および米語は、いずれも初心者が安心して聞き、まねることができるものである。

このようなテープを沢山聞き、まねるなら自分の英語と public speaking に確かな自信を持てるようになることを請け合える。

(ジャパンタイムズ 四六判 192頁 ¥800)

(清泉女子大学講師 佐藤 寧)



英語表現あれこれ

—学生が知りたがる
生活体験的表現—



TOMMY UEMATSU
トミー 植松

きみ、顔にそう書いてあるよ。

Your face tells the whole story.

「顔に書いてある」というのだから、written in your face でいいわけだ。It's written in your face. といえばいいわけだが英米人はこんなとき、Your face tells the whole story. とか I can see it in your face. を使う。The whole story とか it は表現されていない相手の気持や背後の事情をさす。この表現は言いたくなくて黙っている相手、あるいは言ったことと本当の気持が裏腹の相手に向かって、「ちゃんとわかるよ、きみ。顔に書いてあるよ」というときに幅広く使える。ここで一つ特に注意をしなければならないのが、「顔に」の前置詞が on でなく in ということ。顔にすすでもついていたら on your face だが、抽象的な意味での「顔を見ると」は in your face である。同じような用法でよく間違うのが「新聞紙上で読んだ」の I read it in a newspaper. の in である。この場合「紙上」という表現に直接、間接的な影響を受け I read it on a newspaper. とやってしまう人が意外と多い。

〔例〕

You don't have to tell me. I can see it in your face.

「言わなくてもいいよ。きみの顔に書いてあるから」

I read it in the magazine, too.

「ぼくもその雑誌で読んだよ」

鬼に金棒だ。

It's arming a devil with an iron bar.

別にこの通りのきまり文句が英語にあるわけではない。こう言えば英米人にもある程度似たような感じかたをさせることができるというものである。だいたいあちらの devil は日本の節分のときのような愛嬌のある赤鬼、青鬼とはだいぶ違って怪奇ものの映画に出てくる悪魔みたいなものだから恐ろしさにおいては勝っても劣らない。この devil に全学連愛用の iron bar を持たせるのだから天下無敵というもの。iron bar の bar は一杯飲む「バー」以外に「棒」または「棒状のもの」なんでも意味する。板チョコが a chocolate bar, 「金の延べ棒」が a gold bar, 「門のかんぬき」が the bars of a gate. arm を動詞「武装させる」の意味に使うのは別に最近の用法でなく何百年もまえからある英語のあたりまえの使いかたである。The bee is armed with a sting. (はちには針という武器がある)とか, She is armed with an evil tongue. (彼女には毒舌という武器がある)などと言ったりする。この arm や devil を使わないで、「鬼に金棒」というニュアンスを出す表現としては ~ make(s) one doubly powerful とか It's additional strength. などがある。理論派の重役に実行派の重役が加われば会社は「鬼に金棒だ」と言いたいところである。

〔例〕

They were armed at all points.

「彼らは五分のすきもないように構えた」

If he joins us, it'll make our company doubly powerful.

「彼が加われば、われわれの会社も鬼に金棒というところです」

彼は方向音痴だ。

He can't find his way out of a paper bag.

音痴という言葉は自分でうまく歌が歌えないことをいうものだが、和英辞典には tone deafness とか inability to comprehend musical sounds と書かれてあることは不満である。音楽でいう「ぼくは音痴でねえ」は I have no ear. とか I have no musical sense. はちょっとオーバーな感じ。単に I can't sing. でじゅうぶん。たとえ歌は歌えなくとも、ショパンとラームスの差がわかり、ワルツとロックンロールの区別をつけるぐらい誰でもできることである。不必要にへりくだつてけんそんすると、聴覚神経がおかしいのでは? とうたがわれ

るかもしれない。I just can't sing. とかんたんに、軽く発音するほうがいい。

同じ表現法でゆくと方向音痴も can't tell directions でいいわけだ。「いやいや、わたくしはどうも方向音痴でしてね」など、You know I can't tell directions. と笑いながら言えばいい。しかし本来音に関する音痴という言葉が方向という一見無関係な言葉と結びついたおもしろさをうまく出すために、こんなときに英米人がじょうだん半分に言う表現をあげると、やはりこの can't tell one's way out of a paper bag である。頭からすっぽりと紙袋をかぶされたらよほど運動神経でも発達していない限り右も左もわからなくなるだろう。「猫にかん袋をかぶせてボーンとけった山寺の和尚さん」の日本の古い歌が思い出されておもしろい。

〔例〕

She can't find her way out of a paper bag.

「彼女、方向音痴だからな」

You can't tell directions, can you?

「きみ、方向音痴だなあ！」

おぬしなかなかやるな。

You're a genius.

「おぬし」はやはり you しかしかたがない。無理に Shakespeare の真似をして thou などと言うことはない。you は you でも [ju:] は正しく発音しないで、[jə] とあいまいな短音にするぐらいが関の山だ。「なかなかやる」というのは「かなりやる」——「人一倍できる」ということだから、a person who has great natural ability of some special kind——つまり a genius というところ。相手の能力、手腕をほめて言うときは You're a genius. と [dʒí:njəs] にうんとアクセントをつけて発音すればいい。

この表現の形は違うが同じような situation で使える言いかたに You're quite a ___er, aren't you? や You do a good job of ___ing, don't you? がある。パーティなどで、思いがけなく歌がうまかった友だちや、ダンスの達人みたいな後輩をほめるときはこれ。You're quite a singer (dancer), aren't you? でいい。また期待以上にうまく翻訳できた相手をほめるときもこれ。You do a good job of translating, don't you? 時と場合によって、前者 a genius の型と、後者 You're (You do)... の型を選べばいい。

〔例〕

My, you're a genius.

「いやあ——、おぬしなかなかやるな」

Good heavens! You're quite an artist.

「(相手の描いた絵を見ながら) これは、これはおぬしなかなかやるじゃない！」

馬の耳に念仏だった。

All my advice fell flat on him.

いくらいっしうけんめい忠告してもこちらが意とするところをくみ取ろうとしない相手にはがっかりする。こんなとき「私の忠告も彼には馬の耳に念仏だった」とか、似たような言いかたで「のれんに腕押し」「蛙の面に水」「馬耳東風」などと言う。

いずれも直訳した英文ではあちらの人間には通じない。似たような situation で、使われているなまの表現の中からいちばん日本語のニュアンスに近いものを搜し出すのが適切である。

したがって、馬も念仏も不要。fall flat というあまり文句がでてくる。fall flat は「失敗する」とか「ぱったり倒れる」という意味。「彼には」とか「彼女には」に必要な前置詞は on. advice の代わりに words を使うこともある。これだけがポイントで、All my advice (words) fell flat on him (her). と言えたら、ちょっと次元の高い言いかたになる。「あいつに言ったけど、駄目だった」ぐらいの乱暴な言いかたのほうが良いときには I told him. But no use. がすばりだ。ケース・バイ・ケースで判断するよりしかたがない。

ついでながら、「蛙の面に水」で思い出したが、動物を使って同じ感じを出す表現に like pouring water on a duck's back (あひるの背中に水を注ぐようなもの) がある。「馬耳東風」は be indifferent であるが、あえて耳を使った表現に固守すると turn a deaf ear というのがある。

〔例〕

All his advice fell flat on them.

「せっかくの彼の助言も彼らには馬の耳に念仏だった」

She turned a deaf ear to me.

「彼女は聞く耳を持たなかった」

(英語評論家・ラジオ講座「百万人の英語」講師)



『日本とアメリカ—比較文化論』

責任編集：斎藤 真・本間長世・亀井俊介
南雲堂、四六判、全3巻、各巻￥980

YAMAOKA SEIJI

山岡 清二

好むと好まざるとにかかわらず、戦後の日本は圧倒的なアメリカの影響下に置かれて今日にいたった。「アメリカがくしゃみをすると日本は風邪を引く」といわれた日本経済の対米依存度は、いまも基本的には変わっていない。

政治的にも戦後の議会制民主主義は、憲法制定の経緯をはじめとして、米占領軍の指導下で発足したのであり、安全保障体制はもとより労働組合の発達にいたるまで、アメリカの“息のかからない”ものはまずなかったといえるほどである。

さらに社会的な影響も驚くべきものであった。風俗習慣はもとより、生活の電化に代表される生活様式の変化は、多分にアメリカから持ち込まれたものだったし、なによりも「ものの考え方」が大幅に“アメリカ的”な特徴をそなえていったことが重大である。

「経済大国」になったからといって、日本はアメリカとの関係から完全に“独立”するわけにはいかない。政治理念やイデオロギーを超えて、わが国の対米関係は濃密、不可欠なものとなっているのが現実である。

× × ×

しかし日米関係は緊密であるだけに、複雑な問題を数多くかかえている。最近の数年だけを見ても、織維交渉、2つの“ニクソン・ショック”，在日米軍基地をめぐる紛争、通貨問題、食糧・石油などの資源問題など、短期的な衝突の例には事欠かない。

アメリカがベトナム戦争の失敗を中心に、国際的な威信と実力を徐々に失ってきたのとはうらはらに、日本は経済力の強化をテコにして相対的に国力を増してきた——というのが、最近の大まかな動きだが、それに伴って日米相互間の認識が大きく変化していることに、われわれは注意する必要がある。例えば、“アメリカは二流国になり下がってしまった”などという情緒的な対米認識が、一定の信ぴょう性をもって受け入れられかねないムードが、いまの日本には出てきている。

アメリカとのかかわり合いがおそらくどの国との関係

よりも緊密であるという現実にもかかわらず、学問的研究対象としてのアメリカおよび日米関係は、それほど進んではいないといわれる。西洋史学のなかで米国史なるものが長く“冷遇”されてきた事實を、怒りをもって指摘する研究者は少なくない。

「アメリカ学」の研究者でない評者には、日本の学界の実情を全面的に把握する力もないし、その学問的水準を判断する用意もない。けれども、『日本とアメリカ—比較文化論』(3巻シリーズ)を読んだ限りでの印象を、率直に言わせてもらうなら、日米関係を研究対象に据えた学問的 approach がすでに多くの成果を収めていることへの驚きである。

× × ×

本書は「広い意味での日米間の文化的影響関係を振り返り、その文化の共通性と異質性を対比し、両国の関係についての適切なベースペクトリーブを得る」ため「新しい視角から、日本とアメリカの比較文化論を体系的な形で示そう」とする試みであることが、〈はしがき〉で記されている。各巻の構成は第1巻・「異質文化の衝撃と波動」が主として歴史的視座から、第2巻・「デモクラシーと日米関係」が政治的側面から、第3巻・「生活のスタイルと価値観」で生活文化の諸相に立ち入って、それぞれ8つの論文(または対談・鼎談)を収めている。

全3巻を通じて日米関係のあらゆる側面が網羅されていることに、本書の第1の特色がある。歴史学はもとよりキリスト教、文学、政治学、社会学、労働問題、哲学、経済学、スポーツ、音楽、マス・コミ論…と社会・人文科学の大部分を動員した観のあるこの論文集は、従って一人の評者に到底書評しきれる代物ではない。

そしてなによりもこれが「学術論文」集であるという基本的性格のため、全巻1,000頁に近い本書を、初めから一気に読みとおすのは決して容易でないことを、評者のような非専門家は覚悟してからなければならない。

× × ×

しかしアメリカないし日米関係のどこかに一定の関心

を持っている読者には、"苦労が報われた" という読後感を約束できる本である。

内容が多岐にわたっており各論文をそれぞれ異なった筆者が書いているという特色は、読者の側からすれば、どの論文から読み始めてよいという"選択権"につながる。おそらく各論文に与えられたスペースは30~40頁ていどに制限されたものと思われ、そのためもう少しその続きを読みたくなるものも出てくる(評者の場合、第3巻の榎原胖夫「ビジネス・カルチュア」、三神正人「マス・メディアと大衆」など)けれども、概して力作ぞろいである事実は否めない。どの論文にもキラリと光るユニークな視点がうかがわえて知的興奮を促される。

本書はさまざまな読み方が許されるという意味でも得がたい性格を備えているが、一応オーソドックスな方法としては、各巻冒頭・序論に目を通しておくことだろう。亀井俊介論文(第1巻)、斎藤真・本間長世対談(第2巻)、本間長世論文(第3巻)の各序論は、単なるintroductionにとどまらず、それ自体でmacroscopicな展望を呈示する「総論」を構成している。あるいは、これら3つの序論をまず読んで、本シリーズの“さわり”に触れたのち、読者それぞれの興味に応じて精読すべき論文を決めるのも、賢明な読み方かもしれない。

× × ×

以下、ジャーナリズムに関係しながらアメリカと日本とのかかわり合いに特別の関心を抱いてきた一人の読者という立場で、本書が提起するポイントの一部を見ていくことにしよう。

ペリー来航(1853年)の半世紀も前から始まっていた日本とアメリカとの接触を、金井圓「初期におけるアメリカ文化の衝撃」は5つの場合に分けて整理する。漂流民などによる非公式な接触から、日本の開国交渉、対米使節団派遣にいたる過程で、関係者が米国にどう反応していくかの叙述は、小説ながらの面白さだ。ジョン万次郎がペリー来航以前、すでに国際人になっていたという指摘は、現代に示唆するところも大きい。

川西進「アメリカ人宣教師の果たした役割」はヘボン、ブラウンら初期の宣教師の困難な伝道活動を伝えているが、この論文の主役は明らかに内村鑑三である。内村のアメリカ人宣教師批判は痛烈を極め、それが「日本の基督教」の建設へと発展するが、そこには狭量なナショナリズムとは異質の、世界主義に裏打ちされた強じんな魂が躍如としている。日米間の“魂の接点”としてのキリスト教界に、内村というモデルを得た歴史的事実を、われわれは忘れてはなるまい。

エマソン、ホイットマン、ワーズワースら19世紀アメリ

カの文豪たちが、わが国の文学に及ぼした影響は、酒本雅之、野島秀勝の両論文に詳しい。そこで問われる中心的課題は「自我」であり、それが戦後文学では「アイデンティティ」の追求となる。大橋健三郎論文は日米両国文学のパラレル関係を指摘する。

佐伯彰一「アメリカ人の日本文化観」は、19世紀後半にアメリカ人によって書かれた3冊の日本論(R. Hildreth, *Japan As It Was and Is*, 1855; W.E. Griffis, *The Mikado's Empire*, 1877; P. Lowell, *The Soul of the Far East*, 1888)を取り上げ、そこに「アメリカ人の日本文化論の、いわば3つの核、または原型のごときもの」をみとめる。「冷徹な客觀性から、共感をこめた主体性へ、さらにまた主体的客觀的な総合把握へというパターン」は、戦中、戦後、近年にいたるアメリカ人の日本研究に踏襲されているというanalogyは卓見だと思われる。

ウィルソン主義が「大正デモクラシー」に及ぼした影響を中心的に論じた、三谷太一郎「大正デモクラシーとアメリカ」は、ウィルソン主義の普遍主義的側面と特殊主義的側面とを分析する。徳富蘇峯、森鷗外、美濃部達吉、新渡戸稻造、吉野作造、福田徳三といった代表的知識人たちが、W. ウィルソンに象徴される American democracyの世界的潮流にどう抗したかを、簡潔にまとめた記述のなかにあっても、内村鑑三の「反時代的考察」がひときわ、強い印象を残す。

冷静な歴史学的視点に支えられた麻田貞雄「日米関係と移民間問題」は、ウィルソン主義の“仮面性”を実証している点でも貴重だ。人種主義が外交関係におよぼす影響についての研究は未開拓であり、そこに今後の日米関係を占うカギがあるという示唆はきわめて重要である。

太平洋戦争(秦郁彦論文)から、占領下の日本「民主化」(綿貫讓治論文)、さらに戦後のアメリカの対日政策(有賀貞論文)までを論じた3論文は、歴史的記録を追うだけでなく随所に“意外な視角”を提示している。

本シリーズの独自性が端的に表われているのは、なんといっても第3巻であろう。戦後の日本人に“青春”を提供したアメリカ映画(萩昌弘論文)をはじめ、大衆レベルでの日米文化の接触を、多角的に追究している。なかでも「文化と反文化の問題」(本間長世論文)、「幸福の追求」の歴史的検討(明石紀雄論文)、「時間価値」の上昇で日米の大量消費型経済を分析する試み(榎原胖夫論文)など、示唆に富んだ研究成果が披瀝されている。

× × ×

日米関係に関する基本的な知識を総合的に集約した本シリーズは、数多くのアイディアを触発するという意味でも、貴重な労作だといえよう。 (国際問題評論家)



新刊紹介

■エレック選書『国際感覚と英語教育』

今村 茂男著

University of Michigan といえばわれわれにとってはフリーズ、ラドーなどが外国語としての英語教育を開発したところとして一時有名であったが、これとは別に Michigan State University というのがある。著者はその英語教育センターの教授で先頭まで所長をしておられた人。数年前に『朝日ジャーナル』誌に日本人の在米留学生が語学力が弱いために所期の目的を達していないどころか困った行動をしていて問題になっている、という報告をされた人として憶えている読者もあろう。

昭和34年ごろ東北6県英語教育指導者セミナーというのがあった時、私もお手伝いに行ったがそこに今村先生（当時愛媛大学講師）も出張されてこられ始めてお目にかかったが、そのきれいな英語と英語の歌にききほれた思い出がある。氏は戦後今日にいたるまで各地で行なわれている英語教育集中セミナーを始めて松山で行ないその方式を生みだした人としても記憶されるべき人である。

人伝えに氏は二世（サンフランシスコ生まれ）であり、日本の旧制の高商を卒業しておられると聞いていたし、またその流ちょうな英語からも、実は私は実利的タイプの人と決めこんでいたが、こんど本書を通読して氏は立派な教養人であり教育者であり研究者であることを認識した次第である。

著者は戦前と戦後に我々とはちがったユニークな経験をされ、特に昭和36年からはずっと上記の大学で各国からの留学生を指導し、世話をされてきたので、国際感覚、国際理解ということについていろいろな経験や観察ができるのである。その豊富な体験から、まず他民族と比較しつつ日本人の気質、性格などを浮きぼりにする。用例は当然コトバの問題もあるがコトバ以外の行動もとりあげている。

それから部分的には以上の論拠をふまえて日本人が英

語に弱い諸原因を考察しておられる。注目してよいことは日本人は、英語を習得することは根気のいることであるのに、安易に考えがちで、ちょっとした教科本や英語に強くなる式の本で出来ると思ったり、半年も留学すれば誰れでも英語がペラペラになると思いこんでいるようだとしている。それから教養か実用かというが「英語が使えないことには教養もなにもあったものではない」と正論している。

著者はついでに日本の英語教育改造論を展開されているが、これがなんと私の改革私案（『現代英語教育』49年7月号；『英語教育』49年5月号；JACET 通信 No.18 にそれぞれ部分的に分載されている）とほとんど同じ趣旨なのにはうれしくなった。

英語教育の場は国際感覚の養成の場としてまことに適当である…と著者は当然言っておられるものの、一方88～89ページでは「英語教育と国際感覚との間にはなんら必然的な結びつきはない…」とも言っておられる。国際感覚の定義にもよるが私などの視点は「必然的な結びつき」を認めたいほうで、それは言語と民族、社会、文化というものが密接に関連しているからで、これは比較言語人類学や比較言語社会学的に展開できると思うし、私どもの研究グループは手がけてきている。たぶん本書の紙幅の関係で著者は省かれたのだと思う。

英語教育関係者はもちろん、一般の人々には絶好の日本人論の本としても、著者の簡潔で円滑な文体のことわざって、読ませる本となっている。

(ELEC 出版部 B6判 148頁 580円)

(文部省教科書調査官 小笠原林樹)

■『キッシンジャー氏とプラント氏』

——大和資雄隨想集

大和 資雄著

文学博士大和資雄教授最近のエッセイ集である。教授は現代日本の文化的転換原理を欲望満足主義から欲望節制主義へと見る。東洋的仏教思想への復帰である。キッシンジャー氏とプラント氏の革新の論理も軌を一にすべきをとく。前者は幻想政策から現実政策に、後者は「ドイツは一つ」の政策に、ともに「協力による平和への途」を歩んでいる。

第一部「独立と協和の祈り」は、書名にあたるものを中心とする8篇の政治隨想であり、博士の政治的世界觀を披瀝している。

第二部「端役の馬丁の人生」は、シェイクスピアとそ

の作中人物になぞらえた著者自らの人生態度を窺わせてくれる「静かに生きる」ほか10篇の人生隨筆からなっている。実践本位の宗教的家庭教育の重要性を論じたり、著者の母校東京高師と東大文学部、それに著者勤続40年の日本大学の思い出の記には、日本英学の大先輩達との関わりが誌されている。

第三部「金婚旅行」は、国際ペン大会参加記を初めとする奥様との外遊紀行文5篇である。それに奥様の一文が続いている。淡々と物された短文に、幸福なご一家が躍如として描かれている。

「煩惱無尽誓願断」を唱え(29頁)、仏さまを念じ(4, 239, 262)、「他人に勝とうとする人生」よりも「己れに克とうとする人生」を尊び(127)、単純生活に徹することに努める(28, 263)大和教授である。まこと「東洋的仏教思想」の行者というべきか。内省に導かれ且つ勇気づけられない読者はないであろう。英学関係者は勿論ひろく一般の味読をお奨めしてやまない。

大和博士はたしか来年は喜寿をお迎えの筈である。お祝い申し上げ、靈肉ともに一層のご健勝を祈る。

(八潮出版社 B 6判 282頁 850円)
(明治学院大学名誉教授 高橋 源次)

■ English Communication Practices

——英語の対話演習——

ELEC 著

While teaching English conversation at Hosei University, I found *English Communication Practices* to be an effective and valuable coursebook for work with intermediate level students. In particular, this text can be recommended for its effective use of the situational learning technique and for giving the student abundant practice in learning to respond to a wide variety of situational-type questions in good idiomatic English. This, of course, presupposes that the student has a solid basic foundation in English sentence and question structure. If the student has this foundation, it has been my observation that, by using the situational stimulus-response techniques, he will begin to think in English, formulating original responses to questions according to sentence patterns he has been drilled in previously. In this way, this text, if used judi-

ciously by the instructor, can produce very satisfying results with intermediate level students, effectively preparing them for more advanced work later.

(ELEC 出版部 A 5判 全2巻各巻約156頁 860円)
(Lecturer, Hosei University Albert R. Lewis)

■『米会話 リダクションの演習』

(大井上滋・Susie F. Cowan 共著)

■『英語の音声法則』

大西 雅行著

英語がどうも聞きとれない、という歎きをよく耳にする。私のTalk Show (NHKテレビ) の視聴者からの来書も、圧倒的にこの訴えが多い。聞きとり能力をつけるための「確実な」方法とやらを求めてくる学生や社会人も少なくない。

むごいようだが私はまずこう答えている。心構えのレベルにおいてである。その一つは、母国語ででも理解できないようなことを外国語で理解できようはずはないという、しごくみやすい道理である。そんなあたり前などを、と反論される方もおありだろうが、実はこの点が本当に納得されていないらしい。政治であれ経済であれ自然科学であれ、ことばのいわば内実を形づくっているものに対し、何の知的興味も好奇心も示すことなく、ただ英語の羅列だけを追っている英学生があまりにも多すぎる。

たとえば経済に対して何の興味も、したがって知識もないものが、経済についての発話を理解できるわけがない。母国語だってそうなのだから、外国語の場合はなおのことである。つまり英語が判らぬのみでなく、特定の内実をともなった人間のことばが判っていないのである。その点を棚に上げ英語にのみ責を負わせている英学生がいかにも多い、と私には映る。読む際もむろん同様である。「こと」を離れて「ことば」がありえぬことを、いま一度確認しあいたい。

もう一つの厄介さは、これまた読むことと同じく、聞きとりが受け身の作業である、という点に由来する。話したり書いたりするときには、いわば自分の甲斐に似せて穴を掘ればよい。が、聞き読む、というのは、貴方まかせの年の暮れみたいなもので、われわれのコントロールを超てしまっている。だからむずかしい、ということになる。とくに視覚的な言語に生まれ育ったお互いにとっては、英語のような聴覚的な言語というのはどうも

勝手が悪い。したがって、英語の聞きとりはむずかしいものだとまず心に決することが肝心であろう。聞くともなしに聞いていても自然と耳に入ってくる母国語とは異なり、心ここに在らざれば聞くとも聞こえず、という趣しが外国語の場合には濃い。電車の中などで、いねむり半分でもあたりの日本語の会話がもうろうとした意識に入りこんでくることを考え、同じことが英語の場合にありうるかどうかを考えあわせれば、思い半ばにすぎよう。よほど精神を集中しても、なかなか聞きとれない。とくに限界状況においてはそうである。アポロ月着陸の同時通訳を求められた際に、私も痛いほど感じさせられたものだった。そしてそのときに何がしかの助けになってくれるのは、「こと」に関する知識であり、内容の把握である。

* * *

以上的心がけの上に立って、さて具体的な手段いかん、という方法論に入るわけだが、われわれがもっとも難渋するのは個々の音がみせるいわば「化学変化」である。実は小著『英語の話しかた』で私もこの化学変化の大切さを強調し、それを身につけることによりヒアリング能力の伸長をはかるよう訴えたのだった。大西雅雄博士の用語をお借りして、集約法と呼んだのがこれである。アアイヤニナツテシマッタと表記されていても、現実には少なくとも東京方言を話す日本人は、アヤンナツチャッタと発語する。したがって日本語を学ぶ外国人が表記どおりの音声を浴びるほど耳にし口にしても、実際の聞きとりにはほとんど無力なのと同じである。

ところが、専門の音声学者は、どうしたわけか、個々の音声のいわば「物理的」な分析や解説はさておき、その発語内での化学変化にはあまり関心を払ってはくれなかつた。いや、われわれのような素人の目に触れるような実戦向けの形では、と補足すべきであろう。小著のことばを援用して、実験科学を離れ野外科学にまで手を伸ばしては下さらなかつた。といいかえてもよい。だから小著の読者やテレビの視聴者から集約法についてのまとめた参考書や実践的な教材をと求められると、正直いって苦労した。E.A.RichterとW.W.Smithという2人の米人教師による *Remedial Drills for Contracted & Reduced Forms & Patterns with Intonation Problems* と題した便利な小冊子があつたが、これは私家版で公刊をすいぶん獎めてみたが、どうもラチがあかない。実は困っていたところだった。

そこにあいついで上記の2書が世に出た。大西(独協大)助教授の本を原理面に重点をおいたやや理論的な著作とすれば、大井上(明治学院大)教授の本は、より実

践面に力点をおいた応用篇といえるであろう。とくに後者にはテープも付されており、大へんに便利である。おそらくこの2書は、相互排除的にではなく、相互補完的に集約法への難路を切り開いていってくれるであろう。この2書の登場は、日本の英語教育が漸くにして野外科学への展望を啓きつつあることの明らかな証左であり、その故にも3人の著者に心からの敬意と謝意を払い、多くの英語学習者を裨益するであろうことを信じ、かつ望むものである。

ただ、聞きとり能力の真の増進には、上述の心構えの部分が不可欠な前提であることをくりかえし強調しておきたい。と同時に、『なんで英語をやるの?』の著者が渋らしている疑惑、すなわち省略形をはじめ教えることの妥当性(の有無)、ならびに英語は腹式呼吸の言語であるという見解に、3人の専門家がどう対応されるのか、ご高見の開陳を期待したい。中津燎子氏の体験的英語(教育)論に共感させられる点が多かっただけに、専門の音声学者のご意見がぜひとも待たれるのである。

(『英会話 リダクションの演習』語研 B 6 判 118頁 480円;
『英語の音声法則』学書房 A 5 判 70頁 350円)

(国際商科大学教授 國弘正雄)

■ **Problems in English**—An Approach to the Real Life of the Language

Dennis Keene

by Tamotsu Matsunami

This slim, unobtrusive and inexpensive volume, although published five years ago, contains so much refreshing good sense about the English language and the learning of it, that it would be a shame for it to go out of print unreviewed.

Keene, the author of the body of the book, makes the point that acquisition of a "feeling" for the grammar of a language is essential to the learning of that language. This "feeling" for the grammar is acquired through exposure to the language accompanied by the use of our understanding. Keene stresses that grammar books are more often a hindrance than an aide to student's understanding: either they are too big and complex or the rules they contain are too simple, explaining little and leaving too many exceptions. What is needed

are explanations that go to the heart, the essence of the language, and give help with those parts of the grammar that cause the learner the most difficulty. The explanations "should gradually be forgotten as the feeling for the language they are explaining gets stronger." (p. iv)

The book deals with problems that arise for the Japanese learner in two main areas of English grammar. It has four sections on problems connected with the noun, and eight sections on problems that center on the verb. Keene deals with each problem clearly and insightfully, with much use of well-chosen examples. At the end of each section there are one or two pages of well-designed, thought-provoking exercises. In addition at the end of the book there are eighteen pages of exercises written by Prof. Matsunami.

The book is aimed at the Japanese university student. It should also be of great value to the fledgling "native-speaker" English teacher in his struggle to understand both his own language and why his Japanese students are having trouble with it.

(Kenkyusha B 6 pp. 140 ¥320)

(Senior Instructor, The ELEC Institute

Richard D. Moores)

ど身近なものから、科学、労使、公害、政治といったような分野にまで及んでおり、アメリカ生活の重要なポイントが概ねカバーされていると言えよう。Rooms (pp. 24—25)を見れば、部屋や家具の名称 (wash basin, head-board, throw rug, grate, etc.) ばかりでなくその機能が判然とするし、Drugstore (pp. 86—87) をいかにことばで説明しようとしても1枚の絵には到底及ばないであろう。人物の動作や事物の配置もきめ細かく表出されている。諸所に挿入されている会話——例：“Oh, there goes tomorrow's breakfast!” (p. 10), “Come on, dear! You don't have to buy out the store.” (p. 82) ——はアメリカ的なユーモアに溢れていて興味深い。

Part Three “Classified Expressions” は(1)「海外旅行」,(2)「日常生活」,(3)「社会生活」,(4)「趣味とスポーツ」,(5)「今日の話題」の5章から成り、約450の例文が収められている。「いざれも現在アメリカで使われている口語英語」という編者のことばは第4章までには当てはまると思うが、第5章は文語的な表現が多く、いささか場違いではなかろうか。解説の部分に有益な指摘が多い。巻末には Part One, Part Two で用いられた語句の対訳リスト (“Translation”) と目次が付けられている。

先に刊行された『動詞篇』よりも万人向きであり、充実しているというのが私の実感である。豊かな渡米経験を活かし、英語教育界に新風を送りこまれた編者國弘氏の功績に対して心から敬意を表したい。

(ペナジアン A 5 判 226頁 1,600円)

(東京大学助教授 長井善見)

■『Pictorial English Handbook

英絵ハンドブック——名詞篇』

國弘 正雄編著

まえがきの中で編者は本書のねらいを「Duden のヤング向け」と述べておられる。up-to-date な用語、軽妙なイラストレーション（色刷り）を通して英語学習者にアメリカ生活の実体を感じさせようとする編者の意図は見事に成功しているといってよい。ヤングは勿論のこと、渡米するビジネスマンや英語の先生方にもおすすめしたい本である。

Part One “Look and Learn！”, Part Two “Look and Speak！”はそれぞれ32面の絵を含み、各画面では1つのテーマの下に様々な事物・人物の名称が記載されている。住居、食事、衣服、乗り物、娯楽、動・植物な

ELEC BULLETIN

■『英語1分スピーチ』

トミー 植松著

『英語1分スピーチ』を読んで、スピーチについて痛く考えさせられた。本書の50の実例は、彼が自分で体験した数百回のスピーチを思い出して書いたもので、英語スピーチの第一人者の名にふさわしいものばかりである。観迎会、祝賀会、誕生日、あるいは結婚式でのスピーチなど12項目をもうけ、それぞれの会場 (occasion) に合った実例は本書の魅力である。また、各章の始めにスピーカーの心得とか、スピーチの長さとか、スピーカーのマナーなどを簡潔に説明しており、とかく忘れがちな「常識」を喚起しているのも彼のスピーチに対する情熱と、初心者に対する細かな配慮の現われであると思う。

(p. 47へつづく)



►1974年 ELEC 夏期英語教育研修会

本年度のELEC夏期英語教育研修会は、文部省の後援のもとに、中学校および高等学校の英語科教員を対象としてつぎの通り実施される。

A. 前期ELEC会場（通学制）

昭和49年7月29日から8月10日までELEC英語研修所において開催。募集人員150名。参加費13,000円。

B. 後期八王子会場（合宿制）

昭和49年8月18日から8月24日まで東京都八王子大学セミナーハウスにおいて開催。募集人員60名。参加費31,000円。

なお、詳細については25円切手同封のうえ、東京都千代田区神田神保町3の8ELEC英語研修所「夏期英語教育研修会」係あて、募集要項を請求されたい。

►ELEC 夏期英語講習会

ELECでは一般成人を対象に「夏期講習会」を下記要領で開催する。

1. 会期 7月29日（月）～8月16日（金）
2. コース（初級、中級）
 - (1) 午前の部（9時30分～12時5分）
 - (2) 夜間の部（6時～8時35分）

願書は20円切手同封のうえ、東京都千代田区神田神保町3の8ELEC英語研修所「夏期英語講習会」係あて請求されたい。

►Graded Direct Method Summer Seminar, 1974

- 会期 1974年8月19日（月）～23日（金）
会場 日本YMCA同盟東山荘 御殿場市東山 Tel.
(0550) 3-1133
定員 一般セミナー 50名
中級セミナー 30名
会費 22,000円（宿泊費を含む）
なお、詳細については〒221横浜市神奈川区鶴屋町3-32横浜外語アカデミー内GDM英語教授法研究会東京支部GDMセミナー係あて問い合わせられたい。

►TOEFL 模擬試験

TOEFL受験者のための模擬試験が9月20日（金）午後1時からELEC会館で実施される。受験希望者はELEC「TOEFL模擬試験」係宛願書を請求されたい。

►ELEC 英語研修所「TOEFL」受験料

TOEFL受験のための短期集中準備コース。Listening, Reading, Writing, Structure, Vocabulary の5つの領域について、テスト、解説、練習、討議を行なう。

第3期 9月17日（火）～11月7日（木）

►第10回 ELEC 英語教育研究大会

ELEC英語教育研究大会は11月2日（土）ELEC会館において開催される。内容は講演、実演授業他、詳細についてはELEC同友会宛問い合わせられたい。

►Young Visitors to Britain 1974

英国政府観行庁より出された英国への留学生または旅行者のためのパンフレット。入国までの手続きや注意事項、大学等への留学についての概要その他が掲載されている。パンフレットの請求は〒101 東京都千代田区神田神保町岩波神保町ビル British Council へ。

本誌の年間予約購読をおすすめします。購読料は年額1,700円、送料は当出版部で負担いたします。なお、本誌バックナンバーの在庫が若干部ありますので、ご希望の方は当出版部へお申し込み下さい。

44号（1974, Winter）【特集】日本文化の国際性／外山滋比古・斎藤寛治・武田勝彦・R.C.Bedford／鼎談國弘正雄・K.D.Butler・山本正（350円）

45号（1974, Spring）【特集】オーラル・アプローチ再評価／安井稔・伊藤健三・山家保／座談会 関部直光・下村勇三郎・井田米造・石川喜教・松下幸夫（430円）

英語展望 (ELEC Bulletin)

第46号

定価 430 円（送料 85 円）

昭和49年7月1日発行

©編集人 中島文雄

発行人 竹内俊一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12
電話(266)2111(案内台)

発行所 エレック ELEC (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8
電話(265)8911~8916
振替・東京11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC